

鹿児島県史料

薩摩藩法令史料集五

解題

『薩摩藩法令史料集 五』は歴代制度卷之六十三～卷之七十一を所収する。

歴代制度卷之六十二までは項目編成であるが、卷之六十三からは編年を基本としている。しかし完全に編年されているのではなく、若干年次は錯綜する。

しかも、卷之六十三～六十五（仮にA群とする。順番は六十四・六十三・六十五が年次順であり、文書所収期間は寛永三年五月～明和四年十二月）と卷之六十六以降（仮にB群とする）とは編集基準が異なる。また、B群は（一）卷之六十六～六十八（所収期間は享保二年九月～寛政八年八月）、（二）卷之六十九～七十（所収期間は寛政八年九月～文化十一年十二月）、（三）卷之七十一（所収期間は文化十二年二月～文政四年九月。卷数の下には「文化十三年ヨリ文政十四年マデ」とあるが、単純な誤りであるかどうかは不明）の三つに区切られているが、文書採録の基準には共通するものがある。

一

まず、文書採録の基準について検討する。

A群については、卷之六十四の冒頭にある明和五年十二月吉日付の文書により編集の意図が示されている。すなわち、つぎの通りである。

鹿兒島御廻文留為數簡臨事依難見出、其要文令拔萃之為当務ノ枢機、然モ御所帯方ノ留帳ハ不拔得、此二冊モ不能再撰落字脱章必矣、就本帳令受用、古今之變易能見分之裁断有之者也

江戸時代の行政は先例主義を基本とするため、以前に出された法令を参照することは不可欠である。しかし、参照の必要ができた時すぐさまその部分を見いだすことを容易にするため、必要度の高い法令を抜き書きしてまとめたり、項目別に整理しておくことはよく行われている。すなわち、政務遂行のマニュアル本が作られるのである。

右の史料により明らかのように、廻文留の参照を容易にし、「古今之変易」をよく見分けるために主要な廻文を抜萃して二冊にまとめる作業が明和五年に行われたのであり、それをそのまま流用して歴代制度に取り入れたのである。第一冊は卷之六十三・卷之六十四、第二冊は卷之六十五である。第一冊については、卷之六十三の末尾に「右寛永九壬申年ヨリ正徳三癸巳年九月迄、凡年数八十二年」とあり、また、卷之六十五の末尾には「右、正徳三癸巳年ヨリ明和四丁亥迄年数凡五十五年、二冊、合百三拾六年也、明和五戊子年書拔畢」とあることから、第二冊目であることは明らかである。

一三六年という長期間であるが、採録されている史料の年次的ばらつきは大きい。寛永三年から元禄十六年までは、数ヶ年を除き皆無、または一、二点であるが、宝永から享保初めにかけて採録数が激増する。その後は、享保九年、同二十年、元文二年、同三年、寛延元年、同二年、宝暦六年など五点以上採録されている年を除くと、概して採録点数の少ない年が多い。宝永元年は島津吉貴が藩主となる年であり、吉貴の治世期間と採録文書数の増加期間とは一致する。内容面について後に触れるが、文書の点数からいえば、後の前例となる諸規定がこの時期に定まったことを意味しており、いわゆる近世的薩摩藩の確立期であったことを示唆している。

B群は享保二年から文政四年までであるので、享保二―明和四年の期間はA群と重なるが、文書の重なりは少ない。これがどのような理由によるかは分からないが、同文書の重なりが多少ともあることは、A群の文書を省く方針であったとは言えず、文書選択の基準が異なっていたことを示すであろう。

例えば、享保三年は、Aには九点、Bには一三点が採録されている。この内、双方に採録されているのは、(一) A

の四八六一号文書（Bの四九九五）・（二）四八六四号文書（Bの五〇〇四）の二点である。

（一）は諸座付の者の赦免士・座付土成など、土成についての規定であり、（二）は家老・近習衆・小姓などの勤め方についての呼称（月番、御用番、当番）についての規定である。

では、重なっていない文書はどのような内容であろうか。

Aの七点は、①自分の家を禿して嫡家などを相続することなどの件、②諸人よりの訴えについて同役申し合わせるこの件、③直元服などにつきお札の件、④御直元服などの家格一覧、⑤服忌令は公儀の定めに従うことの件、⑥出火につき組頭・支配頭へ申渡、⑦主人・父母殺しの罪刑、である。

Bの二点は、⑧御内証にて目録進上の件、⑨馬廻を小番と呼称変更の件、⑩馬廻と小番の使い分けの件、⑪御役人などへ下され米・銀の呼称変更の件、⑫上下の節供に出家などを加えない件、⑬高奉行座入り口に高所と記すことを禁止する件、⑭奉公を申し付けられない者の呼称変更などの件、⑮羅紗を合羽・柄袋等を使用することを禁止する件、⑯御免の者の仏詣の件、⑰羽織・袴着用などの件、⑱飯米は勤め日数による件、⑲御国行などにつき御賦数の件、⑳薬代などの件、である。

（一）は薩摩藩の身分制度に関わる重要な規定であり、（二）は行政上の混乱を防ぐための呼称規定である。いずれも制度・行政上重要な法令であることは確かである。これに対し、重複のないAは、相続（①）、訴訟・罪刑（②・⑦）、家格（③・④）、服忌（⑤）、出火手当（⑥）であり、Bは、手続き規定（⑧）、呼称に関する規定（⑨・⑩・⑪・⑬・⑭）、禁止事項（⑫・⑮）、服忌関係（⑯）、服装規定（⑰）、給付関係（⑱・⑲）、薬価規定（⑳）である。

大づかみにいえば、Aは藩維持のための制度面を重視し、Bは行政面に関わる規定などに採録の基準を置いているようにも見える。確認のために享保九年の場合について見てみる。

享保九年のAは七点、Bは四点である。この内、重複しているのは、供人数を削減するために規定した一点（Aの四

八九六、Bの五〇三五)のみである。

重複していない他の文書は、Aでは、①米価と販売に関する規定、②家老への帯刀・服装規定の達、③服装規定などについての家老達、④諸役人が大身家で馳走を受けることの禁止、⑤太刀進上・馬進上の件、⑥月並御礼の件、であり、Bでは、⑦祐筆所は用事外出入り禁止の件、⑧出火時の駆け付け場所の規定、⑨年頭御座配を年頭御礼着座と呼称変更、である。

Aでは、①・④のように、行政上の処置、役人の服務心得などもあるが、②・③・⑤・⑥は身分制に関連する帯刀・服装規定であり、制度が絡んだ規定であると言える。これに対し、Bの⑦～⑨は行政上の規定、呼称変更である。

享保九年の事例でも、先に見た三年の基準が一応貫かれていると考えてよからう。

なお付け加えるならば、享保三年のA・Bの文書二点の文書は一点も「鹿児島県史料 旧記雑録追録 三二(以下『追録』と記す)には収録されていないが、同九年Aの文書では⑤の文書一点が収録されている。しかし、逆に、『追録』三二の享保九年には、「年頭御着座」に関する文書(一六七八・一六七九)があるがAには採録されていない。九年の⑤の冒頭に、「八朔御太刀・御馬進上仕来候家々、此跡進上ノ場所段々相替候」ため、「年頭御礼着座ノ御格式準」じで定めるとするのであるから、その元になる「年頭御礼着座」の文書は制度に関わる規定変更であるから、当然Aには採録されるべきものである。このように、制度上の基本文書を採録することを意図したAでも網羅しているわけではないが、本法令集は『薩摩藩法令史料集、四』までの採録文書とは若干の重複はありながらも初出の文書も多く、薩摩藩研究にとっては欠かせないものであることは間違いない。

二

以上、B群の文書がA群のそれとは異なる基準で採録されている可能性を指摘したが、さらにB群の文書の編集上の

特徴を挙げれば、つぎの通りである。

(1) つぎに例示するような系図に書き込むべき内容の文書が所収される。

①勤功・役職任命

島津将監殿

右、於御前寛陽院様御代ヨリ首尾能相勤候二付、御城代被仰付候、御家老勤モ此内之通可致候、加判ハ御免被成候、席ハ御家老ノ上座被仰付候、御役料此内之通被下置候(五〇二三)

②改名

一於久殿御事、今日於巖殿卜御名御改被成候(五〇二九)

③賜姓

又三郎様御儀、今月四日松平之 御称号御拝領、御代々御嫡子様ハ松平御免(五一〇三)

④格式

御綾之御方、格式御国元江戸共ニ 嶺松院様御同格被仰付、着ノ当日ヨリ御名様卜唱並書付等ニモ其通可致候、御順之儀ハ 嶺松院様次ニ被被仰付候(五一七五)

⑤誕生

竹姫君様御安産、御女子様御誕生、於菊様卜御名被進候、菊ノ字遠慮(五〇五八)

⑥婚姻

菊姫様、旧臘七日松平修理太夫様へ御婚姻被為整候(五一四五)

⑦死去

御前様、御病氣御養生不被為叶、先月廿六日被遊御逝去候(五一八〇)

(2) 文書の省略がなされている。

A群でも原文書が省略されている事例はあるが、極端な省略はない。しかしB群は原文書の原型を留めない省略がなされている場合がある。

I ① 一鉄砲打候儀、御城下ヨリ五里内御禁止

一御奉公ニ付田舎へ参候者、鉄砲持参ノ儀無用(五〇一七)

② 一鉄砲打候儀、式里余方御免被仰付候得共、向後ハ以前ノ通五里余方御免被仰付候、尤、近名狩小摺等御免被仰付候人モ、向後五里余方内ニテ打候儀無用可仕候、此旨与中へ不洩様ニ可被申渡者也

十二月十七日

御家老座印(四八七三)

II ① 一石塔ノ文字箔ヲ込候儀、一切無用申付候(五〇三二)

② 一石塔ノ文字ニ箔ヲ込候得共、自今箔込候儀一切無用申付候条、此旨与中・地頭所・私領・支配中不洩様可致通達候、以上

卯十二月

藏人

取次

讚良善助(四八八八)

I—①の年次は確定できないが、享保五年の部分に入れられており、また、第二条があることから同四年のI—②とは異なる文書とも考えられるが、第一条は本来②のような文書の内容を省略筆記したとも推定される。同様のことがII

について見られるからである。

Ⅱ—①も年次は記されていない。また、文書の一部の抜き書きであることは一見して明らかである。Ⅱ—②は文書の体裁も整っており、前半の内容部分を受けて省略筆記されたものがⅡ—①であると予想することは十分可能である。

また、B群では、Ⅱ—②の後半部分にある文書の通達先などに関する部分を省略する方針があったようである。比較する最後の部分のみをつぎに示し、この証左としよう。

Ⅲ(省略) 若大形ノ儀有之候ハ、親類共可為越度候、

十二月(朱書の記載略)(五〇五五)

(省略) 若大形ノ儀有之候ハ、親類共可為越度候条、此段可申渡置旨被仰付候、

但、地頭所支配有之面々ハ地頭所・支配中へモ可被申渡候、

亥十二月 (内匠・弾正・藏人・空・大藏)(四九〇五)

Ⅳ(省略) 其外ハ誰ニテモ妻ト書付可差上候、

正月(朱書の記載略) 主計 (五〇六三)

(省略) 其外者誰ニテモ妻ト書付可差上候、此段御勝手方へ相達、御役人限可致通達候、 以上

享保十九寅正月 主計 (四九〇九)

V(省略) 尤、於江戸被成御免置候者御当地ニテ猶以被成御免候、

十二月(朱書等略) 大藏 (五〇九五)

(省略) 尤、於江戸被成御免置候ハ御当地ニテ猶以被成御免候、

右ノ通被仰付候間、承知可仕面々エ不洩様ニ可被申渡候、以上

但、大御目付以上ノ御役人エハ申渡ニ不及候、

午十二月 大藏 (四九三〇)

VI (省略) 脇方病用付療治相頼見廻候儀不苦候、

三月 (朱書等略) 左京 (五〇九六)

(省略) 脇方病用ニ付療治相頼見廻候儀不苦候、此段御医師工申聞被置候、

右ノ通、表方へ致通達、御側方・御勝手方エ者写ヲ以可相達候、以上

元文四未三月 左京 (四九三二)

三

先に、A群の文書数の分布から吉貴期が近世薩摩藩の確立期であるとしたが、ここでは内容の面から見てゆく。

第一に、制度・行政の基本である役所・役名の変更についてみてみよう。

役所や役名の変更は、島津吉貴期と重豪期に行われている。重豪期の変更は安永七・八年と天明三年に行われた。安永七年には、納殿を御広敷、札明奉行所を御裁許方などのように名称を変更し(三七三三)、八年の変更は御記録方を御記録方係、異国方を異国方係と呼ぶように「方」を「係」への変更を基本とする変更(三七三四)がなされた。

また、同八年には座付士を「何方付与力」、外城衆中を「郷士」、足輕を「同心」と改称した。さらに、天明三年正月には「係」を「掛」へ文字変更するよう触れ達しており、二月には実施された(五四〇二)が、御書院方掛が御書院方

となる稀な例もある。同年には嚮役を郷士年寄、組頭役を組頭、横目役を横目と郷三役の名称変更を初めとして、郷の郷士役・百姓役全ての名称を変更した(五四〇三)。これは、外城郷士を郷士と記載するように厳命し(二七四四)、在方を「名」と呼んでいたのを「在」と呼ぶようにしたこと(五四二九)と関連する変更であったと言える。

すなわち、重豪期の役名などの変更は、彼の実施した「都化」政策に対応した開化政策、全国共通化の動きであり、薩摩藩独自の名称を廃することと名称の画一化が目的であった。これに対し、宝永二年の吉貴の変更は、評定所を御家老座、御国遣座を御勝手方、日帳所を御用人座と変更(四八二四)するように、藩政の中枢役所の名称を薩摩藩独自のものから全国に共通する近世的名称へ変更するものであった。全国に共通する名称化という点では共通する面があるが、その先鞭は吉貴により付けられていたのである。また、同三年には横目頭を大目付、横目座取次を大目付座取次と改称し(四七〇六)、享保元年には客屋預りを御春屋役(四八五五)、同三年には馬廻を小番とし(四九九七)、今まで明確に規定されていなかった小普請・小普請並を明確化した(五〇〇二)。

第二に、支配関係の基本である家格、身分などについて規定した。

宝永八年、御一門・大身・独礼の家柄を規定し(四七五二)、一所持・一所持格・寄合・寄合並の家を確定(四七六一)した。正徳三年には高上がりについて規定し、家格不相応の高上がりによる家格の乱れを阻止することを意図した(四八四二)。享保三年には赦免士規定(四八六一)を設け、猥りの士成を規制した。

第三に、組の改組と組支配の徹底をはかった。

城下士の支配は組による支配が行われる。組自体の始まりは寛永期であるが、組支配が効率的に機能するようになるのは宝永二年の改組を経てからである。

宝永二年の「覚」(四八二五)には「鹿兒島中組ノ人数方々入交候付、此節被相改取寄ヲ以組分被仰付候間、其旨可致承知候事」とあり、地域ごとに組み分けが行われた。これにより、組頭などによる組支配が徹底する体制ができたの

であり、宝永三年、組頭・番頭の精勤を求めると共に（四八四〇）、組頭の心得、指示が相次いでだされ（四七〇一・四七一一・四七一五）、組の支配の実績がつくられた。

第四に、風俗について規定すると共に、学文・武芸を奨励した。

泰平の世の中になり、武士が為政者としての役割を果たすには身の修養が必要であった。特に薩摩藩では武士子弟の風俗の乱れ、学文・武芸の怠惰が問題となっており、その矯正による綱紀の立て直しが必要であった。

宝永二年、吉貴は特に外城士に対し「武芸ノ儀ハ勿論山坂ノ歩行早馳リ、其外達者業致肝要」ことを求め、特に「若キ者共ナマヌルク無之」ように地頭の精勤をもとめた（四八三七）。さらに、宝永三年には、学文・武芸の嗜み、士としての風俗を守ることを含めた治世全般の論書（四八三八）を出し、さらに城下士の武芸奨励を喚起した（四七〇四）。また、吉貴は薩摩藩の学文の遅れを認め、その打開方針をつぎのように示した。

一御国元へ文才有之候モノスクナク成候間、学文ニ器用可有之若キ者ヲ江戸・上方・長崎ナトへ被差越、稽古可被仰付候間、士以下者ニテモ其器用可有之者ヲ相糺可申上候、勿論年立候者事広マナヒ候儀可難成候、十三四歳ヨリ廿四五迄ノ者ヲ相糺可申上旨御意候、以上

十一月

右ノ通被仰出候間奉得其意、以下ノ者迄不洩様相糺可申出候、地頭所・私領へモ可申渡由御差図ニテ候、以上
戌十二月（四七〇五）

武士以下の者までを含めた修養生派遣を考えていた。これは藩外への学文修行の派遣を企画し、また実行した後の斉宣・斉彬の計画の原型であり、武士以下の者までを含めたところはさらに画期的なものであったが、実現したかについては不明である。

この後も、宝永七年、武士の子弟の行跡・風俗立て直しについての論書（四七四三）を出し、若者の行動・風俗是正

を達し（四七四四）、文武の励行と綱紀肅正に努めた。

この他、後の規範・規則となる宝永三年の諸節句の服装の規定（四八四一）、宝永五年の商人の領内通行規定（四七二二）なども定めた。

以上のように、吉貴期には、制度・行政・風紀など以降の薩摩藩の法規の源となる法令が出されており、近世薩摩藩の原型が形作られた時期であった。

四

その他、本法令集で注目すべき事柄について二、三触れよう。

（1）知行物定

「郡所規帳抜書」の表題を持つ四七七七号文書（A）は、伊地知季通の編集した『薩隅日田賦雜徴』（刊本としては『近世地方経済史料』第一巻に所収）に収録され、通常「知行物定帳」（B）として知られている文書である。Aは万治二年七月晦日付で、郡座の菱刈孫兵衛・汾陽次郎右衛門・中村早太・最所右近名で出され、Bは同年八月朔日付で家老新納右衛門・島津筑前から出されている。Aには、「右条々、此度相定候間、堅此旨相守候様ニ可被仰渡候、此等ノ段任御下知候」とあり、Bには、「右之條々此度相定候間、何れも可被致其心得、若此外に領主より百姓江無理非道之儀被申付人於有之者可為御沙汰候條、右之條々堅與中へ可被仰渡者也」とある。すなわち、郡座で決定された文書が国遣座（御家老座）へ届けられ、家老名で与中へ触れ渡されたものであり、全く同一の文書ではない。しかし、本文部分に体裁・内容共に異なるところがあるのはなぜなのであろうか。

体裁の違いは文書の冒頭にある。A・Bの順につきに示す。

一 高壱石ニ付定代三斗五升代

右、依年風損・干損ニ逢、百姓ヨリ郡座工申出モ候ハ、相談ヲ以如此中検者可相立候事、

一高老石ニ付役米三升ツ、

但、万治二年如此被仰付候

右ハ、依年公役米多少可相定事

一御蔵入并諸給地知行高、老石に付定代三斗五升。

外に

高老石に付役米三升、但従年役米多少可相定事、先当年如斯相究也。

右従年風損・干損に逢、百姓より郡座江申出候はゞ、以相談上検者可相定候。

A・B異なる文書からの引用であるので、どちらが正しいかは判断できかねるが、強いて言えばAには後の人の手が入っていると考えられる。役米の記述に、「万治二年如此被仰付候」とあるが、同年に出される文書に「万治二年」とわざわざ記すことはありえず、この場合、Bのように「当年」と記すのが慣例である。また、納物の一部は代銭納入が可能であることになっているがAではその代銭が記載されていない。これは原文書の違いであるのか明確でないが、そうだとすれば面白い歴史課題となるであろう。

内容に違いのない体裁の違いは、歴史史料としての価値をそれほど損なうものではない。しかし、A・Bの比較により、両者に単純な誤りとより重大な間違いがあることが初めて判明する。Aでは、「灯松老束」の前行に「七月盆之納物」、「風構用納物」のところで、「カラハリ老本」と「ワラ菀四枚ツ、」の間に「長木五本」が記載漏れとなっており、Bでは、「水子用之□□」と空白部分となっているところが「野菜」と言うことが分かる。

事実問題としてより問題となるA・Bの違いを一ヶ所ずつ挙げておく。

A 一夫遣十五才ヨリ六十才マテノ者面付壹人ニ付年中ニ夫遣五人ツ、可召仕事、

B 一夫仕拾五歳より六拾歳迄の者、面付一人に付年中拾式人づ、可召仕事。

A 一從遠方中途ニ泊候時ハ飯米右同断、

B 一遠方より中途へ届候時の飯米は右同前の事。

前者は、夫遣いの人数が大きく異なる。後者は遠方へ納物持参の時の飯米支給についてであるが、前条に「百姓納物持参時、逗留仕候ハ、可為領主賄事」を受けての記述であるから、文意からすればAに軍配が上がるであろう。

以上見てきたとおり、この文書は双方に問題がある。「知行物定帳」は、今まで『薩摩日田賦雜徴』のみに依存してきた。新たにAが出てきたことにより双方の比較検討が可能となった。これにより、より正確に文書の内容を読み解くことができるようになるであろう。

(2) 役所名について

薩摩藩の一三役所の呼称は享保二〇年公的に定められ、「方」を「カタ」と呼ぶのは、御勝手方・郡方・御書院方、「ホウ」と呼ぶのは異国方・金山方・屋久島方、「所」を「トコロ」と呼ぶのは寺社奉行所・御番頭詰所、「シヨ」と呼ぶのは御近習役所・御使番役所・高奉行所・御目付役所・代官所であることは『列朝制度』（『藩法集 8』）や本法令集四―三七七五にもあり周知するところである。

ところが、四九一〇号文書では、御勝手方に「ハウ」とルビが付けられている。「方」の呼び分けの基準は記されていないが、示されているところから判断すれば、藩の主要な役所は「カタ」、それより一段下位の役所を「ホウ」と呼ぶとするのが妥当であるから、勝手方に「ハウ」とルビを付けたのは単純な書き間違いではなからうか。

また、五〇六六号文書では、一三の役所の外に「磯奉行役所」が加えられ、「所」を「シヨ」と呼ぶとしている。「トコロ」と「シヨ」の呼び分けも役所の格によるとすれば「シヨ」とすることは当然であるとしても、なぜこの文書だけ

に磯奉行役所があるのか不明と言わざるをえない。単純な書き間違いという域を超えており、あるいは、編者の市来四郎が自らの思い入れから、文書改竄をさせたとするのは穿ちすぎであらうか。

(3) 他国へ出さぬ品々

寛永九年(四七七二)・延宝五年(四七八八)・宝永五年(四七三〇)に他国持ち出しを禁止した品々の一覧がある。品数の増減と種類の変化を見ることにより薩摩藩の産物、交流の在り方などが浮かび上がってくる。

寛永九年では、「他国エ曾テ不出物」八品と「公義御手形ニテ可出分」二九品があり、「自他国曾テ不入物」として悪銭を挙げている。

八品は鉄炮・焰硝・蠟・売人・棕櫚皮・ツク綱・樟脳・漆であり、二九品には硫黄・屋久板・上布・下布・芭蕉布・琉球筵などの特産品、大豆・胡麻・菜種・茸・木耳・アサ芋・魚塩などの食料品、その他牛馬・綿・白糸・鉄・紅花・林産品などである。

延宝五年になると、新たに刀・数寄道具・掛物などの工芸品、琉球焼酎・蘇鉄・蘭・琉球草木・藻玉・明礬・ホラノ貝などを含む琉球や七島の産物など薩摩藩ならではの産物があり、また、錫・焼物壺・檜底樽・霧島ツツジも禁止品となる。

宝永五年では、延宝五年と重なる品が多いが、新たに琉球細布・絹・紬などの布・反物と唐人の墨跡、唐人ノ絵が出てくる。

鉄炮・焰硝などの武器の移出禁止は幕府令もあり当然である。他の品が禁止品となつて理由は現在では不明であるが、それを個々に詰めていくことにより薩摩藩の財政・交易政策などの新たな面が見えてくるのではなからうか。

例言

一本書は、東京大学史料編纂所所蔵「島津家歴代制度」七十一巻本（目録・巻之一〜七十一）を底本とし、そのうち「巻之六十三〜七十一」を『鹿兒島県史料 薩摩藩法令史料集五』として刊行するものである。一本書の目次は、「歴代制度目録」をもとに、巻・項目の索引とし、六十七巻以降は収載文書の年代をもとに作成した。

一文書の掲載順は、原則として底本に従った。

各文書の文首には通し番号を付し、関連する複数の文書から構成されたものについては、小番号を付して分けて収めた。

一収載した文書を他の文書や写本などによって補充または校合する場合は、次のようにした。

ア 校合史料からの補充箇所は▽△で示した。校合史料と異なる箇所は傍線もしくはくで示した。
イ 補充や校合に使用した典拠史料の名称は以下の通りである。

〔写本〕 「鹿兒嶋御廻文留」（都城市教育委員会所蔵）（巻之六十三・六十四）

〔仰渡拔書〕 「都城市教育委員会所蔵」（巻之六十五）

〔原本史料〕 旧記雑録（旧記雑録・統編島津氏世録正統系図）ともに東京大学史料編纂所所蔵

〔刊本史料〕 旧記雑録前編（『鹿兒島県史料 旧記雑録前編』一〜二）

旧記雑録後編 (鹿兒島県史料 旧記雑録後編) 一〇六

旧記雑録追録 (鹿兒島県史料 旧記雑録追録) 一〇八

「鹿兒嶋御廻文留」(宮崎県史 史料編 近世5)

「仰渡拔書」(宮崎県史 史料編 近世5)

御触書寛保集成 (御觸書寛保集成)

御触書宝曆集成 (御觸書寶曆集成)

御触書天明集成 (御觸書天明集成)

御触書天保集成 (御觸書天保集成) 上・下

一 刊行にあたって本文の体裁をおおよそ次のように統一した。

ア 字体は、原則として常用漢字を用いた。ただし、人名や地名については原文の表記を重んじた。

イ 「歴代制度」は謄写本であるため、適切な位置で字配り・行替えを行い、体裁を整えた。

平出・擡頭・闕字・割書および但書などは、原則として底本の体裁に従い、闕字は一字分あけとした。

文書の差出年月日・差出所・宛所の位置などは、適宜改行・字配りを行い、体裁を整えた。

ウ 仮名は、底本の体裁に従った。変体仮名は仮名に改めたが、江・而・之・者・茂はそのまま用いた。

エ 文書・記事などの本文中には、適宜に読点「、」や並列点「・」を付した。

オ 原注は、底本の体裁に従って示したが、新たに付した注記は、() で囲み原注と区別し、文意の通じな

い箇所や文字は、(ママ)・(〇〇カ) などとした。

カ ルビは、底本にあるもののみを付した。

キ 朱書は、(朱書) と注を付して朱書部分を「」で囲んだ。

ク 付箋・貼紙は、右肩に（付箋）などと注を付し「」で囲んだ。

ケ 文字の不明や欠失は、その箇所を□で囲み（摩滅）・（破損）と傍注を付した。

また、判読不能な文字については■で示した。

コ 「薩摩藩法令史料集五」では、底本で使用された用字の表記を次のように統一した。

嶋津↓島津

鹿兒島県史料 薩摩藩法令史料集五 目次

歴代制度卷之六十三(四六九九〜四七六七)

御留主中御暇定	一	組中士無役面々へ達	二〇
諸地頭並一所持ノ人工達	二	江戸往来ノ者宿札ノ義達	二一
諸地頭諸支配頭へ達	六	繼目養子願云々	二二
組帳改ニ付達	六	家督相繼等ノ祝云々	三一
衣服十文字紋ノ儀達	七	道中致往還者ノ儀ニ付達	三四
士以下ノ者無礼ノ取扱	七	変死取扱ノ件	三五
旅人病氣ノ者取扱	八	出火云々ノ件	三九
地頭職務上儀達	八	忌服ノ義達	三九
支配中ノ儀ニ付可申出事云々ノ頭地頭へ達	九	落書ノ義云々達	三九
死罪ヲ受タル士ノ子孫	九	歴代制度卷之六十四(四七六八〜四八四一)		
狂者快癒出願	一〇	御廻文留臨時難見出云々ノ件	四一
米価沸騰	一〇	知行高二応シ軍賦ノ儀達	四一
出火ノ義ニ付達	一一	御留守中出火等ノ義ニ付命令	四二
他国ノ使節並飛脚至宿ノ義云々	一二	掟	四二
旅人御領内通行ニ付諸所申付様ノ件	一三	他国へ不出物	四三
他国ノ牛馬御領内ニテ病起リタル者取扱	一六	天罰靈社起請文	四三
他国へ不出品	一九	乗馬衆へ被命条書	四四

目次

陸御供衆御法度条書	四四	人宿又ハ牛馬類等死体捨方ノ義ニ付達	六〇
郡所規帳抜書	四六	七夕ハ朔晒着用御免	六一
風構用納物	四六	御関狩ノ儀ニ付御達	六一
諸寺ノ住僧隠居ノ地所云々達	四七	出火ノ節着致ス革羽織等ノ儀云々ノ達	六二
高千石以上並ニ以下ノ土石塔尺寸定ノ件	四八	御領國中ノ女路次行ノ節綿帽子カツキ等ノ儀達	六二
諸士召仕ノ丁婢永代買置ノ儀停止	四八	途中遺失品届	六二
町浜ノ者男女共ニ二年季奉公ノ件	四八	出家山伏社人神子ノ調	六三
外城横目可致覚悟条書	四九	学文弓馬ノ道可研究ノ件	六三
新ニ寺社建設禁制	五三	寺院修補ノ件	六三
溝川除並田地水損等ノ儀云々達	五三	足輕被召仕ノ件	六四
他国へ不出品々	五四	出火届	六五
天罰靈社起請文前書ノ事	五五	御儉約ノ儀達	六六
法事調	五六	江戸高輪御邸類焼ニ付女中方へ達	六六
生子云々ノ達	五六	馬付荷分量ノ件	六七
他国人止宿ノ儀達	五七	橋本権之介犬ヲ殺シテ死罪ニ被処	六七
諸士掛銀ノ義ニ付達	五八	他国人取扱ノ件	六七
上方道中往還ノ面々荷物買目ノ件	五八	合葉売買ノ件	六八
寺領閉門逼塞遠慮等ノ件	五八	道路修繕ノ件	六八
馬筋ノへ御停止ノ件	五九	変死届ノ件	六九
諸士掛屋敷ノ儀御禁止ノ件	五九	組合中掟	七〇
諸百姓寺社家町浜ノ者男女共ニ二年季奉公	五九	御供上下道具印等件	七一

御救訴訟ノ件 七二

兵庫殿外三殿書付等二殿ノ字用ヒ方件 七二

主人ノ傍輩ノ名ハ殿ノ字ヲ可用云々 七三

死罪ニ被処シ者ノ子孫云々 七三

出家成願 七三

御紋ニ似タル紋ヲ用ユヘカラサルノ件 七四

僧侶道学心掛云々ノ達 七四

御袖判条々 七五

鹿兒島札辻ヨリ高岡筋等へ道程標ヲ被立 七五

組頭番頭等勤方云々 七七

諸節句衣服定 七七

歴代制度卷之六十五 (四八四二〜四九八六)

高万石成云々 七九

諸士結婚ノ件 八〇

馬牽共途中通行云々ノ件 八一

狂者取扱ノ件 八一

南泉院御宮卜被唱 八二

諸外城へ差越居奉公人発病等云々ノ件 八三

諸人召仕ノ男女抱方云々 八三

別立屋敷 八三

御関狩 八四

寺入遠慮等云々 八四

近国ヨリ飛脚帰国云々ノ件 八六

寺社奉行へ申渡云々 八七

客屋預御春屋役等ノ唱 八七

寺人並閉門等赦免云々 八七

江戸大廻船積荷 八七

質屋品武器類云々 八八

質屋使ノ者云々 八八

御咎目蒙リ居タル者ノ子共繼目願云々 八九

諸座付ノ者云々 八九

諸士別立云々 九〇

御当地並於江戸諸人ヨリ訴訟 九一

月番当番ノ件 九一

御直元服 九一

服忌ノ儀云々 九二

出火火消等云々 九三

弑逆ノ者刑罰ノ件 九三

唐物拔商 九五

砲発ノ件 九五

川内ノ文字定ノ件 九六

目

次

諸外城へ御光越御供ノ面々賭	九六
繼目家督並養子嫡子成ノ件	九六
家来下人怠慢等云々	九七
宿次ヲ以テ諸所差通御用	九七
葉代	九七
家差囃唱ノ件	九八
精進日ニ申渡事並申渡サ、ル事	九八
七月盆祭諸寺献灯	九九
御使者並輕使飛脚等宿所取締ノ件	一〇〇
依科他所ヨリ移者等ノ儀云々	一〇〇
御名代參途中互ノ礼儀云々	一〇〇
石塔ノ箔文字停止ノ件	一〇一
元服繼目家督等ノ事ニ付進上物ノ件	一〇一
諸色直段下ノ件	一〇一
中間草履取刀差	一〇二
諸御役人大身ノ所へ至リ料理等ヲ受ヲ被禁	一〇三
御太刀進上ノ件	一〇四
島津兵庫殿外五名光儀ノ節内証へ頼云々	一〇七
老万石以上並寄合以上ノ面々年頭行列ノ件	一〇八
大身小身等隱居願ノ義達	一〇八
葵紋之儀云々達	一〇九

出火変死等届ノ件	一〇九
諸人石塔並葬式ノ義達	一一〇
起請文	一一一
諸外城御高札掛様ノ件	一一二
喧嘩口論等云々	一一三
隱居ノ義云々	一一四
旅人病死ノ義云々	一一五
御勝手方其外諸所改唱	一一五
大御目付以上ノ御役人ト同名ノ者改名ノ件	一一五
外城へ諸奉公差廻之儀云々	一一六
諸士高求之件	一一六
諸座御用筋相認メタル書付文字云々	一一六
御番人ノ義云々	一一七
大身分ノ格ニテ一万石以下ノ人高上リノ件	一一七
御代參ノ儀云々	一一八
諏方之神号	一一九
諸大身下屋敷守之唱	一一九
外城家来等無調法御咎目	一一九
參勤交代道中旅込錢之儀云々	一二〇
御領国廻国旅人帰国難計者云々	一二〇
入道号之儀云々	一二〇

外国船御手当之件	一一一	諸所札ノ辻御高札ノ儀云々	一一八
万石以上五千石以下迄馬代銀進上云々	一一一	御閑狩並御馬追ニ付供夫ノ儀云々	一一八
外国船御手当ニ付御領内総人数相印云々	一一一	養子家督違変之件	一一九
藥代定	一一二	外城役々衆中共百姓へ米錢借付ノ義云々	一一九
万石以上乘輿御免	一一三	諸人賄路之件	一一一
医師ノ儀療治見廻之件	一一三	座々日数手形ノ件	一一二
太守様御病氣云々	一一三	借銀利子之件	一一二
カ七取打停止	一一四	拝借銀云々	一一二
痲瘡人食事之件	一一四	人家来之者乘馬云々	一一三
関東水損ニ付米穀廻漕	一一四	旅人為商売諸外城へ差越ノ者之件	一一三
牛馬付荷之件	一一五	鹿皮上納之件	一一三
出火装束之件	一一五	銀錢米穀借付利子之件	一一四
町中数不足錢通用ニ付云々	一一五	御家督ニ付達令	一一四
六部経納又ハ順礼行脚等之者取締云々	一一六	百姓年貢之件	一一五
面体ヲ隠シタル頭巾云々	一一六	宿次状持定之件	一一五
刀鞘塗等ノ儀云々	一一六	諸人願事ニ付賄路之件	一一六
外城役々品物調ノ儀云々	一一六	諸所入組詮議事ニ付云々	一一六
夜行辻歌並追掛馬等御停止	一一七	諸外城へ差越タル諸奉公人云々	一一七
葬式六道錢停止之件	一一七	六拾六部廻国者類罷通ルニ付取締向之件	一一七
並松浜松へ虫付シ云々	一一七	御美名同唱之文字遠慮云々ノ令	一一七
廻国者致病死タル者披露之件	一一八	御式日等服制	一一八

人家来主人乘馬云々	一三八
道中往来人馬先触之件	一三九
旅人振売市立云々	一三九
外城横目	一四〇
神楽執行	一四〇
寺院讓地之件	一四一
外城衆中養子云々	一四一
於途中御鷹ニ參逢タル節云々	一四一
住居不審ノ者取締云々	一四二
江戸御国許ヨリ御使披露云々	一四二
銀吹立之件	一四二
欠落者並無宿者取調云々	一四三
陰陽道兵道等ノ義ニ付達	一四四
灰吹銀ノ儀ニ付達	一四四
拝借取込有之者高直之儀云々	一四五

歴代制度卷之六十六(四九八七〜五一九四)

霧島山新燃	一四六
新金鑄造	一四六
御用木盜伐	一四六
二本松地藏御再興	一四七
御咎目蒙居シ者ノ子継目願云々	一四七
一所持諸地頭年首御礼	一四七
御側廻相勤タル者外城結婚停止	一四七
諸座ノ者等依功ハ被任士云々	一四八
一所持ヨリ寄合並迄御目錄進上	一四八
御馬廻云々	一四九
御役人被下米云々	一五〇
羅紗之合羽柄袋御禁止	一五〇
除服御免	一五一
御參府御首途	一五一
行料米云々	一五一
於旅召置家来云々	一五二
隅州様御側御役名之件	一五四
島津將監へ御城代被命	一五四
座付士之名称	一五四
進上物之儀云々	一五五
砲発云々	一五五
御奉公ニ付田舎へ行者携銃コト被禁	一五五
諸座問合書面云々	一五六
御直元服云々	一五六
御当地士並外城衆遠流ノ者組帳之件	一五六

隅州公初テ御下向之件	一五六	於カク事殿ノ字改之達	一六三
先祖様御忌日云々	一五七	於菟様御改名	一六三
御位牌所参拝云々	一五七	潮見坂外三ヶ所字改之件	一六四
於糸様太守公御養女御願	一五七	年頭並初テ御目見等之節御太刀進上之件	一六四
進上物	一五八	弓進上	一六四
養子之件	一五八	寺院官成等ニ付進上物云々	一六四
於久殿改名之件	一五九	諸御札進上物之件	一六四
葵紋之儀云々	一五九	致喧嘩切腹届	一六六
上方辺路出火之節消火等云々	一五九	結婚離縁	一六六
年頭御札着座	一六〇	江戸詰御家老道中為持道具之件	一六六
大身家年頭供廻	一六〇	竹姫君御安産	一六六
吉宗豊重之四字名乗ニ用コトヲ被禁	一六一	三道中急通行之件	一六七
御本丸溜ノ間之儀驚ノ間ト被改	一六一	御前へ差出書付ニ誰奥又ハ内妻ト唱云々	一六八
同役同名改名云々	一六一	諸座諸書付宛之書式	一六八
御家中大身小身共病身老体等云々	一六一	大馬場ノ名字大場ニ被改	一六八
丸之内三ツ紋被停止	一六一	御勝手方其外諸所名称	一六九
高役番所	一六一	大御目付以上ノ御役人ト同名ノ者改名スヘキノ達	一六九
境橋抱真橋ノ名称	一六二	御御家老座表御家老座打込之件	一六九
芸能ニ被任タル士家格	一六二	御厩別当改称	一六九
医師唱へ之件	一六二	若年寄加役	一六九
御近習役以上ノ役人へ遣書付並諸座幕紋ノ云々	一六二	小普請被仰付置者子共云々	一七〇

御家老座へ島津玄蕃殿出席	一七〇
菊之紋可致遠慮旨達	一七〇
月次御礼出頭致ス御役人他行御暇届	一七〇
益之助様御中刺御名又三郎忠顯公ト被称	一七一
天井折之唱	一七一
御女性様ト書付唱ノ儀御改ノ件	一七一
御賦料之件	一七一
御礼所之次第	一七二
諸御役服制	一七二
周防守忠綱殿家中絶ニ付壮之助殿相統被命	一七二
諸御役人病氣届之件	一七三
諸人取替之目録	一七三
外城ヨリ鹿兒島士養子成之件	一七三
元服ニ付又三郎様へ品代銀上納之件	一七四
年頭八朔馬代献納	一七四
異国船御手当	一七四
俣養子成云々	一七五
島津玄蕃殿外面殿御間柄ヲ以テ格式替之件	一七五
万石以上乗輿御免之件	一七五
島津壯之助殿私領総名重富ト被名付	一七六
島津壯之助殿屋敷上築地鶴江崎ト唱	一七六

又三郎様松平御称号御拝領	一七七
尾州侯御息女房姫君御当家へ御結婚	一七七
築地御屋敷御門前ノ橋仮橋ト唱	一七八
物頭ヨリ御目付へ遺書付衆ノ字可相付云々	一七八
永吉村ノ内徳姫様御野屋敷田面崎ト唱	一七八
御光儀願等料紙之件	一七八
御精進日御誓詞云々	一七八
三次郎殿事と泉家名跡相統之件	一七九
安之助殿小松之姓ヲ冒サル	一七九
縁組離縁願之件	一七九
依科名跡被召禿者云々	一八〇
妾腹出生之直子札願	一八〇
納殿役人其他御役々乗馬云々	一八〇
於嘉久様御家作云々	一八一
山下御屋敷唱	一八一
御御用人養子違変云々	一八一
手札紛失等云々	一八一
代番願之件	一八一
他郷在勤之者ノ子共角入前髪願云々	一八一
諸人御礼願等ニ付書面料紙之件	一八一
諸士勤務ニ付無調法有之者云々	一八二

靈龍院様御位牌之件	一八二	島津哲之助御礼席之達	一八九
尾州侯御息女嘉知姫君太守様へ御結婚	一八二	御鷹へ途中ニテ行違節ノ式云々	一八九
御用ニ付差出諸書付月日付之件	一八二	牡丹御紋浄岸院様ヨリ悟姫様へ被進タリ	一八九
御役地頭職ノ御礼其外諸御礼之件	一八三	刑部卿様御法名	一八九
御小姓御役弓進上之件	一八三	江戸御国元ヨリ披露状書式	一八九
島津因幡殿和泉家相続	一八四	組中之諸士家督繼目並養子成等御礼之件	一九〇
諸座星合之件	一八四	御在府中年頭家格等ニ付御太刀進上之件	一九〇
大玄院様御忌日云々	一八四	御上下ノ御供ノ面々途中服制	一九〇
島津善次郎殿嫡子ノ御届	一八四	於榮様御剃髮	一九〇
公義精進日並名乗字遠慮云々	一八四	江戸御老中並同格ノ方等ノ名ハ可致遠慮	一九一
菊姫君御結婚	一八五	家督相繼之件	一九一
於登免様築地御屋敷へ御移転	一八六	御礼使途中着服	一九一
太守様御結婚	一八六	御前様御逝去	一九二
於嘉久様並於登免様御法名	一八六	御上下ノ大里御乗船並御船御ノ節服制	一九二
柵寝式部小松ノ姓ヲ賜フ	一八七	足輕以下ノ者共途中行礼之達	一九三
靈龍院様御忌日	一八七	於綾様御結婚之件	一九三
菊姫様御院号	一八七	御前様御事甘露寺大納言様ヨリ御名御頂戴	一九三
御座之称名	一八八	御女子様御誕生於敬様ト被称	一九四
尾畔奉行御鷹師野支度ノ儀云々	一八八	産子殺耗御禁止之達	一九四
外城衆中直子無之者諸座付ヨリ養子云々	一八八	跡相統願之件	一九四
御前様御安産御女子様御誕生	一八八	御紋御用ヒ方區別	一九五

御近習役御用ノ節出頭座々之件……………一九五

御正院様御年回忌……………一九五

歴代制度卷之六十七(五一九五〜五四七六)

明和八年……………一九六

安永元年……………一九六

安永二年……………一九八

安永三年……………二〇九

安永四年……………二一四

安永五年……………二一八

安永六年……………二二一

安永七年……………二二四

安永八年……………二二七

安永九年……………二二三

天明元年……………二三五

天明二年……………二四〇

天明三年……………二四四

天明四年……………二五四

天明五年……………二六〇

歴代制度卷之六十八(五四七七〜五八七四)

天明五年二月……………二六三

天明六年……………二八一

天明七年……………二九二

天明八年……………三〇六

寛政元年……………三一

寛政二年……………三一六

寛政三年……………三一八

寛政四年……………三二二

寛政五年……………三二四

寛政六年……………三二六

寛政七年……………三二八

寛政八年……………三三一

歴代制度卷之六十九(五八七五〜六一六九)

寛政八年九月……………三三八

寛政九年……………三三八

寛政十年……………三四二

寛政十一年……………三四五

寛政十二年……………三五二

享和元年……………三五六

文化十五年	四七四		
文化十四年	四七七		
文化十三年	四四八		
文化十二年	四四八		
歴代制度卷之七十一 (六四三九〜六七七八)				
文化十一年	四四〇		
文化十年	四三五		
文化九年	四二八		
文化八年	四二〇		
文化七年	四一四		
文化六年	三九九		
文化五年閏六月	三九二		
歴代制度卷之七十 (六一七〇〜六四三八)				
文化五年	三八八		
文化四年	三八四		
文化三年	三七六		
文化二年	三七二		
文化元年	三六四		
享和三年	三六二		
享和二年	三五九		
			文政元年
			文政二年
			文政三年
			文政四年
				四八二
				四九〇
				五〇八
				五一六

島津家歴代制度卷之六十三 宝永四年

四六九九

御留主中御暇定

一 御留主中毎月七日・十九日・廿九日ノ儀ハ、月番外ノ御家老・若年寄・横目頭・御用人・御側御目付・御目付・御納戸奉行マテハ右三日非番ニ被定置候条、御暇可被下置候間、御寺参又ハ私用相達可申候、依之其間ノ儀者不参ケ間敷無之様ニ相動可然候、尤、右ノ外可成程御暇申出間敷候、若無拠儀於有之ハ其理承届御暇出可申事、

一 御立願ニ付、神社仏閣ニ参詣ノ儀ハ神前仏前相仕廻候日数、滞留・往来日数込ニテ御暇遣可申候事、

一 湯治御暇ノ儀ハ長病ニテ病後ノ労又ハ誰モ存候程ニ為差当痛相見得ニ付、湯治ニテ保養ノ詮有之訳候ハ、様体并療治ノ医師申出趣ヲモ承届之、無拠節ハ二三七日

之御暇遣可申候、此段ハ諸役人ニ不限御番勤候者迄モ同前ニ可有之事、

一 外城工親子・兄弟・祖父母・舅有之者ヨリ見参又ハ病氣見廻ノ御暇申出儀候ハ、見参迄ハ滞留日数三日五日往来ノ日数ヲ込、遠近次第日数ヲ限御暇遣可申候、看病ニ付差越候儀者日数ノ究病人ノ様子次第ニ可有之事、

付、忌相掛候程ノ差合有之、其所へ為見廻差越儀候ハ、忌中日数ノ内願次第御暇遣可申候、併御用有之者ノ儀ハ日数同番中御人少ニ付テモ忌御免ノ訳可有之候間、御暇不遣節モ可有之候事、

一 先祖以来祭来候社参并先祖寺墓参等ノ儀ニ付御暇願出候ハ、遠中近道程ノ積ヲ以滞留或一日或一夜泊リ、又者祭事ニ付隙取候儀ハ其程承届、滞留兩三日迄ハ御暇遣可申候事、

一 地頭所ニ初テ為仕置差越人、於地頭所勤有之日数書出ノ上遂吟味、可成程日数相減御暇遣可申候、同役御人少ノ節モ有之、又ハ地頭所エ差越候テハ於御城下御用欠候節致延引候様ニモ可申渡候事、

一 御通道ノ所ニ地頭為御迎差越人ノ儀、大坂迄 御下向ノ程 御乗船ノ御左右相聞得候テモ、段々差越候様ニ可申渡候、為差当役目有之人皆共差越候テハ爰元少ニテモ御用支儀候ハ、地頭代申付可差越候事、

付、御通路已後地頭所へ滞留御暇候儀ハ御通道ノ節於其所達 貴聞、御定次第可仕候事、

一 面立候役目ハ、御奉公ニ付外城工差越候儀候ハ、此段モ爰元御用不支節、相談次第差越可申候、尤、一日モ早々帰宅仕候様ニ相心得可然事、

一 御用人以下普請修覆等ノ御暇申出儀候ハ、小身体ニテ屋敷替并居屋敷等ノ作替ノ日数十日廿日御暇遣可申候、修覆迄ニテ候ハ、日数五日七日御暇可遣候事、

一 自身病氣又ハ看病等ニ付日限月限ヲ以星懈怠ノ御断申出儀候ハ、一日ツ、ノ内星欠候儀ハ頭ニテ差免可申候、乍其上終日懈怠ノ節不致出仕段、御断時々可申出候事、

一 御廻廻・表御小姓迄モ右同前ニ御暇ノ儀ハ惣テ相心得可申候事、

右御暇願申出候節、月番ノ御家老宅工可申出也、勿論

支配下ノ者ハ支配頭ニ相付申出候様可有之候、且又御勝手方支配ノ役人ハ御勝手方御用聞番ノ於宅可申出候、右ノ次第定置候様ニト被仰渡候条可被奉得其意候、以上、

戊三月廿八日

御家老座

四七〇〇

諸地頭并一所持ノ人工申渡候覚

一 諸外城ニテ出火有之、其旨申來候節、類火有之候ハ、時々可被遂披露事、

一 一堂社ノ出火時々可被申出事、

一 祈願所・菩提所又ハ其所ニテ為差立寺院出火右同断可被申出事、

右ノ外、火元迄ニテ外屋敷ニ類火無之、何ソ子細於無之者不及披露、地頭并一所ノ領主前ニテ可承置候、

一 所中ノ入組ハ地頭并一所ノ領主前ニテ可相濟候、若難濟事候ハ、可被申出候事、

一 近外城ト入組ノ儀、是又地頭互ニ相談可相濟候、若難相濟候ハ、可被遂披露事、

右両条可及披露節ハ委細致書付月番御家老宅へ可被申出候、以上、

戌四月

四七〇一

与頭為心得申渡候覺

一組中ニテ口事出入有之候ハ、可成程組ニテ可被相濟候、若難濟可及披露節ハ委細書付相添月番御家老宅へ可被申出事、

一組中ノ面々、何ソ訴訟ノ儀可申出節ハ自分ニ書物持参可仕候、名代ニテ差出儀者不成合事候、或ハ幼少或ハ長病人ナトニテ自分持参難成人者各別ニ候間、左様ノ人ハ其訳名代ノ人ヨリ申出候方可然候、此段寄々申通候様可有之候事、

戌四月

四七〇二

写

一献上物ノ数、百或五十・三十・二十・十又五ツ・三ツ・

二ツト用來候得共、向後此間ノ数ヲモ用可申候、右ニ準シ、自分ノ付届音物モイツレノ数ヲモ用可申候、

右ノ通、從 公義被仰渡候間奉得其意、与中并地頭所

有之面々ハ地頭所へモ申渡候様可被申渡者也、

戌四月

四七〇三

覺

一公義ヨリ被仰付置候横目ノ儀ハ先日何レモ被差免候、領主ヨリ被申付候横目ノ儀、替合神文等ノ儀ハ領主見届候上被申付筈ニ候、何様披露等ノ儀ハ以前ヨリ公義横目致來候通、横目頭所へ直ニ可致披露候、此旨可被申渡候、以上、

但、御条書ノ儀ハ、領主方ヨリ被申出候ハ、以後可

有差図候、

戌五月九日

取次

中野駒右衛門

四七〇四(の1)

一鹿兒島士中若キ者共不依大小身、弓・馬・鎧・兵法・

鉄炮ノ内面々得方ノ儀ヲ致鍛鍊候様、平日稽古可仕候、
勿論及諍論致立合間敷候、

一 右付テ諸道具不好結構、畢竟ハ用方ノ善悪ヲ專ニ穿鑿
仕可相調候、

一 鉄炮打ノ儀、近年ハ立物ヲ小クイタシ、アタリノ数ヲ
好候迄ノ由不可然候、此已後ハ随分違者ニ打習ノ儀ヲ
專一二可致稽古候、

右ノ趣、与中へ可申渡置旨申越候様ニト 御意候、

戊子十一月

(四七〇四の二)

右ノ通被 仰出候付、江戸詰家老中ヨリ左ノ通申来候、

一 此已後弓・馬・鎗・兵法・鉄炮鍛鍊ノ程時々不図可被
遊 御覽御様子ニ候、来年ノ御在国迄ノ御儀ニモ無之、
後年ハ 御不楽節杯ハ幾度モ不図御見聞可被遊御様子
ニ候、

一 馬ノ儀ハ馬形宜迄ヲ好不申、足強有之候ヲ第一致吟味
調置候筋ニイツレモ相心得可申儀ニ候、兼テ御馬廻ノ
格ニ不被仰付置モノヘモ馬乗候儀、心懸候モノハ、向後
可被遊 御覽節ハ御馬ヲモ被為借又ハ借馬イタシ候テ、

成共乗候テ罷出候様被仰付候儀モ可有之トノ御沙汰ニ
テ候、

一 此節仰出ノ通、馬具等美麗ヲ好申儀無用ノ事ニ候ヨシ、
專御沙汰ニテ候、

一 弓ノ儀、此已後不図可被遊 御覽候節ハ弓法ノ不及規
式、矢式本ツ、射退ニ被仰付 御覽可被遊儀ナトモ可
有之トノ御沙汰ニテ候、是ハ其業ノ違者ヲモ鍛鍊仕為
ニ候、弓場事ノ規式迄ヲ被遊 御覽候得ハ弓道具等調
候ニ付テ内々難達候付、不非心其列ニ罷成候儀、難成
モノモ可有之旨被 思召、右ノ通ノ御沙汰カト恐察仕
候、

候、

一 鉄炮ノ儀、偶心懸候モノモ近年ハアタリモ教迄(ノカ)モ好、

地中ニ腰迄堀入台ヲ仕掛候体ニ仕打候由、鉄炮ノ儀ハ
別テ違者ニ打習不申候得ハ無其詮事ニ候間、向後立居
共ニ違者ニ打習候儀ヲ專心懸事候、被遊 御覽候儀
可有之節ハ立居共ニ御打セ可被遊 御覽トノ御沙汰ニ
テ候、

右者、此節 仰出付テ御内々右ノ御沙汰ニテ候間、組
頭ノ面々内々其心得ニ罷在、向後不図可被遊 御覽

節、無滯様兼テ組中へ申付置候様内意可被申聞置候、

以上、

十一月

(四七〇四の3)

右ノ通申来候条可被奉得其意候、以上、

戌十二月

四七〇五(の1)

覚写

一御国元へ文才有之候モノスクナク成候間、学文ニ器用

可有之若キ者ヲ江戸・上方・長崎ナトへ被差越、稽古

可被仰付候間、士以下ノ者ニテモ其器用可有之者ヲ相

糺可申上候、勿論年立候者事広マナヒ候儀可難成候、

十三四歳ヨリ廿四五迄ノ者ヲ相糺可申上旨御意候、以

上、

十一月

(四七〇五の2)

右ノ通被 仰出候間奉得其意、以下ノ者迄不洩様相糺

可申出候、地頭所・私領へモ可申渡由御差図ニテ候、

以上、

戌十二月

四七〇六

一横目頭ヲ大目付ト唱可申候、

一横目座取次役ヲ大目付座取次ト唱可申候、

右ノ通被仰渡候間、承知仕可申渡旨 御意候間可被奉

得其意候、以上、

戌十二月十二日

四七〇七

一借銀ノ利合、頃日高利成モ有之由相聞得候、高利ニ致

間敷ノ旨ハ先年モ被仰渡置候処、不相遂訳ハ不可然事

候間、向後高利ノ取遣仕間敷候事、

一銀子互ノ取遣不自由ニ致候儀モ有之由、是以不可然事

候間、以前ノ通相応ノ利合ニテ不自由無之様取遣可仕

候、心入悪敷通融滞セ候儀致間敷候事、

右ノ通、江戸ヨリ被仰下旨有之候間、堅得其意候様所

中へ可申渡者也、

宝永四亥二月廿一日

御家老座印

四七〇九

四七〇八

諸地頭・諸支配頭へ申渡候

一原口權兵衛事、正月廿日於江戸上野御仏詣ノ御供相勤

候処、明王院御座ノ間チカクニオイテ致乱心、永山覚

兵衛ヲ切付候、乱心ノ儀ニハ候得共、御精進日其上御

寺内且又於 御前近右ノ次第ニ候得ハ急度被仰付儀ニ

候得共、乱心無紛ニ付被助身命、知行・屋敷被召揚、

權兵衛名跡被召禿、權兵衛事、親類御預被仰付候旨被

仰出候、右ノ節、穆佐土田中六郎左衛門近席ニ有合、

早速權兵衛ニ取付候故追々掛付取治候由、御前近辺

殊更上野於御寺内ノ儀ニ候得ハ旁以早速不相鎮候テ不

叶場所ニテ候処、六郎左衛門時宜相応ノ働神妙被 思

召、六郎左衛門事、鹿兒島士ニ被仰付候、右ノ段支配

ノ面々且又小役人迄モ御役々ヨリ老人ツ、召寄申聞、

紙面ノ趣申伝候様ニト被 仰出候間可奉得其意候、以

上、

亥二月

御家老与所

覚

一家督并隠居人ノ事、

一分地并別立候人ノ事、

一御目見相濟候人ノ事、

一外城ヨリ鹿兒島高二被召成候人ノ事、

一養子成被仰付候人并違変人ノ事、

一嫡子成被仰付候人ノ事、

一幼稚ニテ未始テノ 御目見不仕人、繼目被仰付其御礼

不申上人ノ事、

一御赦免ニテ組帳ニ被召載候人ノ事、

一与帳ニ被召載置候面々名替ノ事、

一右同断、死人ノ事、

一右同断、遠流被仰付又ハ子細有之組被相除候人ノ事、

一右同断、遠流并子細等有之候人、御赦免ニテ組帳ニ被

召載又ハイマタ不被召載人ノ事、

一寺領被仰付高・屋敷被召上候人并其已後御赦免被仰付

又ハ高・屋敷被下候人ノ事、

一組所方角違ニ居屋敷有之候人ノ事、

一 當時持高・員数ノ事、

一 組帳ニ有之人致死去繼目被仰付候人并繼目ノ願申出イ
マタ不被仰付人、又ハ跡目難取立候間、此節御与被召
除被下度存候人ノ事、

右者、此節組帳改申渡候間、元禄十六年未五月朔日ヨ
リ宝永四年亥三月廿九日迄ノ間、右頭書ノ分有無差出
取揃、来ル十五日限ニ御目付座へ可被差出者也、

亥四月六日

御家老座印

与所

四七一〇

一 十文字ノ御紋所ヲ被付候御一門、其外十文字ヲヤツシ
候テ拝領有之付被申候者、其家来ニ衣服等トラセ候ハ
紋所ヲ消候テ致着候様ニ可申付旨、先年被 仰出候、
ケ様ノ儀ハ程経候得ハ緩ニ成候間、最前被 仰出候筋
相慎候様時々可申通ノ旨、此節被 仰出候間被奉得其
意、右ノ趣緩セ無之様家来中へ可被申渡候、以上、

亥五月廿一日

四七一一

写

組頭・小頭・諸地頭・支配頭ノ面々へ可申渡覚

一 士以下ノ者、士ニ対シ無礼法外等ノ仕形有之、士ヨリ
咎目候付テ刀脇指ヲ拔掛、其外急繼ヲ可成トイタシ候
付テ打果候儀有之候節ハ、御詮儀ノ上其段於無紛ハ先
例ノ通打捨候分ニテ、士ニハ御構有間敷候、土方ニモ
不事足所有之候ハ、勿論其訊ニ応シ御咎目可被仰付候、
一 士以下ノ者、士ニ対シ無礼法外等ノ儀仕候ハ、其主人
又ハ支配頭エ其訊急度可申届候、急ニ繼ヲ可成程ノ儀
無之節、楚忽ニ打捨申間敷候、右ノ差別無弁楚忽ニ打
捨候ハ、急度其科可被仰付候、

一 士ニ対シ士以下ノ者無礼法外ノ仕形無之様ニトノ儀ハ
前々ヨリ被仰渡置事ニ候処、下々ノ者緩セニ存候故、
時々事立候儀有之候条、弥以其慎仕候様主人又ハ支配
頭ヨリ兼テ稠敷可申付候、对士以下ノ者致慮外候付、
土方ヨリ其訊申届候ハ其者ノ主人又ハ支配頭ヨリ相糺
存分ニモ其科可申付候、

右ノ趣、此節被 仰出候、士ニ対シ下々ノ者ヨリ急ニ

罐ヲ可成ト企候節ハ格別ニ候、無礼一通リノ儀ハ其主人又ハ支配頭ヘ申届、何様ニモ其仕形相応ニ可痛事候処ニ、何ノ心遣モ無之、殊ニ手ニモ不立下々ヲ相手ノ様ニ心得、早速打果候儀、却テ士ニハ不相応ノ事ニ候間、向後ハ急度被 仰出候趣ヲ可相守候、且又未々者ヘハ主人又ハ支配頭ヨリ右ノ趣兼々稠敷可申付置ノ旨、是又被 仰出候間、謹テ奉得其意、面々家来又ハ支配中ノ者ヘ時々可被申付候、以上、

亥五月廿二日

四七二一

写

一不依自他国ノ者往来候旅人且又廻国行脚ノモノ病氣差起候歟、又ハ痛ナト有之往来難成者ハ早速育置、其旨委細可申出候、尤、人家遠キ所ニテ病氣差発候モ有之、怪我等モ致候テ罷在候者ハ通合ノ者見当次第其所ヘ可致注進候、他所ノモノハ仮令其身ノ願有之候共、御領内ニテ病氣痛差発候テ一往於所育候モノ不遂披露ノ者了簡迄ニテ他領ヘ送出候儀仕間敷候、右式覚語ノ儀

ハ兼々被仰渡置事候得共、弥氣ヲ付間違無之様仕可然候、此旨支配中・組中・地頭所・一所ノ地ヘ儘ニ申渡置、右体之儀申出候節ハ支配ノ方ヨリ可被遂披露候、以上、

亥五月廿八日

御家老座

四七二三

一何ソ無調法ニ付御咎被仰付候品ノ内、寺領ト申候儀不相応ニ候間、向後寺入ト唱可申候、走込ノ儀ハ自分寺入ト唱可申候、此旨致承知所中ヘ可被申渡者也、

亥六月十一日

御家老座印

四七二四

諸地頭工可申渡覚

一地頭所被仰付置候者共、隙無之者ハ格別ニ候、左様ニモ無之者地頭被仰付年経候テモ不罷越者モ有之由候、地頭ノ儀ハ其所ヲ早々致見分、委細ノ儀迄吞込候テ罷在、若急成御用杯被仰付候節モ、早速相応ニハ相動候様ニ兼テ其所ヘモ申付置、尤、常式ノ儀モ引請候テ差

引可仕儀ニ候、今迄ノ通ニテハ不宜候間、向後ハ地頭職被仰付候ハ、早速其所へ罷越見分仕、諸事致差引候筋ニ可被仰付候、只今迄地頭職被仰付候テ、其所へ不參者ハ御用不支様相考、御暇申上可罷越候、

一 地頭所へ罷越候節所ノ費有之、又ハ地頭物入ノ儀モ候由ニ候得共、御領内ノ事ニ候得ハ輕致候テ費無之様イタシ方可有之事ニ候、其儀迄モ叶カタキ者ハ地頭職難勤訳ヲ以御断可申出候、

一 地頭職被仰付一度ハ早速其所へ可罷越候、数年同所ノ地頭相勤候ハ、時宜次第御暇申上見聞ニ可罷越候、右ノ通、今度於江戸被 仰出候間、右可被奉得其意候、以上、

亥六月十五日

四七二五

与頭・諸地頭へ申渡候覚

一支配有之候御役人、支配中ノ儀付テ諸事表方へ申出可達貴聞儀且又御家老承程ノ事ハ自身罷出御用人へ其旨可申達候、御用人迄承相濟候事ハ品ニヨリ下役ノ者ヲ

以可申出候、地頭所ノ儀モ少ニテモ屹立候儀ハ自身モ罷出申達候様ニト今度江戸ヨリ被 仰出候間、謹テ可被奉得其意候、

右ノ通ニ候得ハ組中并地頭所ノ儀ニ付テ、此中御用人へ相付被申出候儀ハ弥以其通ニテ自身罷出可被申達候、輕キ儀ニテ御用人承迄ノ儀ハ下役ノ人ニテ可被相達候、以上、

亥六月十五日

取次

黒葛原源左衛門

四七一六

一 士ノ非仕形所行ニ付死罪被仰付候者共ノ子共、此已後士ニハ不被仰付旨被 仰出、去々年九月廿五日其趣一通リ申渡置候、右式死罪被仰付候者ノ子共ノ儀ハ其親類方ニ親類札ヲ取置、其者共後年相応ノ御奉公可相勤器量有之、其段願出候ハ、其節吟味ノ上願ノ通士ノ格式ノ御奉公仕候儀御免可被遊ノ由、此節被 仰出候間可奉得其意候、尤、子共右式ニ被 仰付儀ニ候得バ家内ニ罷在兄弟共ノ儀モ右格式ニ其親類方ノ親類札ヲ取置、後年御奉公願ノ儀ハ右子共同前ニ可有之ト此節被

仰出、委細ノ段々^ハ与中可被申渡候、左候テ、御奉公器量相応ノ者、向後願出旨有之節ハ遂吟味可被申出候、地頭所ノ儀ハ地頭ヨリ右ノ格式可被申渡旨、是又可被申渡者也、

亥六月廿一日

御家老座印

四七一七

一乱心者、困ニ入置候以後快氣仕候付困出ノ願ハ親類近所ノ者証拠ニ相立申出候得共、寸切ト快氣不仕候テモ親兄弟ノ歎ヲ難黙止、存証拠ニ相立候儀モ可有之候、且又病氣致再発悪事出来候而モ証拠人ニ何ソ御トカメ依無之、輕ク存証拠ニ相立候儀モ候得ハ不可然事候、若再発何様ノ儀モ仕出候ハ、応様子証拠人ニモ急度可被仰付候間、向後ハ能々入念細^{密カ}蜜相糺候上、平生ニ不相替致快氣候ト見及候ハ、可被致次書候、右ノ趣組頭中承置、与中ノ面々ハ寄々申伝候様可被申渡候、以上、

亥十月十三日

四七一八

覚写

一頃日御用ニ付宿次等連々相増夫仕相重候間、急ニ不申越候テモ相調ノ儀ハ、便宜ヲ以申越候ハ、夫仕相減等ニ候条、可成程宿次相減候様ニト此節被仰渡候、依之諸所ヨリ被申越儀、不差立用事ノ儀ハ便ヲ以可被申越候、何ソ急ニ不申越候テ不叶訳迄ヲ宿次・飛脚等ニテ被申越可然候、尤、廿日廻上納米差出等ノ儀、宿次ヲ以被差越ニ不及候間、各其心得ニテ夫仕等費無之様可被申談候、此段為可申渡如此ニ候、以上、

亥十一月八日

郡座

四七一九

覚

一連々米高直ニ成行ノ由其聞得候、下々不勝手ニ付当春ハ米買入上納差留候間、出物米令不足買入上納仕度存候人ハ高所へ直々可申出候、時々売場ヨリ勝手能様可申渡候、此旨所中へ早々可申渡者也、

宝永五子閏正月十八日

御勝手方

取次
町田八右衛門

四七二〇

覚

其見合可仕候、

一出火ノ節、面々屋敷ヲ明罷出候様ニ有之候テハ火用心

悪敷有之候間、当番ノ面々ニテモ火ノ様子見合、尤、

屋敷近辺於出火ハ火不散様消留可申候、御城ノ儀ハ

下方出火候ハ、上方御役ノ面々罷出可仕差引候、上方

出火ノ節モ御役ノ面々右同断相心得可申候、

一定火消被仰付候外出火方角与頭ノ儀、小火ノ砌ハ致在

宿罷在、及大火候ハ、馳付、火ノ不散様消留可申候、

尤、小火ニテモ屋敷近方ニテ候ハ、早速馳付消可申候、

一上方於出火下組頭并組中ノ人数致在宿罷在、大火ニ及

候ハ、無遅退罷出、御城下へ控居可申候、下方出火ノ

節モ上方ノ面々右同断心得可申候、

一御城内馳付兼テ被仰付置候面々且又御供番ノ儀、遠方

小火ノ節惣様早速罷出ニ不及候、火ノ様子次第罷出可

相勤候、

一定火消ノ外組頭ニ相付候与ノ人数、此中ノ通早速火元

へ馳付、随分相防可申候、組頭於馳付候ハ其面々下知

次第可相勤候、

一火元馳付候者共、中途何カト声高無益ノ物音一切令禁

一鹿見島中出火ノ節、御城近方ハ格別、遠方并小火ノ

砌不致騒動様ニ相心得可然候、火元馳付ノ儀、定火消

被仰付置候面々可相統候、方角ノ与頭ノ儀ハ致在宅、

屋敷中ノ火廻堅固ニ可申付候、火元近キ親類又ハ無扱

方へ加勢人数遣候儀ハ其通可有之候、

一出火有之候節ハ詰居候当番ノ面々、虎ノ間ニ罷出可致

下知候、退出已後小火ノ節、御家老并若年寄・大御目

付・御用人・表御目付皆共ニ、御城ニ罷出候ニ不及候

間、当番ノ人計罷出、虎ノ間へ罷在万事可致差引候、

依火元ノ様子ハ面々勤ノ座エモ可罷通候、

一出火ノ節、御城工罷出候面々、御城中ニモ不罷通

候テ相濟砌ハ御門先橋辺ニ罷在諸事可致差引候、火ノ

様子次第第二ハ、御城中ニモ罷通可仕差引候、

一小火ノ節、御城中方々致灯候得ハ却テ火用心悪敷候

間、猥ニ相灯申間敷候、灯不致候テ不叶節ハ時宜次第

止候、

一 火事見分人ノ儀、一切令禁止候、且又火事場ニテ不随下知者ノ儀、無用捨可致披露通目付へ申付置候間、右体ノ者ハ可及沙汰候条、緩ニ存間敷候、右ノ通被仰付事候間致下知堅固ニ可被相務候、尤、支配中へ可被申渡候、以上、

子閏正月廿三日

御家老座印

与所

四七二

他国ヨリノ御使者并飛脚到着ノ節所中申付様ノ覚

一 他国ヨリ御使者有之候節、入来候境目御番所ヨリノ到来及遲滞儀有之不宜候間、鹿兒島へ申越候儀、此中ノ通早速可申越由、境目御番所番人工申渡置候、尤、嘸所へモ可申出旨、是又申渡候事、

一 御領内諸所御使者泊休且又召列候人数并人馬入用ノ員数承届、鹿兒島并通路ノ諸所又ハ嘸所へモ申越候儀、此中ノ通滞無之様弥可申越ノ由、是又境目御番所番人工申渡置候事、

一 御使者泊休・人馬等ノ儀、境目御番所ヨリ先達テ諸所へ可申越候間、無滞様可仕置ノ事、

一 御使者宿ノ儀、其所へ到着無之内御使者召列候人数相応ニ見合、掃除旁入念着拵申付置、其所ノ嘸・役人詰居万端大方無之様可致差引候事、

一 御使者到着ノ節ハ其所ノ役人ニテモ宿ノ亭主ニテモ此中ノ通町口迄罷出可致案内ノ事、

一 御使者宿用間并宿ノ亭主ノ儀、御使者宿へ混ト詰居用事不滞様可仕候、尤、泊休・立宿ノ所ニテモ可為同断ノ事、

一 御使者通路ノ節、往還ノ衆中以下馬ニ乗候者ハ下馬イタシ、荷馬不引通、荷物等負候者共不罷通側へ引除罷在、成程敬ノ様子相見得候様可仕候、他国ニテハ成程輕者ニテモ土下見得候モノニ行逢候節ハ百姓・町人已下尤致下馬、荷馬等側へ引除其敬有之候処、御領国中ノ者共ハ左様無之稀々二者無作法ノモノモ有之、御外聞不成合儀有之候間、随分可入念候、大方ニ存候者ハ屹可被仰付候事、

一 御使者通路ノ道筋所次礎成モノ案内ニ可相付候、左候

テ、途中ノ用事モ無滞弁可申候、且又駕籠昇其外人足等我儘ノ儀不申、聊大方無之様可相慎、右案内ノ者徒ノ物語并御領内ノ物沙汰兼テ仕間敷候事、

一 諸所喫・役人共ヲ始、其外以下ノ者迄御使者方へ相詰候モノハ衣服等見苦敷無之様可心得候、馬カタ・駕籠昇・人足等髪サカヤキ仕、是又見苦敷為体ニ無之様入念可申付候事、

一 御使者福山・加治木ヨリ船ニテ鹿兒島へ罷越候ハ、乗馬陸路可遣候間、於中途右馬付ノ者ヨリ用事於申出ハ無滞相達可申候、尤、代物高直ニ取間敷候事、

一 御使者乗船ノ船場并船下リノ節、下知人罷出其所ノ者共無作法不相見得様可加下知候、尤、見物ノ体ニテ猥ニ致徘徊候儀可為停止候事、

一 御使者・飛脚於諸所雜用等ノ用物申出候節、不及遲滞早速相達、代銀高直取間敷候事、

一 御使者并飛脚通路ノ諸所途中并泊休又ハ立宿ノ所ニテモ喫・役人・宿ノ亭主等ニイタリ、可成程敬候心入ヲ以万端ノ儀丁寧ニ心得不如意無之様可仕候、此方ノ御使者他国へ被差越候節、物毎丁寧ニ有之事ニ候間可入

念候、田舎者ノ風俗ニテ我儘ヲ働、此已後不成合ノ儀モ於有之ハ屹御咎可申付事、

右ケ条、堅固ニ可相守候、若大形ノ儀有之候ハ、可及沙汰者也、

宝永五年子三月廿三日 御家老座印

諸所喫中

役人中

四七三二

旅人御領内差通候付テ於諸所申付様ノ覚

一 他国者御領内へ商売ノ志ニテ罷越、同所証文持參、商売ノ品并銀子致所持、商売ノ色相見得候者ハ於御番所入念相改、於無別条者御番所差通事候、右ノ旅人何月何日御番所差通候由ハ番人ヨリ致付状鹿兒島問屋へ可差越候、依之右ノ旅人問屋へ不差越内御領内諸所へ滞在致商売ノ儀令停止候間諸所へ差置間敷候、惣テ問屋付状無之旅人其所へ會テ不差置、早速次ノ外城へ立退セ外城次順々ニ左様可相心得候、尤、右ノ段ハ以便宜町奉行所へ可申越ノ事、

一右ノ旅人為商売御領内諸所へ罷越候節ハ日数ヲ定、問屋ヨリ其段嘜・役人中へ致付状可差越候間、問屋書付見届定ノ日数相過候ハ、是又所次ニ旅人追帰何方エモ暫ノ間モ滞セ間敷事、

一他国ヨリ六拾六部經納又ハ札納順礼行脚ノ者、寺院仏閣へ為參詣罷越候付テ御領内へ差通候段々ノ儀、此節境目番所へ委細申渡趣有之參詣所相究候、依之右ノ旅人差通候御番所ヨリ何月何日何時御番所差通候由書付、右ノ旅人へ持セ其所ノ嘜・役人中へ可差越候間、右ノ書付見届ノ由次書ニ致時付旅人へ相渡、夫ヨリ次ノ外城順々ニ次書ニ是又致時付、鹿兒島問屋へ旅人可差越候事、

一右旅人不嫌夜白罷通儀ニテハ無之候、諸所へ滞セ間敷タメニ時付為致候間、旅人致一宿候夜中ノ刻限其考可有之事、

一右ノ旅人參詣所庄内・高城等東霧島、曾於郡霧島山、大隅正八幡、鹿兒島福昌寺、水引新田宮ニ此節相究、右ノ外ニ參詣堅無用ニ申付、脇道ニ立寄ノ儀令禁止候
通道筋ヲ可差通事、

一風雨洪水等ニ付テ令滞在候ハ、其訳迄モ次書ニ可書記候、尤、一宿ノ外諸所へ曾テ滞セ間敷事、

一右旅人昼ノ内其所へ早ク令着、次ノ外城迄罷越候テモ夜不入考ニ候ハ、必其所ヲ立セ差越可申事、

一旅人間屋へ着候ハ、問屋ヨリモ次書ニ時付イタシ可差越候間、罷通候順路ノ於諸所モ右ノ次第ノ次書旅人へ相渡、滞無之様申聞、經納參詣相濟候テモ少モ御領内へ不滞、其最寄ノ境目番所ヨリ無油断帰国可為致事、

但、右ノ旅人共最前人来候番所ヨリ可罷帰ト申候ハ、段々ノ訳最前ノ通申付、道筋モ如元ノ可差通候、此段御番所へモ申渡置候、

一旅人氣儘ヲ働可申儀モ可有之候、中途滞候ハ、志ノ祈願不相濟候共滞候在所ヨリ直々最寄ノ境目御番所へ差越帰国可為致候、頃日他国者ノ内宗門疑敷者有之、相捕長崎御奉行所へ差送候付テ、旅人モ就中稠敷改用事仕廻候内、少ニテモ御領内へ不滞儀候由委可申聞事、
一路銀致所持候儀、於御番所見届其旨番人ヨリ書付ニ相記候、然共路銀ヲ隠シ置托鉢ニテ罷通候者モ可有之候、御領内ノ儀、田島微少ニ有之、國中ノ者給用ノ米穀及

不足難儀仕事候故、托鉢ニテ罷通候旅人領内停止ニ申付由ニテ、致托鉢候共何様輕キ品ニテモ曾テ取遣間敷事、

一 順礼行脚体ノ者御領内ニテ強儀ヲ申懸、旅籠ヲ頼代物ヲ不相払罷通、信心ノ寄持ヲ申候トテ最算銀米ヲ出候町人・百姓抔モ有之由其間得候、別テ不届ニ候、此已後通路ノ旅人ニ銀錢・米穀ノ類少ニテモ取セ間敷事、
一 板行ノ書籍延喜式ニ相見得候神社、日向国庄内・高城東霧島山、大隅国分正八幡・大穴持・韓国大明神、福山宮浦大明神、薩摩国顯娃開聞、出水加志久利大明神へ可致参詣ト申候旅人若有之候節ノ事、

右同所証文・路銀持来候ハ、御番所ニテ承届、於無別条ハ可差通候、御領内罷通候段々ノ次第、六拾六部經納・順礼行脚ノ者差通候趣ニ少モ相替儀無之候間、右ノ通弥相守大方無之様ニ可入念事、

一 外城一ヶ所ニ旅人定宿二ヶ所ツ、此節ヨリ申付候間、通筋ノ諸所人家多所へ見合置可申候、一宿立宿ニテモ右宿へ差置可申候、左候テ、其所ニテ旅人宿何左衛門へ申付候由、地頭へ可申出置ノ候、尤、右宿クリ替候

節モ地頭へ可申出候、且又堂宮エ一宿為致候儀、堅令停止候事、

但、此中ヨリ旅人問屋有之候諸所ハ旅人宿相定ニハ不及候、

一定置候旅人宿ノ外旅人へ為致宿候者於有之ハ宿主へ科料青銅百疋可申付候、其品ニヨリ籠舎ヲモ可申付候事、
一 旅人参詣ノ所ニモ暫ノ間召置可申候、并々被休セ候儀難成候由可申聞候、尤、滞留堅停止候、若病氣ト申候ハ、早速医師ニ見セ、病氣無別条候ハ、快氣ノ内可差置候、病氣ニカコ付候者モ多由候間、随分氣ヲ付入念可申事、

一所役人中仮右ノ儀不存候共、役ノ不祥(群)ニ時宜次第御咎可申付事、

一 諸所工罷在候經納・大社参詣・札納ノ順礼行脚ノ者、当五月十五日ヨリ相改参詣ノ祈願不相濟候共、同廿日迄ノ内ニ少モ無延引其所ヨリ衆中宰領相付、最寄ノ境目番所ヨリ帰国可為致候、右旅人共へ可申聞ハ領内ノ儀、田畑微少ニ有之、米穀及不足頃日国中之者及飢事候処、旅人数百人托鉢ニテ令巡廻領国ノ者致迷惑事、

其上宗門ニ疑敷者有之、近キ比相捕長崎御奉行所へ差送、旁以國中ノ妨ニ成候旅人ハ不殘帰国申付候由申聞、右体ノ旅人ハ衆中宰領ニテ帰国可為致候、何様ノ申分仕候共不受付、一人モ残シ置間敷候、左候テ、何国何所ノ何左衛門ト仮名儘ニ書認追テ帰国為仕候、首尾当番御用人中へ可申越之候、右旅人共ニ非法之儀不仕、成程慇懃ニ訊モ申聞、何様強儀ヲ働氣任イタシ候共、曾テ打擲不致留置、鹿兒島へ可得差図事、

一 問屋付ニテ為商売諸所へ差越居候旅人ハ、此節ハ先御構無之事、
右ノ旨無緩疎相守所中へ早々可申聞置候、大方ノ儀於有之ハ急度可申付者也、

宝永五年子三月廿三日

御家老座印

諸所囑中

役人中

四七二三

一 不依自他国ノ者旅人病氣差出候者可有之時ハ所ノ者ヨリ随分丁寧ニ可致看病、急ニ難遂快氣相見得候ハ、

御領国ノ者ハ病人ノ在所又ハ主人又ハ支配頭ノ所ナト

へ早々可申知、問屋付ノ他国人ハ其者ノ問屋へ可申知
七、未問屋ニモ不相付モノハ地頭へ其訊可申出事、

一 他国ノ牛馬御領内ニテ病差出又ハ怪我杯イタシ候ハ、
早速馬医ヲ相懸随分丁寧ニ可致養生候、急ニ可得快氣
体ニモ無之付テ其主ヨリ所ノモノへ牛馬飼料・養生料
可遣候間、請取候テ可致療養モノハ有之間敷哉ト申候
ハ、所中へ申触、請取可致養生ト申者有之候ハ、其モ
ノへ申付可為致療養、飼料・養生料不合ニ不取様可申
付、勿論右体ノ儀有之候ハ、早々地頭へ可申出事、

一 右ノ通、御領内ノモノ牛馬ヲ請取致療養事候ハ、其所
ノ役人ヨリ証文ヲ遣、且又牛馬率來候者ヨリモ証文可
取置、此方ヨリ可遣証文大格ノ案紙・別紙渡置事、

但、牛馬主ノ応高下文章ノ挨拶ハ相応ニ可取直事、

一 於御領国他国ノ牛馬頓死ナトイタシ候儀有之候時ハ所
ノモノトモ出合、兼テ右式ノモノ納候所ニ懇ニ可納、
右付テハ互ニ証文可取替置、証文ノ案紙是又渡置事、
但、死牛馬ヲ捨候ト唱間敷候、納候ト唱可申候、
右ノ旨兼テ得其意罷在、旅人ノ病人又ハ他国ノ牛馬病

等差發候節ハ惣テ懇ニ可申付、御領国ノ牛馬ニテモ煩

候節又ハ致怪我忤候時モ右ノ趣ニ準丁寧ニ可申付、生

類隣ノ儀ハ當時別テ稠敷被仰付事候間、聊疎ニ不存隨

分入念可申付、若大形ノ儀有之候ハ、所役人中可為曲

事者也、

(宝永五年)
子三月

四七二四

覚写

御自分事、用事付テ当領へ被相越候処ニ、何ト申所ニテ

被率来候馬致怪我、何レノ所ヲ痛候付テ、則馬医ヲ相懸

種々致養生候得共養生不相叶候、右ノ段少モ別条無之候、

為後日如此候、以上、

年号月日

松平薩摩守領内何州何村役人

何ノ何左衛門 印

何ノ何左衛門 印

何ノ何左衛門 印

何ノ何ノ守様御内
何ノ何左衛門殿

四七二五

覚写

御自分事、用事付テ当領工被差越候処ニ、何ト申所ニテ

被率来候馬致怪我病候付テ色々養生被成候得共、急可被

率帰程ニ快不罷成候付テ致本復候節迄被付居養生被成候

儀難成取有之故、私へ被頼置候間、弥医師ヲ掛随分丁寧

ニ可致養生候、依之為飼料何何程為養生料何何程被遣、

慥受取申候儀別条無御座候、為後日如此候、以上、

年号月日

松平薩摩守領内何州何所

何左衛門 印

何ノ何ノ守様御領内何所
何ノ何左衛門殿

四七二六

覚写

御自分当領内へ被率来候馬致怪我病候付テ此方ヨリ色々々

加助力養生被成候得共、急可被率帰程ニ無之候付テ当領

内何ノ所ノ何左衛門ト申者へ被頼置候付、養生料・飼料

迄被渡置候間、弥以入念致養生候様可申付候、少モ為致

大形候儀有間敷候、以上、

年号月日

松平薩摩守領内何州何村役人

何ノ何左衛門 印

何ノ何ノ守様御領何所
何左衛門殿

右同
何ノ何左衛門 印
右同
何ノ何左衛門 印

四七二七

覚写

御自分事、用事付テ当領へ被相越候処ニ、何卜申所ニテ
被率来候牛病氣馬嘔病差出候付テ、則馬医ヲ相掛種々致養生候
得共養生不相叶候、右ノ段少モ別条無之候、為後日如此
候、以上、

年号月日

松平薩摩守領内何州何村役人

何ノ何左衛門 印

何ノ何左衛門 印

何ノ何左衛門 印

何ノ何ノ守様御内
何ノ何左衛門殿

四七二八(の1)

一家中ノ者、出入・喧嘩等有之節々此程ハ及披露御札明
有之、其上ニテ段々ニ被仰付儀候得共、其通ニテハ主
人ノ仕置無之家中ノ締モ不宜候間、向後者御領内御直

ノ者ニ不相掛、一家中迄ノ出入・喧嘩等者主人ヨリ道
理相応ニ可申付候、及死罪候答ノ者ハ御家老中へ相届
候上ニテ死罪可申付候、届ノ次第ハ根本ノ儀委細申出
不及候、何答付テ死罪申付度分ノ儀可相届候、仮令別
支配ノ者ニ相懸候儀ニテモ同所ニテ埒明筈ノ儀共ハ勿
論双方内談ノ上可相済候、尤、百姓・岡町浦浜寺門前
者ニテモ一在所一所持ノ領分ニ罷在者、出入・喧嘩等
ノ取捌ハ家来同前ニ領主引受ニ可相計候、以上、

子三月

(四七二八の2)

一右ノ通被 仰出候間、組頭中へ申渡寄々通達ニテ奉得

其意可然候、

一大目付へモ右ノ段申渡、向後一家中迄ノ出入・喧嘩等

者御裁許無之事候間被奉得其意、口事奉行へモ被申渡

其心得イタシ可然候、

四七二九

覚

一御当国ノ儀ノ致死去候者、居宅ヨリ棺ニ乗セ葬礼場ノ

行列ニテ寺迄相越事ニ候、此仕形イツカタエモ無之作

法ノ由候、御国古来ノ風儀ニハ候得共、棺ヲ飾、通筋

ノ他屋敷迄辻挑灯ヲ出シ、御城下ナトヲネリ候テ遺

体ヲ持越候儀如何ニ候間、向後大身ノ面々死去ノ節ハ

居宅ヨリ不及行列、寺迄密ニ遺体ヲ差越、葬ノ規式ハ

寺内ヨリ勝手能相調可然候、

一 此程居宅ニテ棺廻自分ニ不相調体ノ小身者、遺体寺へ

差越候テ寺ヨリノ葬礼ニ相調候テ、却テ不勝手ノ訳モ

有之筈ニ候間、今迄有来候行列途中ノ分ハ致無用、居

宅ヨリ者棺迄ニテ差越、葬礼ノ規式ハ葬場所ニテ輕相

調可然候、

一 棺廻ハ一旦ノ事候間、無謂莊嚴無益ノ費候条、大小身

共ニ有来候莊嚴ハ形ヲ付候分ニテ礼儀不欠様成程輕可

相調候、惣テ葬礼ノ規式付テ内々無益ノ費有之由候間、

礼儀相備リ候外ノカサリハ堅令停止候、

右ノ通、此節ヨリ被相改候間、向後此旨相守候様可被

申渡候、以上、
子四月十五日

四七三〇

他国工不出品々

一 刀 一 塩焔(硝力) 一 鉄炮

一 数寄道具色々 一 掛物ノ類 一 真綿

一 琉球細布白地 一 同上布 一 同中布島

一 同三葉 絹 一 同アヤサビ島 一 同下布白地島

一 同紬 一 同島芭蕉布 一 同白芭蕉布品々

一 同綬 一 同香合 一 同香ノ類

一 同青貝沈金物ノ類何色ニテモ 一 同泡盛酒

一 同草木色々 一 唐人ノ墨蹟 一 唐人ノ絵

一 蘇鉄 一 柘榴ノ木 一 棕栢竹

一 蘭 一 野草 一 モタマ

一 硫黄 一 樟腦 一 漆

一 蠟 一 棕栢皮 一 黄楊ノ木

一 楊梅皮 一 木ノ子 一 キクラゲ

一 ウキン(響金力) 一 ミヤウハン 一 ホラノ貝

一 ヤコ貝ノカラ 一 イタラ貝ノカラ 一 黒ツク并綱繩ノ類

一 馬ノ尾 一 樽 一 葺板 一 錫地カネ

一 鍋并鍋地カネ 一 カラカネ 一 大豆

一 雑穀 一 小椎 一 粉ヌカ

子三月

右寺柱御番所へ被召渡候写也、

四七三二

頭々為心得申渡覚

一 組中ノ士無役ノ面々、組頭宅工稀ニハ罷出可致対面旨別紙ヲ以申渡候、或別テ小身者或辺土ナトニ罷居候者、惣テ右ノ通相勤候事差支訳モ有之、難罷出人モ可有之候間、左様ノ人工屹被致沙汰儀ニハ及間敷候、何ソ勤モ無之徒ニ罷在候人ハ第一支配頭ノ人、其人々ノ器量見届ヘキ程儀無之、其人ヨリモ器量ノ程可頭様モ無之筈ニ候付テ、右ノ通申渡事ニ候間可被致其心得候、以上、

子六月朔日

四七三一

一 御家老直触ノ面々、当時無役ニテ罷在候人且又無役ノ地頭持ノ儀者、稀ニ八月番ノ御家老宅工朝五ツ時前ニ罷出可被致対面候、毎日 御城工不被罷出面々ハ第一御機嫌ノ程ヲモ為被奉承知ニモ候間、右ノ通申渡事、

一 組中ノ士無役ノ面々ハ組頭宅工右ノ通可罷出候、

一 支配有之面々ハ其支配頭宅工右同断可罷出候、

右ハ、無役ノ面々者 御城向ノ儀ヲモ不案内ニ有之、致屹候所へ終ニ罷出候付テハ不物馴筈ニ候、右ノ通相勤候、輕薄ニ相見得候ナト、存違差控候儀モ可有之候間、左様ニ無之様相心得可罷出候、以上、

子六月朔日

四七三三

一 御在府ノ節、正月ノ儀者年首為御祝儀登 城仕候人々、向後御家老中可致対面旨被 仰出候、

一 御一門・御番頭・与頭又者組頭列其外歴々并子共、御用人列・諸役人、月並御礼罷出候面々、 御在府ノ節ハ正月元日ニ朝四ツ時前ニ可罷出候、

一 組中諸士ノ儀ハ三日朝四時前ニ可罷出候、

一組中ノ諸士五節供ニハ罷出御帳ニ可相付候、
右ノ通得其意可相勤候、以上、

子六月朔日

右三通、佐多豊前様御宅ニテ被仰渡候、

四七三四

写

一御供立ノ外御家中面々江戸へ致往来候者、大坂東海道・

美濃路・木曾路共ニ罷通候節、向後宿札ヲ張可致一宿
旨被 仰出候間、江戸へ被差遣候面々へ右ノ段此節ヨ
リ不洩様致取次候御用人ヨリ時々可申渡候、宿札ノ恰
合別紙相渡候間、右ノ通可相調旨、是又可被申渡置候、
以上、

立此通

横ハ応人数

可有長短



一杉原太体此紙タケニテ、御馬廻リヨリ御歩行ノ面々迄
宿札ノ恰合此通、

一御馬廻リ以上ハ是ヨリ少々大キニ有之可然候、事々敷

札ヲハリ置候儀者無用ニ仕候様可申付候、

一文字ノ恰合モ右ニ応シ見苦敷無之様可被書調候、

四七三五

組頭中エ可申渡覚写

騎馬高三百石以上乗馬立置候様ニト被 仰出置候得共、
乗馬不相立モ有之由候、三百石以上ニテモ内々勝手向為
差迫人モ有之、乗馬難立置事モ可有之候、且又式百石以
下ニモ身体向宜、三百石以上ノ者ニモ相弁候程ノ身帯向
ノ者モ可有之候得ハ、左様成者ハ御馬廻相勤候程ノ面々
者乗馬立置可然候、此段屹ハ難被仰付候得共、御当代ノ
儀乗馬立置候者少ク候間、右体ノ致考ヲ吟味、馬可立者
内々相シラへ可被申出候、

子七月十二日

写

一 輕キ鹿尾島士并外城衆中其外不依何者譜代ノ家来ニア
ラサル者、一節抱候ハ、召仕候儀有之候処、其者永代
家来ニテハ無之ト存候心懸有之二付、抱主ヨリ申付候
儀ヲ不相守致氣儘ヲ候者多々有之候、一朝一夕ニテモ
隨身イタシ候得ハ主従ノ儀ハ不通事候間、勿論抱主ヨ
リ申付候儀堅固ニ相守、惣テ主従ノ礼儀不乱、譜代ノ
家来同前ニ可相勤事、

一家中致奉公候士ハ、何レモ不幸ニテノ儀ニ候得ハ諸事
勤方雜人ニ相替堅固ニ相勤、一度御直ノ御奉公可相勤
ト杜ハケミ可申事ニ候処、其儀ヲ不存元ハ士ニテ永代
ノ家来ニテハ無之ト申事ノミヲ心底ニ挾罷在、却テ氣
儘イタシ抱主ヨリ申付候儀ヲモ致大形、剩主人ノ致供
御供先・下馬先杯ニテノ下知ヲモ不相守者有之由、不
届至極候事、

一 鹿尾島士・外城衆中外ノ抱者共ノ儀モ永代ノ家来ニテ
無之ト存候心底故、右断致氣儘候由、不届至極候事、
一 右ノ通ノ者、抱主ニ対シアタヲナシ候者有之候ハ、永

代ノ家来ヨリ主人エアタヲナシ候同前、類中ノ者迄モ
重科可被仰付候事、

一 一朝一夕ニテモ致隨身扶助受候者勿論扶助ヲ不受一旦
為見馴致隨身候者トテモ、隨身ノ契約イタシ候上ハ主
人ノ礼儀可乱道理無之、尤、惣テノ儀家来ノ格式ニ不
致候テ不叶筈ニ候処ニ、其旨ヲ不致氣儘主従ノ礼ヲ
乱シ、不謂不礼ノ働ナト致者アラハ抱主ヨリ永代ノ家
来同前ニ可申付候、無拋儀ニ付打捨候トテモ御構無之
候事、

右ノ趣可触置旨此節被 仰出候条、末々ノ者迄モ不洩
様時々可申聞置候、尤、地頭所并一所持ノ面々、地頭
所并一所ノ地ヘモ可被申渡置候、ケ様ノ儀一旦触渡候
テモ末々ノ者致忘却候得ハ無詮事候間、向後召抱候節
ハ手形右^(二脱カ)ノ趣相調候様可申渡者也、

子七月

四七三七

一 繼目養子願申出如願被仰付候節、右仰渡其養父死去ノ
年中ニテ候ハ、繼目養子罷成者ハ仰渡ノ日ヨリ五拾

日ノ忌并十三ヶ月ノ服可受候、

一年ヲ越候テ継目養子被仰付候ハ、仰渡ノ日ヨリ服計定式ニ可受候、忌ハ受申ニ不及候、

一 継目養子ニテハ無之養子計ノ願ヲ申上置、未被仰渡内願主死去ノ節ハ養子ニ罷成筈ノ者服忌不及受候、

一 養子ノ願申出置候者、死後養子ノ儀被仰付候ハ、最早継目養子罷成事候間、其仰渡養父死去候年中ニテ候ハ、

定式ノ服忌可受候、年ヲ越候テ被仰渡候ハ、其日ヨリ服計受候、忌ハ受申ニ不及候、

一年経候テ継目養子奉願被 仰付候者モ服ノ儀ハ右ニ可準候、

右ノ通被 仰出候間、組中ノ面々兼テ奉得其意候様ニ卜組中へ申渡、地頭所有之面々者地頭所へモ可申渡候、

以上、

子十一月

四七三八

写

大錢通用ノ儀差支候事有之、下々迷惑仕候由被聞召候、

依之向後大錢可相止ノ旨被 仰出候、只今迄御藏ヨリ相

渡候大錢連々引替可被下旨、江戸町中へ為被仰渡ノ由候間、此段承知仕候様与中へ可被申渡者也、

宝永六年丑二月十一日

御家老座印

与所

四七三九

写

一 往還ノ道筋並木植候儀、諸国一統ニ被仰渡植調有之候得共、有来並松ノ大道筋ニモ道筋相直、古道ニハ並木

有之、新道ニハ並木無之所見分不宜候間、新道ニ植次可申候事、

一 大道筋ニテ無之候共、為差立通道筋ニハ並松・並檀・並杉等、其所ノ土地ニ相応ノ木ヲ致吟味、或植付或差

立候様ニモ可仕候事、

一 右ノ外ニモ外城卜外城往還ノ道筋同断、植木差杉等見

合ヲ以可仕候事、

一 道筋ノ岸ニ並木有之、岸崩木ノ根見得候程ニ有之所、

又ハ倒捨リ候所者道ヨリ少々引退候得共、植所於有之

ハ仕立候テ元ノ並木連々伐除候方可然候事、

一右ノ木仕立候儀、其所士井中宿・社家門前ノ者罷出可相調候、百姓町浜ノ者召仕候儀ハ可有捨事、

一右仕立場野火ノ用心ホサキ草刈等モ其植候者後ニ可仕候、乍然不及手所ハ所役ニモ談儀次第可申付候、令油断野火ニ焼枯候節ハ必植次ヲ可申付候事、

一道筋ヲ直シ候得ハ通路ノ順モ宜、古道ニ田島モ出来可申所ハ見合、談儀次第連々道筋相直候ハ、田島開作ノ得失、是程ハ可有之由相考可申出候事、

一海上ヨリ見込候所ハ松林・杉林・植檀又ハ雜竹木立山ニモ申付可然候、耕作村居ニ障於有之ハ林ニ可仕立所見合可申付候事、

一井手溝道橋修補・並木不如意ノ所ハ松山竹林等仕立有之所モ相見得、今以不仕立置処ハ場所見合、此節ヨリ並木仕立候様可申付事、

一用水山毎年手広仕候様申付候、且又溜池ニ不及候共耕作ノ手透有之節、水堤雨置候ハ、当分水洩候共漸土モ居リ泥モ溜リ水持宜敷罷成、干損ノ節少成トモ用事ニ成候筋申付候様可有見分事、

一道橋無油断可致修補旨、節々申渡儀ニ候得共、平日令

油断歴々通道ノ節俄ニ致普請候故、草ヲ払候テモ歩行ノ障有之、道ヲケツリ橋ヲ繕候テモ地カタマリ不申、

雨雪ニハ踏候テモ往来ノ妨ニ候、片岸ノ危所垣調候テモ俄普請者不宜、旁以所諸役人連々大形故候間、其所中ニテ道筋普請掃除場一村ノ内ニテモ小村列ヲ以人夫

ニ割付相渡、其組合ノ内ニテ致普請取繕拵置、俄普請無之様ニ申付可然事、
右条々、山奉行・郡奉行下知有之筈候得共、手広事ニ

テ往来ノ序ニハ下知不相届候間、此節岩下佐次右衛門申付差越候条、植木指杉等時節ヲ以申付、可然候場所

旁見合次第所諸役人中へ可申渡之、勿論山奉行・郡奉行へモ申渡置候条得其意、右ノ趣堅固ニ相勤候様ニト
佐次右衛門へ可被申渡者也、
宝永五年子十二月十四日 御勝手方印

御勘定奉行

四七四〇

今度南泉院御再興付組中ヨリ応持高人足可差出候、

一持高式百石以上五百石迄人足老人、

一同五百石以上千石迄人足式人、

一同千石已上五千石迄人足三人、

一同五千石以上壹万石迄人足四人、

一同壹万石以上人足五人、

右ノ通、御家老与一組・壹番与一組・三番与一組・五番与
式番与一組・四番与一組・六番与

一組、右四組合致人数賦、来ル十七日ヨリ四番替二八

月廿九日迄ノ間、未明ヨリ人足差出候様与中エ可被申

渡候、尤、右一組ツ、申合人足名書帳於与所相調、南

泉院御普請方へ可被差出置候、左候ハ、右帳面ヲ以致

星合召仕候、人足壹人一日ニ真米壹升ツ、可被下候間、

此段承置候様、是又可被申渡置者也、

宝永六年丑七月十一日 御家老座印

組所

四七四一

一此節 東照宮御再興別当寺南泉院御修造被仰付、御

遷宮御遷座被相調候間、来ル廿七日・廿九日・五月朔

日、右三ヶ日ノ内組中ノ諸士、大小身男女心次第参詣

御免被遊候間、朝ノ四ツ時ヨリ晚七ツ時迄ノ内 御宮
浜縁迄参詣可仕候事、

但、浜縁ニハ脇指計刺可申事、

一参詣人数ノ内年頭ニ鬨斗目着仕候者ハ、此節計ハ鬨斗
目着可仕候、向後参詣ノ節鬨斗目着ニ不及候、

一五月三日・四日・五日・六日・七日・九日・十一日・

十二日・十三日・十四日、右日数十日ノ分者沙門并足

輕以下末々男女共ニ参詣 御免被遊候間、御宮向拝

ノ庭迄参詣可仕候、刀脇指差候儀不苦候事、

但、足輕以下支度ノ儀、心次第可致候事、

一沙門ノ内於 御城 御目見仕候節、着座仕候僧侶ノ分

者右日限ノ内拝殿迄参詣可仕候事、其外ノ沙門者浜縁
迄参詣可仕候事、

一毎年四月十七日・春秋ノ彼岸中ハ参詣 御免候間、末々

ノ者迄心次第参詣可仕候、参詣所ノ儀ハ此節ノ通可相
守事、

一参銭ノ儀者諸社同前ニ相心得、心次第可致事、

右者、御数代ノ御願望今度御再興御造畢ノ御事候得

ハ末々迄可奉恐慶年候間、無遠慮致参詣候様与中へ可

被相觸候也、

宝永七寅四月廿日

御家老座印

与所

四七四二

一 七夕八朔ニ御一門・一所衆・組頭・御番頭并同列ノ嬪子迄ハ白帷子可致着用旨、先年被 仰出置候、雖然右ノ格式ニテモ當時相勤候御役ノ品白帷子不致着格ノ勲場ニテ候ハ、同役並ノ衣服可致着用候、組頭・御番頭不相勤候共、御役ノ格式、組頭・御番頭ノ格ト被仰付候人者白帷子可致着候、

一 二男三男ニテモ組頭格式ニ往々ハ可取立ト見当有之人ハ七夕八朔ニ白帷子可致着用旨、先年申渡有之候得共、組頭並ノ格式ニ不被 仰付内ハ白帷子着用向後可致無用候、

一 御家老直觸格ノ面々、白帷子着ノ儀可致無用候、

右ノ通被 仰出候間奉得其意、与中へ可被申渡者也、

寅七月朔日

御家老座

御家老与

四七四三

士ノ子共行跡不宜付度々被 仰出趣有之候得共、於于今風俗不相直候、依之此節委細ニ被 仰出候、

一 御当国ノ儀者御譜代ノ士共ニテ候故、殿様ヲ大切奉存、御奉公付テハ老若共身命ヲ差捨候志可有之候、然共平生ノ行跡不宜付テ傍輩中少ノ憤有之候得ハ屏垣ヲ崩礫ヲ打込、或辻々ニ集居往還ノ障ニ罷成、往来ノ者共ニ悪口ヲ申掛不謂及口論、自身ノ非分ヲ不顧致打擲又討捨候儀モ多々有之、右式ノ仕形末々ノ事ニテ奉对 殿様無奉公ノ儀トハ不存段何レモ了簡違ニテ候、右ノ通、士ニ不成合行跡少ニテモ人ノ障ニ罷成候儀、

御当国ニ限右ノ風俗ニ有之候事、御仕置不宜筋ニ他国へモ聞得、畢竟ハ御難題ノ御事ニ候、此儀ヲ以段々御法度ヲ被立被仰渡御事ニ候間、老若共ニ右ノ旨ヲ奉奉知、学文武芸ヲ相嗜、若輩ノ者ニハ親兄弟・年長候者共ヨリ時々申聞、風俗相直候儀當時ノ御奉公ニ候、

一 右体ノ風俗故、若者共ノ交無慝慙ニ有之、纔ノ事ニモ傍輩中或及口論或相果候差究無慝辱ニ成候儀ハ不遁筈ニ候得共、互ニ所行不宜所ヨリ事起、皆以堪忍仕相

濟筈ノ事候処、畢竟忠節孝義ノ程ヲ不存無穿鑿故、私ニ身命ヲ差捨候儀忠孝ノ道ニモ相背、一類迄モ迷惑仕儀幾度モ有之、不便ノ至ニ被 思召上候、傍輩中下々ニテモ不届ノ儀有之候ハ、楚忽ニ事ヲ破不申、其場ヲ致堪忍遂披露候ハ、尤明白ニ御沙汰可被仰付候、依之学文ニ志シ少々成共道理ニ致通達候ハ、右体ノ無所行ハ無之筈候、毎度被加 御憐愍候テ被 仰出候得共、其訳不立儀御仕置不相届様ニ有之、 御氣ノ毒ニ被 思召候間、右ノ訳ヲ得ト奉承知候様可被申聞候、

一若者共ハ山坂ノ達者ヲ心懸候儀、尤可宜事候、右式ノ業者一身ノ嗜ニ罷成、人ノ障ニハ罷成筈候、然共武芸ヲ習山坂ノ達者ヲ仕候得ハ平生ノ様体ヲモ見苦敷仕諸事人ノ障ニ罷成候ヲ手柄ノ様存候儀、別テ心得違ニ候、御奉公付テハ何レモ身命ヲ輕々敷イタス心底ニ候得ハ、御為ニ不宜儀ト実ニ落着仕候ハ、成程心安キ御奉公ニ候間、行跡ヲモ相改可申候事、

一屏垣ヲ崩躒ヲ打込候儀、士ノ家来其外寺門前・町人ノ子共士ノ真似ヲイタシ、右ノ働仕儀モ有之旨相聞得候、此段士ノ風俗宜時者下々迄モ其風俗ニ可相成候、又士

共所行不宜候得ハ其仕形ヲ相真似候、畢竟士ノ子共所行ノ依善惡末々ニ相懸事候得ハ專可相嗜事候、

一士ノ子共学文武芸ヲ心懸行跡能者ハ組頭中ヨリ相札可申出候、左様成者ハ連々ニ宜可被召仕候、

一所行不宜者ハ無芸無能ニテ平日徒ニ罷居、何ノ業ヲモ不仕候付悪行ヲ仕外無之筈ニ候、 殿様エ御世話ヲ掛上ケ、其身ハ親子一類迄迷惑ニ成候事ヲイタシ候者ハ不忠不孝ノ者ニ候、此旨能々親々ヨリモ子共へ可申聞候事、

右ノ条々、 思召ノ趣ニ候間御家老中奉承知、先様最（罷）通候様可被致相談旨 御意候、以上、

寅八月 御取次 鎌田六郎太夫

谷山角太夫

平岡八郎太夫

四七四四

口達頭書

一御預ケ被置札ヲ掛候犬ニ切疵付候事共有之候、 御犬ト札有之候ニ疵付候事不可然事ニ候、

一 鬢・月代今以見苦敷者モ有之候、右通ノ者ハ其頭々ヨリ見出次第大御目付座へ可申出候、

一 花火ノ儀、跡々ヨリ御法度ノ段触流有之候翌晩、平辺

ニ流セイ上ケ御休息所ヨリ被遊 御覽候、其節御側ニ相詰候衆ヨリ咄ニ承候、

一 親々ヨリ傍輩ヲ兼徒ノ夜行堅不差留付、出合等モ仕出不宜候事、

一 若キ内手荒事ヲモ致候者、以後ノ用ニ相立扨ト子共へ

御聞候故、右体ノ儀仕出不宜、畢竟親ノ心得違ニテ候事、

一 御精進日ノ儀、何レモ相慎不申候テ不叶事ニ候、就中

士中釣ナトニハ不罷出咎ニ候、兼テ不吟味ニテハ不図参儀モ可有之候、

寅八月

四七四五

写

一 惣テ掛持屋敷停止ノ事、

一 無御免人屋敷式ケ所致所持候ハ、忝ケ所ハ被召揚御法

様候事、

一 屋敷相直リ当人不召移召置候事、十二月迄ハ不苦候、

夫過候ハ、屋敷可取揚候事、

一 屋敷相直リ自身不罷移余人工預置候儀御禁止候事、

一 士屋敷ヲ内々ニテ町屋敷ニナシ置候事、又ハ町へ借置ノ儀御禁止候事、

一 屋敷拝領被仰付、十二月月過迄不罷移候ハ、可被取揚候、依場所急ニ屋敷立候儀難成所ハ十二月ノ内其旨御勘定所へ申出、差図次第可仕候事、

一 近所へ屋敷代屋敷ナシニ内々ニテ買添、忝ケ所ニマトメ罷居人於有之ハ、忝ケ所ハ可取揚候事、

一 諸士次男三男別立候人工居屋敷拝領被仰付候以後他家ニ養子罷成候人ハ、右拝領屋敷ハ差上可申事、

一 諸座付并諸職人、御預屋敷へ其者不罷居余人住居仕儀御禁止ノ事、

御禁止ノ事、

右ノ通被定置候処、近年改無之付テハ致混乱急ニ難糺儀モ可有之候、依之采春中ニ改申渡咎ニ候間、右ノ趣ヲ以当春中ニ自分ヨリ相シラへ片付置、何ソ申分等於有之ハ御勘定所へ相付可申出候、至御改節申分有之候

共御取揚無之、尤、御法様違ノ屋敷ハ可被取揚候、此旨与中へ不洩様可被申渡置者也、

宝永八卯二月十二日 御家老座印

組所

四七四六

覚

一鹿兒島并諸外城士以下ノ者行逢候節無礼ニ有之、剩於途中不致下馬罷通、亦ハ荷馬ヲ口付ナシニ遣、旁氣儘成仕形ノ者有之候付、惣テ慇懃ニ可致旨、先年ヨリ段々申渡候得共遂テ不相守候間、向後右体ノ者於有之者擲之、依其仕形牢込申付、又ハ一旦路頭ニサラサセ亦者手鎖可申付候、

一士ニテモ下臈同前ノ為体ニテ罷在候節、士ニ行逢候節ハ下臈同前ニ可致慇懃、其身士卜存下臈ノ体ニテ罷在候節モ致無礼候ハ、是又可及沙汰候、

右ノ趣、得其意堅可相守、就中途ノ儀ハ他国者モ罷通候所ニ高下ノ無差別風俗者御仕置不屈筋ニ相見得、別テ不宜事ニ候故、毎々其旨申渡候得共遂テ不相守、別

テ不屈候、依之此節右ノ通申渡候間、末々迄人別ニ申渡、支配頭ヨリ折々其沙汰可致候、不時ニ見分ノ者可差廻候間、聊緩セ存間敷候、

但、右ノ訊申渡候節其訳難聞分、下々ノ者ヲ壹所ニ呼集埒明ニ申渡、亦者名代ニ差出、若輩者杯ニ申聞候テハ差テ其訳不相達筈ニ候条、此節申渡候趣ハ支配頭ノ者ヨリ人別ニ召出、其分致得心候様ニ具ニ可申聞セ置候、

右ノ通、支配中堅固可被申渡者也、
卯十月十六日 御家老座印

御勝手方

四七四七

覚

一大目付以上ノ御役人宅工自分御礼事等ニ付テ見廻人ノ内御一門・御城代・御家老・若年寄・大目付、大身分・独礼格ノ面々へハ家来使ニテ見廻ノ礼可申入候、家督繼目・元服等付テ見廻候節モ家来使ニテ可申入候、

但、家督繼目・元服等付テ見廻ノ節ハ与力使ニテ可

申入哉卜達 貴聞候所ニ、与力ノ儀自分病氣差合等

ノ節又ハ自分参筭ノ節、名代コトクニ与力差遣筭ニ

候儀候得ハ与力使ニ不及家来使ニテ可相濟由被 仰

出候、

一御一門・御城代・御家老・若年寄・大目付、大身分・

独礼格ノ外自分御礼事等付テ大目付以上ノ御役宅へ見

舞候共其届ニ及間敷候、

一年暮互ニ見舞候衆ノ外御家老直申渡ノ御役ノ面々、年

始并節句日御城代・御家老・若年寄・大目付宅へ見廻

候ハ、使ヲ以可申入候、

右ノ外御役ニ無構自分事ニ付テノ付届ハ勝手次第候、

一女中方年礼ノ儀、三ヶ日相過親子兄弟迄ニ見廻、其外

ハ無抛方迄ニ使ヲ以年礼可申入候、乍然自分不参候テ

不叶故有之方ハ各別ニ候、親子兄弟ノ外ハ進物無用候、

右ノ趣達 貴聞、向後右ノ通ニ可仕旨被 仰出候、以

上、

卯十月十七日

四七八

覚

一大身分ニテ江戸エ御供ヲモ相勤候格式ノ面々其身独礼

ノ面々ハ年頭其外御礼事ニ御城代・御家老・若年寄・

大目付へ自分見廻、其外へハ御礼等申儀有之候ハ、其

身勤ニ不及以使可申候、自身被付届ハ勝手次第ニテ候、

一寺社奉行ヨリ以下月次御礼ニ罷出御役人、年頭・御役

替其外御礼事ノ節、御城代・御家老・若年寄・大目付

へ可被参候、

一右御役ノ面々ヨリ 太守様御方へ御祝儀申上候程ノ儀

ハ 又三郎様御方へモ可申上候、御番頭以上ハ御家老

中迄ニ披露状、軽キ儀御内々ノ御機嫌伺ハ御近習役、

又三郎様御方ハ御守役、組頭以下ノ役人ハ御用人迄披

露状、御側勤ノ人ハ御近習役、 又三郎様御方御守役

迄、

一加役被仰付候歟、其外ニモ軽キ御礼事等ノ節ハ右御役

ノ面々月番御家老迄参候歟、又ハ支配ノ頭迄ニ参候歟、

其程疑敷節ハ其支配頭へ得差図可相務候、表立テノ儀

ニテモ無之、御内々ニテ御礼申上儀共鳥津豊前殿・比

志島隼人・名越右膳、右三人ノ内へ依其品可参候、

四七五〇

一 御側廻中通ハ依品島津豊前殿・比志島隼人迄ニ参候テ

覚写

相濟儀モ可有之候、御小姓ハ名越右膳迄参候テモ相濟

儀モ可有之候、其程疑敷候ハ頭々江可得差図候、

一 御礼事・御祝儀事 御城代・御家老・若年寄・大目目付ヨリ御両殿様へ申上候儀、御家老へ状ヲ以可申上候、

一 御役人帳無之小役人ハ役替、何ソ御礼事ハ其頭又ハ其

二 重ニ御内々ヨリ申上不及候、軽キ儀御内々ノ伺御機嫌ハ御近習役迄状ヲ以可申上候、 又三郎様御方ハ御

取次ノ小頭可参候、何レエ参ニ不及候、年頭杯ニ御家

守役へ、

老其外エ参候儀ハ勝手次第、

一 小番・大番ノ内役人ニテ無之、当時ノ勤付テ申渡事共

一 太守様御方へ御祝儀申上候程ノ儀ハ 又三郎様御方へ

有之、其付届致儀有之候ハ組頭工可相勤候、

モ同断可申上候、 御女中様方へハ重儀迄ヲ申上、軽

但、進物番杯ノ様成勤ニテ候、

キ儀ハ申上間敷候、

卯十月十四日

一 御一門卜唱候面々ハ年頭・重キ御礼ノ節、 御城代・御家老へ自身見廻、若年寄・大目付へハ以使可申候、

四七四九

覚

但、軽キ儀ハ 御城代・御家老へモ使ニテ可相濟候、 一 御城代・御家老ハ年頭・重キ御礼ノ節、 御城代・御家老・若年寄迄可参候、大目付へハ以使可申候、

自分家督継目祝ニ御家老相招候、格五千石以上其下ニテ

モ格別ノ者有之候節ハ時々伺、其時分何様ト可被仰付候、

一 若年寄・大目付ハ年頭・重キ御礼ノ節、 御城代・御家老・若年寄・大目付へ可参候、

以上、

卯十月十四日

一年首ニモ御一門・ 御城代・御家老・若年寄・大目目付

以上ノ面々ハ大目目付以下へハ自身見廻不及候、大身分

ニテ江戸工御供ヲモ相勤候面々又ハ其身独礼ノ格式ノ

面々エ八年首其外依品見廻候事モ可有之候、御役付テ
ノ付届ニ右格式ノ面々見廻候共返礼ニ見廻不及候、

一右格式ノ面々輕キ御礼事ニ八月番御家老宅迄可相勤候、

一表立テノ儀ニテ無之御礼ハ、申上候程ノ事有之候節ハ
依品島津豊前殿歟比志島隼人迄ニ可參候、是者其程ニ
可依候、

右格式ノ面々在江戸有之節ハ書状ヲ以可申候、從江戸
モ御国元へ同断、

右者、御一門・御城代・御家老・若年寄・大目付ノ
心得ノ儀ニ候、此外ノ者ノ宅へモ親類歟又者自分付届

ニ依様子見廻候事共ハ一向無用ト申儀ニテハ無之候、
卯十月十四日

四七五一

覚写

一御一門ト唱候事、家筋付テ御身近キ面々ヲ御一門ト唱
申間敷候、平日御取持モ相替、御礼日ニ御挨拶モ有之
候御方ヲ御一門ト唱可申候、当分ハ兵庫殿・周防殿・

小源太殿ニテ候、

一家筋付テ独礼ノ面々ヲ大身ト唱可申候、当分ハ内匠・
左衛門・又次郎・筑後、

一其身付テ独礼ノ面々ヲ其身ニ付テ独礼ト可申候、

一御城代・御家老・若年寄・大目付、右御役ノ面々へ達
貴聞申渡程ノ御用ノ儀ハ直ニ可申渡候、其内不達 御
耳ニモ地頭所・家来等ノ輕キ儀ハ御用人ヲ以可申渡、
首尾能方ニ無之御用ノ儀ハ御用人ヲ以可申渡候、

卯十月十五日

四七五二

一御一門・一所衆・与頭扨ト惣合ニテ江戸杯御祝儀事ニ
申上候節ハ此中ノ通ニテ相濟候、右ノ内細ニ事ヲ分相
シラへ候節ハ右仰出ノ通ニ相心得可罷居通 御意候旨、
比志島隼人ヨリ被申聞致承知候、

卯十月十五日

四七五三

島津筑後工可被申渡覚

一 筑後中抑替合ノ節、自分ヨリ願申出候事モ有之、御見合ヲ以被仰付候儀モ有之、先例不相究候、依之此節右ノ格式被相定候、

一 中抑兩人内一人ハ替合候節、御見合ヲ以可被 仰付候、右ノ者ハ御目付ノ 思召ニテ被 仰付候間、存寄ノ儀御家老へ時々申候様ニ可致候、御役ヲ御目付ト被 仰付ニテハ無之候、諸奉行ノ格ニテモ無之候、格式ハ

以前ノ通ニ候、此節ハ米良勘兵衛被 ^(重堅) 仰付候間、筑後

ヨリ合力遣候儀先例ノ通可致候、今一人ハ替合ノ節、

人柄筑後ヨリ願申出答候間、替合有之節ハ兩三人モ人

柄見合可申出候、其内 御見合次第可被 仰付候、

但、合力遣候儀先例ノ通ト有之儀ハ ^(光久) 寛陽院様御代

中抑被 仰付候節相究候通ノ儀ニテ候、

一 筑後中抑年頭熨斗目致着候儀無用候、

右ノ通被 仰出候間、奉承知候様可被申渡候、以上、

卯十二月廿二日 島津將監

四七五四

写

島津筑後役人・用人・与頭共ノ儀、御光儀其外筑後家ニ付元服・婚礼等屹立候祝儀ノ節ハ前々ヨリ熨斗目着用為致来ノ由候得共、向後ノ儀ハ右式屹立候折目役人迄ハ先例ノ通熨斗目可致着用候、用人・与頭ハ熨斗目着用無用可仕候、右ノ段ハ達貴間候上申渡事候条致承知、已後共右ノ通相心得候様ニ筑後へ可被申渡候、以上、

正徳二辰正月十日

右、町田八右衛門殿御取次ニテ被仰渡、左候テ、八右衛門殿口上ニテ被仰渡、江戸ニ使者被差上候節ハ用人・与頭熨斗目致着用ノ由候、後年ノ儀ハ於江戸時々相伺候ハ、其節ノ時宜次第可被仰付候、此段將監殿ヨリ被仰渡候由承候、

四七五五

覚

一 当座取次役ノ儀、御目付ト改名候間、御用ノ書付差越候節ハ大御目付座ト片書ニテ御目付衆中ト宛書イタシ可差出候、

一 科人親族付ノ儀、此中ハ御目付座ヨリ申越候得共、向

後ハ当座ヨリ申渡筈ニ候、

右両条可得其意候、以上、

辰正月十五日

大御目付座

四七五六

一御側廻ノ若者共宍被下候テハ其身為ニモ宜間敷ト被

思召候付、何方ニテモ宍料理被下間敷旨被仰出候、諸

地頭ニモ此旨奉承知、宍料理御側廻若キ者共ハ出申

間敷旨被 仰出候間、諸地頭へ可被申渡候、以上、

辰三月十五日

四七五七

一家督繼目被 仰付候節又者嫡子出生ノ節杯ハ相応祝仕

候儀、前々ヨリ御免ニテ候処、右体ノ祝仕候節ハ何程

及乱酒候儀モ御免候様相心得、不謂大サハキ杯仕者間々

有之由候、右品付テハ、祝ハ不依高下別テ安堵大慶ノ

節候得ハ前後首尾克祝ヲ調候様可仕候、猥致大酒候儀

共無之様心得可申候、

一右体為差当儀付テ祝仕候節ハ分限相応ヨリモ輕方イタ

シ、賑々敷一通ハ致候トテモ諸事作法宜様可致候、於

江戸ハ猶以声高サハキ候事無之様可致候、右ノ趣ハ從

前々御禁止ニ被 仰出置候処、頃日心得違候者モ有之

由候、差当候祝事モ隱便仕、謡・小ウタナト謡ノ儀モ

不罷成、窮屈成御法ナト、存違者モ可有之候、左様ノ

訳ニテハ無之候、右相述候通前後首尾正敷相交程ノ品

二、謡等ウタイ一通致賑々敷候儀モ被停事ニテハ無之

候、無正体程令大酒士ノ寄合ニハ不相応相見得候仕形

モ有之候付、前々ヨリ其儀モ被停事候条、弥以其旨ヲ

存候様ニトノ儀ニ候間、右ノ趣委得其意候様ニ寄々可

申通候、此書付不及触渡候、御役ヲモ相勤候ハ弥平常

トテモ作法宜氣ヲ付可申候、以上、

辰三月

四七五八

写

道中致往還者ノ儀付今度從 公義被 仰渡趣有之候、

依之面々為心得申渡覺

一道中罷通面々、駄賃・旅籠錢等無相違儲ニ相払、諸事

相慎候様家中下々へ堅可申付候、

一 荷物ノ儀、御定ノ貫目少ニテモ過上仕間敷候、御定ヨリ重キ荷物者於問屋場改ノ筈候間可有其心得候、貫目ノ御定左ニ記、

一 壹駄荷 四拾貫目

一 乗掛人共惣様 四拾貫目

一 カラ尻 五貫目迄ノ荷物ハ不苦候、夫ヨリ

重候得ハ本駄賃不罷成候、

一 一人足壹人持 五貫目

一 長持壹竿 三拾貫目

五貫目持ノ賦人足六人カ、リ、

一 道中宿々ニテ其所ノ者ヨリ理不尽儀仕懸候共、可成程

ハ不事立様致相對首尾能様可計候、縦此方理運ノ事タリトイヘ共理強ク申募リ不及其場事済可罷通候、若相

對ニテ不事済儀ハ其所問屋又ハ年寄ヘ其分申届、時宜

次第可事済候、其上ニテ即時不埒明候ハ、追テ此儀ハ

可致沙汰候、依体ハ御奉行所へ御披露申上儀モ可有之

候間、可承置旨年寄・問屋へ届置罷通、江戸又ハ御国

元ニテ其段可申出候、御奉行所へ及御披露候儀ハ不輕

事候間、以後訳相違筈ノ儀ヲ能々致了簡、右之届可申達候、

一 從 公儀被 仰渡候御書付ノ内、道中宿ノ者共不埒ノ儀有之節ハ旅人ヨリ其所ノ問屋・年寄等二日路・三日路モ召呼ヒ、又ハ訴訟ノタメニ付添参候儀モ有之由相聞得候、向後ハ問屋・年寄召呼ヒ候儀又ハ為訴訟参候事モ相止サセ、其趣道中奉行所へ可申出由被仰渡候間可得其意候、

右之通、從 公儀被仰渡候旨ヲ以為心得申渡儀ニ候間、聊無緩相心得召連候者共ヘモ急度可申付候、家来ノ無調法ハ主人可為越度由被 仰出候条可被得其意候、尤地頭所有之面々者地頭所へモ申渡候様、与中へ可被申渡者也、

辰四月 御家老座

与所

四七五九

一 於諸所或自縊自害或水溺・行倒者惣テ変死ノ者有之節、外城ノ儀ハ所并近外城横目相合死体見届、横目并所役

人ヨリモ遂披露、死体ノ儀者得御差図候上取置事、古
来ヨリ御法様候処、頃日不得御差図死体取置事有之ニ

一 鉄炮式挺 一 豎笠
一 請笠

付テ御咎為被仰付儀多候、右ノ通頃日心得違候所モ有
之候間、自今以後古法ノ通横目并役人共見分ノ上取置
候様心得可然候、此儀屹申渡事ニハ無之候、諸地頭被
得其意内々右ノ趣被申聞置候様、寄々被相違候様可申
達候、以上、

右同惣奉行備定
一 对道具 一 長甫
一 纏沓本 一 手道具一本
一 豎笠 一 弓台沓張
一 鉄炮式挺 一 乘馬沓疋
一 对挟箱 一 茶弁当

正徳元卯七月

一 沓籠 一 合羽籠

四七六〇

御関狩ノ節 御名代備定

一 先供六人ヨリ九人ノ内
一 馬廻四人ヨリ六人ノ内跡押式人

一 四本道具 一 弓台式張
一 鉄砲式挺 一 豎笠

与頭・御番頭并同格ノ人吉野御馬追申目下知、且又
吉野御関狩諸所御馬追奉行ニ被差越候節備定

一 請笠
右同惣奉行備定

一 式本 一 弓台
内、沓本ハ纏、但、御関狩ノ節ハ弓台差置、

一 馬印式本 一 手道具沓本
一 鉄炮式挺

一 鉄炮式挺
一 乘馬沓疋 一 对挟箱

吉野御馬追ノ節 御名代備定
一 四本道具 一 弓台式張

一 供士八九人程 一 草履取
一 豎笠 一 合羽籠

一 沓籠

右ノ面々出水瀬崎 御馬追奉行ニ被差越候節ノ備定

一 三本道具

一 弓台沓張

内、沓本纏、

一 鉄炮沓挺

一 対挟箱

一 乘馬沓疋

一 供士十人程

一 豎笠

一 草履取

一 合羽籠

一 沓籠

右ノ通、此節被相改候間、此書付組所へ召置時々可被見合候、尤、組頭・御番頭候へハ右ノ趣屹下可被相触

置由御差図ニテ候、以上、

正徳二年辰四月十八日

取次 相良權太夫

御家老組所

四七六一

沓所持

島津兵庫殿

川上久馬

島津内記

島津小源太殿

島津図書殿

島津備前殿

島津左衛門

島津内膳

島津将監殿

新納四郎左衛門

桂太七郎

伊集院藏人

大野七郎太夫

島津主水

入来院主馬殿

菱刈孫兵衛

沓所持格

島津周防殿

島津頼母殿

島津新八殿

伊集院半右衛門

伊勢兵部

寄合並

義岡左平太

北郷右衛門八

書入寄合

島津彦太夫

町田勘解由

樺山助太郎

喜入右衛門

北郷作左衛門

吉利長虎

顯娃長左衛門

比志島隼人

諏訪甚六

島津大藏殿

島津求馬殿

島津伊織

島山式部殿

鎌田藤四郎

島津十郎左衛門

西金左衛門

島津十郎左衛門

島津六郎次郎

名越右膳

新納舍人

島津筑後

町田郷九郎

島津市太夫殿

種子島彈正

衾寝仙十郎殿

肝付主殿

河田長右衛門

島津助之丞

島津帶刀

島津内藏

鎌田藤四郎

島津六郎次郎

島津十郎左衛門

島津六郎次郎

島津六郎次郎

島津六郎次郎

伊集院用之助

新納左京

平田新左衛門

島津左内

川上縫殿(久映)

(島津實徳)
小源太殿

二階堂新五右衛門

高橋七郎右衛門

山田新助

右三人者、当時ノ御間柄格式ニ付テ御一門ト唱候ハ其

川上源八

榊山助四郎(久造)

北郷七郎左衛門(久中)

身ニ付テノ事候、家筋ハ一所持、一所持格ニテ候、

桂仁治太郎(久勝)

新納伊織(久見)

鎌田要人(政躬)

一於御家中持高多キ人ヲ末ノ者ヨリ大名ト唱申事モ有之

仁礼仲右衛門

右、御寄合書落故致朱書也、

二候故、御書付ナトニテハ難被仰渡候、

右ノ通唱可申候、御役人ハ当時ノ御役名ヲ唱申事候、無

右両条口達ニテ申達候、

役モ此通唱申答候、組頭並・番頭並被申間敷候、組頭・

正徳二辰十月朔日

番頭ハ御役ニテ候、此間無役ヲ組頭・番頭並ト唱候者寄

合ト申答候、直触格ト此程唱候ハ寄合並ト可申候、此段

四七六三

与中触状ニハ不及候、右名書有之候者ノ内当分罷出者

ハ追テ可申聞候、以上、

今日小源太殿へ御家老参候節、相伴ニ参候御役人ハ先ニ
参、御家老・若年寄・大御目付ハ御城ヨリ直ニ一所ニ

右ノ通被 仰出候間可被申渡候、以上、

列立可参候、已後此格式ニ可致候、御家老参候節ハ相伴

辰十月朔日

ニ先ニ参居者書院ノ座下ニ並居、御家老・若年寄・大御

四七六一

目付座ニ着座イタシ候節段々可致着座候、右ノ通被 仰

四七六一

出候、以上、

一口達ニテ被仰渡候者

辰十月朔日

(島津久年)
兵庫殿
(島津久徳)
周防殿

四七六四

寫

出火ノ儀者、家数五拾以上焼失ノ時ハ鹿兒島并近城在郷共 公義工御届有之事ニ候、火ヲ出候家主者士・凡下ニ不限日数十日逼塞被仰付先例ニ候、火ノ出様ニヨリテ不届ノ差別モ候ハ、日数ノ多少可有之候、御当地并外城衆中・在郷・浦浜ノ者火ヲ出シ、三四ヶ所ノ類火有之候共御咎ニ不及候、然共凡下ヨリ火ヲ出シ土屋敷於令類火ハ纒壹式ヶ所タリトイフトモ日数十日逼塞可被仰付候、尤五六ヶ所以上類火アラハ何レモ日数十日ノ可為逼塞候、右、火本御科ノ儀ハ段々輕重有之、不相並候付テ四月十二日江戸ヨリ委曲被仰越候趣ヲ本ニイタシ、又者此中ヨリ御咎被仰付候例ヲ見合段々相札為見合記置候也、

宝永八年卯正月五日

此通御用人座へ御張紙有之候旨申来候、

四七六五

一服ヲ請候者共六月七月其慎仕来候得共、向後服ノ者門戸ヲ鎖引入相慎候ニ不及候、御城内并御役所ノ勤無

慎相勤可申候、尤、神前方ノ儀ハ堅遠慮可仕候、服者

ニテモ七月廿七日ヨリハ諏訪へ致参詣ノ由候得共、服

ニテ神前へ参詣無用候、此旨与中へ可被申渡置候、地

頭所有之面々者地頭所へモ可被申渡者也、

正徳三年巳閏五月三日

御家老座印

四七六六

一近年重役ノ門外又ハ道路致落書儀間々有之、別テ不宜仕形ニ候、落書ノ儀ハ何レノ詮ニモ不相立、徒ニ不謂事共書記体ノ事候得ハ乍尤落書ノ旨趣被取上事ニ差テ無之候、縦訳立候事ニモ落書ノ事候故、其旨被取上事ニ無之候条、向後落書致間敷候、若相背者於有之ハ急度可遂詮議候、且又支配頭へ相付申出儀共非道ノ扱ニテ、夫故罪ニ沈候体ノ者又ハ無抛訳有之者ハ名書相記、目安差出候儀ハ世上有之事候間、右体ノ者ハ其通可仕事ニ候、夫共ニ致名書書付落置候ハ、取上間敷候条、目安可差出卜存候ハ、御役人ノ宅又ハ途中ニテ成共自身ヨリ差出候様可仕候、尤、名書可相記候、此旨末々迄致承知候様、地頭所有之面々ハ地頭所へモ可申渡候、

此段与中へ可被申渡者也、

巳八月廿一日

御家老座印

四七六七

一馬二石ヲ付由候、向後右類馬二付申間敷旨被仰渡候間、
与頭中エ致承知、未々迄不洩様可被申渡候、

巳九月十六日

内記

右、寛永九壬申年ヨリ正徳三癸巳年九月迄、凡年数八
十二年、

島津家歴代制度卷之六十四

明和
宝永

鹿兒島御廻文留為數箇臨事依難見出、其要文令拔萃之為
当務ノ枢機、然モ御所帶方ノ留帳ハ不拔得、此二冊モ不
能再撰落字脱章必矣、就本帳令受用、古今之變易能見分
之裁断可有之者也、

明和五年戊子十二月吉日

御役所

吉利下総守殿

新納右衛門佐殿

御使

四七六八

御袖判写

覚

一 応知行ノ高今度軍役ノ賦申遣候間、以此趣於其元惣賦

能々念ヲ入相究、其書立早々可差上事、

一 今度申遣候役儀致其用意、自然ノ時緩在之間敷トノ致
請合ノ判可差出候、若難成人有之ハ其書立可差出候、
即知行召離軍役可相勤衆へ可遣事、

一 此軍役ノ趣、一天下之法ニテ候処、為新儀ノ様ニ存理

クツカマシキ儀申輩於有之者曲事可為深重事、

一 従式百石上ノ衆、具足并馬ノ鞍道具用意候衆ノ書立可
差上、慥ナル檢者相廻可書記事、

一 他国ノ侍者、或普請方ノ用意、或俄ニ軍役ノ人数可入
時ノ用意ヲ題目ニテ、具足・馬鞍手前ノ可入程ノ人
数ノ儀ヲ不断無油断心懸ノ故、家内ノ体者如形知行ヲ
取候衆モヤウノ朝夕ノ食ヲ女房衆調候テ膳ヲモスエ
ナド候体ニ有之由候処、国ノ儀者具足・馬鞍・人数ノ
用意ハ無之、其身ノ分限ニ不及体ニテ家内ノ人ヲモ
余多召仕置、緩々トシタル由取沙汰候、是ハ町人ノ作
法ニテ侍ノ非覚悟候間、是非共自今以後ハ先軍役ノ儀
ヲ可致題目儀可為肝要事、

一 知行百石取衆又無足ノ衆ニモ手前成候テ自然ノ時馬ヲ
可乗ト存候者アラハ其身ノ好次第鹿兒島中無用捨、不

斷馬乗候テ可罷行儀可為尤、若一陣モ乗馬ニテ為相勤者、其已後者知行ヲ可被_下事、

一 右ノ類ノ衆、就御免鹿兒島中馬ニ乗候テ行候ヲナフリ、カタキノモノ在之者被聞召付次第重科ニ可被仰付事、
右条々不可有違篇者也、
(反カ)

寛永九年六月十一日

四七六九

覚

一 留守中火事於有之者門外エ一人モ出間敷候、用所ノ儀候ハ、致穿鑿可出事、

一 火事ノ時者家ノ上二人ヲアケ、チカク成候ハ下ニヨリ候テ道具ヲ可出事、

一 火事ノ時、奥方ノキ候行儀ノ事、

但、人セキ候儀無之候ハ、行儀タ、シク候、或人セキ此中ノ火事ノゴトクニアリ候時者女子衆ヲマキ立、又キホニテマハリヲカコミノクベキ事、見合可為肝要事、

一 一年中ニ六度程江戸ノ左右可被申越候、是ハツネノ様

子ナキ時ノ儀、又或從 上様被仰付儀、其外注進ノ儀候ハ、六度ニカマハス節々可有注進事、

一 可致音信所ニ從国元油断候ハ相当ニ可被申付事、
一 御城 御誕生御座候ハ追付其晚ヨリ注進可被申事、
一 爰元ノ雜説、誰ノ家中ハ何ト成候ナト、有儀、注進會テ入間敷候、

但、御改易共候テ落着ノ儀共ハ可被申候、其外役ニ不立儀ヲ為心得トテ被申儀可為無用事、

右条々、新納^(久世)右衛門佐へ相談アリ可被申付候、其外不叶儀ハ談合候テ可被申候也、

寛永十八年二月廿四日

四七七〇

掟

一 縁者・親類不依誰人一切不可近付沙汰ノ庭事、
一 可出口事ノ場剋不論貴賤可拔諸腰事、
一 口事決断ノ後企曲折雖有申旨不可被請取事、
一 當時ノ御番衆口事聞之時ハ其辺可有遠慮事、
一 口事ノ条々問付ノ後、左右方ノ相手不可居其近辺事、

寛永三年寅五月朔日

口事聞所判

自他國會テ不入物

四七七一

覚

他國會テ不出物

一鉄炮

一エンセウ

一ラウ

一売人男女共ニ

一シユロノ皮

一ツク綱

一樟腦

一ウルシ

公義御手形ニテ可出分

一硫磺

一ヤク板

一上布

一下布

一材木

一牛馬

一馬ノ尾

一ワタ

一白糸

一鉄

一竹

一大豆

一芭蕉布

一松フシ

一胡摩

一莪蓐

一楊梅皮

一紅花

一ナタネ

一魚塩

一フタノ油

一木ノコ

一木クラケ

一マクリ

一牛ノ皮

一琉球ムシロ

一根紫

一アサ芋

一カタシ

一悪銭

如右他國ノ出入物相定候、御領内へ此旨可被仰付候、

就中麦田ノ湊ニテ船改ノ儀、堅可被仰付者也、

寛永九年十一月十五日

(川上入國)
左近將監 印

(善入忠統)
撰津守 印

北郷出雲守殿

参

四七七二

天罰靈社起請文

一不恐權威不願愚暗至其場聊無用捨可出詞ノ事、

一無貴賤無親疎理非輕重ノ趣、憲法可致沙汰事、

一縦連ノ雖有宿意、対証人不挟私心(廉力)簾直ノ旨疎意有間敷

事、

一一同決断ノ理、若令相違可遂言上事、

一諍論ノ趣、以同意一切不可手引ノ事、

一賄賂ノ追従、差以致許容間敷事、

一一旦所及沙汰ノ口事無決断経年月処、依有最負以私令

無事之調法ノ輩於有之者此等ノ趣可致言上事、

右条々、雖為一事若令違犯者、

寛永十二年仲春

口事聞所判

右、靈社起請文、

但、七枚、

四七七三

乗馬衆工被 仰出条々

一御供ノ時召列候者共、馬場ニヒロガリ候ハヌ様可申付事、

一道悪候トテ或アシキ所ヲ飛越、或ヨケナトイタス儀可為停止事、

一何方ニテモ御乗物被立候ハ人ノ通候所ニフサカリ候ハヌヤウニアカノ敷、他方ノ衆ナト被見候様ニ可心得事、

一大名衆へ御出ノ時、ウチへ呼入候共無御下知候ハ座敷へ入マシキ事、

一何方ニテモ何ソ見物可有之時、不被 仰付衆見物仕候儀、堅可為停止事、

一路次ニテ馬牛ナト二行アヒ候時ハ詞ニテ脇へヨケサセ、

或タ、キノケ、或ツキノケナトイタスマシキ事、

一大名衆へ御行アイ被成候時ハ傍へヨケ、無油断様可心

懸事、

一上様御鷹ニアヒ候時ハ早々致下馬、慇懃ノ体可為尤事、

一路次ニテ御乗物近辺ニテ下馬ノ衆候ハ早々馬ヨリ下可致礼候、左様ノ時空見ニテ馬乗ナカラ通候儀可為慮外候間、能々可相心得事、

一兩口トラセ候儀アルマシキ事ナカラ弥可為停止事、

一他所ヨリ使ナトへ見懸候ハ早々馬ヨリ下御乗物チカク

可参事、

右条々、致油断間敷之由、所被 仰出如件、

四七七四

陸御供衆御法度ノ条々

一御供ノ時馬場ニヒロカリ候ハヌ様ニ御乗物ノ廻ニスボミ候テ可参事、

一道悪候トテ或アシキ所ヲ飛越ヨケナトイタシ候事、堅可為停止事、

一何方ニテモ御乗物被立候ハ御供衆人ノ通候所ニフサカ

リ候ハヌ様ニアカク敷、他方ノ衆ナト被見候様ニヨ

クク可心懸事、

一大名衆へ路次ニテ御行アイ候時ハ傍ニヨケ可罷通事、

一ヨソノ衆へ不行当様何時モ可相嗜候、就中路次ニテ乗

物又ハ馬牛ナト二行アヒ候時、詞ニテ脇ヘヨケサセ可

通事、

一又小者共色々々ハフレ事共候ハヌヨウニ小者奉行者ヨ(公カ)

クク入念可申付候、五度モ三度モ申聞、其趣不請付

ハウチシハリ可仕候、左様ノ時為主人対小奉行リクツ(者脱カ)

於申者早々可致披露事、

一惣別行儀籠相ニ無之様可相嗜事、

一大名衆へ御出ノ時、若内ヘヨヒ被入候共無下知候ハ座

敷へ入マシキ事、

一何方ニテモ何ソ見物可有之時、不被 仰付者見物カタ

ク可為停止事、

一供屋ニテ或ウタヲウタヒ高物語、或足拍子ヲ取クミア

ヒナトイタス儀可為停止事、

右条々堅可相守、若緩於有之ハ稠可有其科者也、

寛永十二年七月四日

四七七五

覚

諸士子孫無之衆之跡目、自今已後公義ヨリ可被召定候間、

私ニ談合被申間敷候由、從江戸被 仰下候条、具ニ可

被其意者也、(得脱カ)

寛永十五年霜月七日

四七七六

神社仏閣修理再興ノ儀雖為國家諸祈禱、近年江戸御失墜

不大形故修理難調、神社仏閣有之儀不可然仕合ニ候、依

之当年ヨリ毎年為修理料、御分国中人数皆同ニ老入ニ付

勤銀壹分ニ相定候条、無油断此旨被致首尾候様、御与中

へ可被仰触者也、

承応二年巳九月廿六日

島津図書殿

島津大膳殿

評定所印

郡所規帳拔書

一 高壺石ニ付定代三斗五升代

右、依年風損・干損ニ逢、百姓ヨリ郡座エ申出モ候ハ、

相談ヲ以如此中檢者可相立候事、

一 高壺石ニ付役米三升ツ、

但、万治二年如此被仰付候、

右ハ、依年公役米多少可相定事、

高卅石ノ
一 門壺ツニ付年中納物定

一 茅筵三枚 一 節木四束

一 炭壺表三斗入 一 薪四束

一 萩式束 一 イモ三升

一 山ノイモ 一 箸木

一 キネ式ツ 一 若木二束

一 ラヤシ五合漬壺枚 一 イヅリハ

一 モロムキ 一 柳

一 タラ 一 門松

三月三日・五月五日用

一 ヨモキ 五月五日用
一 マキカヤ
右同
一 シヤウフ

右、五里ヨリ内者現ニ其色々ニテ、五里ヨリ外ハ可為代物事、

一 物干竿二本

一 右台四本

一 灯松壺束長壺尺五寸
廻式尺

一 沢萩并水ノ子用野菜

風構用納物

一 カラハリ壺本

但、無用ノ衆ハ長木五本ツ、

一 ワラ筵四枚ツ、

一 大繩十房

但、卅尋ツ、

一 小繩三房

但、五十尋ツ、

一 疊ノ裏コモ二枚

但、六居重、

一 右カラクリ糸并ヘリ付糸

一 夫遣十五才ヨリ六十才マテノ者、面付壺人ニ付年中ニ

夫遣五人ツ、可召仕事、

一 米津下シ拾二里届、拾二里ヨリ以上ハ領主船賃・駄賃

百姓エ差引候テ可被遣候事、

但、入作人津下シ同断、

最所右近

一 船着宿賃ハ領主ヨリ可承事、

一 百姓納物持參候時、逗留仕候ハ、可為領主賄事、

一 從遠方中途ニ泊候時ハ飯米右同断、

四七七八

一 諸寺ノ住僧隱居ノ剋、寺外ノ新地ニ罷移儀令禁止候間、

一 江戸・京其他他國工諸士ノ被參候時、百姓召列儀從前々

御法度ニテ候、向後弥以可為禁止候、併御急用ノ御奉

公ニテ百姓不召列候テ不叶時ハ郡座ヘ其断被申出、御

法候ハ、夫銀郡座ヨリ其所之郡見廻・庄屋ヘ引付ヲ以

可相渡通可被申付候事、

寛文三癸卯三月朔日

評定所印

一 諸給人ヨリ百姓工御定ノ納物并夫仕可被申付剋、幾度

モ庄屋ヘ可被申渡候、直ニ百姓方工被申付儀可為停止

候、勿論御法度ノ外庄屋受付間敷候付、到百姓庄屋ヨ

リ非法ノ儀於有之者百姓ヨリ披露可申事、

四七七九

一 其方角並木、或枯或野火ニ燒候所於有之ハ嘸來檢者ニ

テ念入早速可植次候、尤、毎年植木致成長候様、以見

計節々修理可申付候、聊不可有緩疎者也、

寛文四辰ノ三月廿三日

(鎌田敦有)
源左衛門

万治二亥七月晦日

郡座印

菱刈孫兵衛

汾陽次郎右衛門

(新納久)
又左衛門

中村早太

石塔寸尺定

一石塔一基 地上五尺五寸

但、石形ハ望次第、

右ハ、高千石以上ノ土可被用之、

一同一基 地上四尺

但、石形ハ望次第、

右、高千石以下ノ土可用之、

一同一基 地上三尺五寸

但、石形望次第、

右、高百石以下ノ土可用之、

右者、今度相定ノ旨、堅固ニ可相守此旨候、定ノ下者

可為勝手次第、勿論披官以下ハ右定ノ下以見計可相調

旨主人ヨリ可申付、若自今以後相背族於有之者嚴可及

沙汰、外城エハ地頭方ヨリ可被申触候、此旨与中工堅

可被申渡者也、

寛文五年六月九日

評定所

覚

一御分國中諸士召仕下々、自今以後不依男女永代ニ買候

儀令停止、向後可為年季雇候、若相背者於有之者売手

買手双方科物可申付候、

但、前々ヨリ永代ニ買候者ハ可致売買事、

一御藏入給地、寺社家・町浜ノ者、男女共ニ向後身体行

廻候者ハ十年季或五年季或三年季、一季ノ奉公ニ可出

候、乍勿論百姓ハ田地ノ障ニ不能成通、其所ノ噓・庄

屋証文ニテ鹿兒島郡座エ申断、其上ヲ以可致欠落、浦

浜ノ儀ハ船奉行ヨリ右同断ノ可為支配事、

十年季男一人

一雇銀三百目

一扶持米六斗 但、年中分、

十年季女一人

一雇銀貳百目

一衣裳扶持

五年季男一人

一雇銀貳百目

一扶持米六斗 但、年中分、

五年季女一人

一雇銀百廿目

一衣裳扶持

三年季男一人

一 雇銀百廿目 一 扶持米六斗 但、年中分、

一年季男一人

一 雇銀七拾目 一 扶持米右同

十五ヶ月江戸雇男一人

一 雇銀百廿目 一 衣裳扶持其家中並

一 右雇者年廿歳ヨリ四拾才迄、右定ノ可為雇銀候、廿歳

ヨリ下・四十歳ヨリ上ノ者ハ定銀ノ内相对次第二可致

減少付、定ノ上ニ内談ニテ増銀ヲ出於相抱者双方共ニ

可為科物事、

一年季ノ内、或煩或暇於有之者、年季明候テモ其日数者

可致奉公事、

一年季不明内、熟談ニテ於相廻ハ定置雇銀割ヲ以可致差

引、若氣任ニ相廻者ハ本銀返済可申付事、

一年季明候テ、又々可相抱ト於致契約ハ重テ証文相改可

召仕事、

一年季ノ内、於致欠落ハ口入前ヨリ不足ノ応月数賃銀可

相返事、

一 雇ノ内、公私ノ法様相背致氣任輩ハ急度曲事可申付候

事、

右条々、堅固ニ可相守、若違背ノ輩ハ糶可及沙汰者也、

寛文二年寅十月廿八日

(鎌田政有) 源左衛門 印
(町田久則) 勘解由 印
(新納久詮) 右衛門 印

(島津久茂) 中務 印

(鎌田政信) 藏人 印

(島津久頼) 筑前 印

(島津久通) 図書 印

都ノ城 役人中

四七八二(の↓)

(朱書)「宝永三年戌正月此御浄書相改ノ条、其分朱書ニテ相改

候事、」

外城横目可致覚語条々

一 鬼利支旦宗并一向宗心ノ及見立聞立ベキ事、

一 御兄弟衆・御一門衆・家老衆子共タリトイフ共、於外

城御法度ヲ相背無作法ノ儀於有之者可見立、尤、所中

ニテモ御法度之旨ヲ相背連々氣任ニ有之候ハ、人ヲ悪

事所々妨ニ罷成者ノ事、

(次四行間朱書)

一 鹿兒島ヨリ外城へ差越候人、御法様ヲ相背無作法ノ儀

於有之ハ御一門ヲ初御家老中ノ子共ノ上タリトイフト

モ可申出候、尤、所中ニテモ御法度ノ旨ヲ相背連々氣

任ニ有之、企悪事所々妨ニ罷成者之事、

一 諸役人、私欲ヲ専トシ御奉公疎意仕人ノ事、

一 御藏人取納方并代成定様親疎有之事、

付、仕上米手廻悪事、

一 新開被仰付御為宜見及候所ノ事、

一 新明ニ付開添仕依怙イタス者付切明屋敷ニテ掠公儀私

(朱書)申請ニ付

欲ヲ専ニ仕者ノ事、

一 隠田并田畠荒候事、

(次二行間朱書)

一 諸役人依蟲負親疎有之事、

付、山川ノ事、

一 殿役遣依蟲負(親力)新疎有之事、

付、山川浦浜ノ役銀申付様親疎有之事、

一 毎年被仰付候諸植木、大方ニ仕候所ノ事、

一 井手・溝其外道橋之普請、無沙汰ニ有之所ノ事、

一 御法度ノ物、他国工出候者并他国工致物詣者ノ事、

一 他国人工致縁与儀付他国人ト懇切仕蜜(密カ)ノ銀子之取替仕者ノ事、

一 諸士并百姓已下不依男女、相応ノ職事不仕或身マハリ

ヲカサリ、或結構成衣裳ヲ着シ不似合所作仕者ノ事、

一 地頭ヨリ非分之儀申付所ノ者痛ニ罷成事、

付、地頭ノ仕置善悪ノ事、

一 御道具ノ者・御中間・御小者・百姓・町人等ノ子ヲ士ノ養子ニ仕候事、

一 重科ニ相究候者、所ノ役人共蟲負ニテ披露延引ノ事、

付、道理ヲ持ナカラ罪ニ沈候者ノ事、

一 私ノ遺恨ニテ人ヲ可禿ト企候者ノ事、

一 博突ウツ事、

付、火付其外アヤシキモノ致徘徊事、

一 欠落者改様大方ニ仕候所ノ事、

一 御奉公ニ付鹿兒島ヨリ差越候衆不作法ニ有之、差テ無

用所ニ緩々罷在候事、

(朱書)滞留候事

一 所ノ役人公儀ノ外百姓工出錢出来申付事、

付、私二人夫ヲ召仕候事、

一 駄賃并舟賃、御定ノ外増銀取候者ノ事、

一不依士百姓徒党ヲ組申分仕候事、
一蒙御勘気候衆致入魂者ノ事、

右ノ条々、常々心掛可致見聞、此外可入心得儀ハ実不

実共ニ見立聞立、(朱書)横目頭所へ早速大横目所工可致言上者也、

寛文十三年丑七月廿四日
肝付彈正(久兼)

新納又左衛門(久丁)

島津新八郎(久馬)

島津市正(忠広)

島津出雲(久竹)

(四七八二の2)

右御条書、此節改被仰渡ノ間、堅固ニ相守可致覚悟之、
尤、役替ノ砌者御条書儘ニ可次渡之、或破損或文字不
相見得剋ハ早速可申出候、聊緩疎有間敷者也、

寛文十三年丑八月朔日
川上将監 印

島津又十郎 印

都城
横目中

(四七八二の3)

(行間朱書)
宝永三年戊正月十日

(肝付入兼)

主殿

(島津忠雄)

帶刀

(四七八二の4)

(行間朱書)

右ノ通、此節御家老中ヨリ被仰渡候付無違背相守、若

相背輩於有之ハ無用捨可遂披露儀肝要ノ条、聊大形有

間敷候、以上、

宝永三年戊正月十三日
横目頭印

番所

横目中

四七八三

覚

一給地百姓取納皆済ノ儀、霜月限ニ堅固ニ可致上納、若
於緩ハ急度未進究衆相廻、稠其沙汰可有之事、

一領主ヨリ当出米、右ノ者ムヨリノ御蔵へ可致上納由被
申付候ハ、少モ無油断被申付候、員数早々御蔵へ可相

納事、

一右出物ニ相納候分米誘可入念候付俵作同前ノ事、

(新納入珍)

市正

(島津入輝)

中務

(島津入朗)

大藏

一 無皆済中米少モ禿間敷候事、

一 無皆済中借銀・借米返済仕間敷候事、

一 無皆済中商売人其村々へ入間敷事、

一 無皆済中物詣祭礼ノ出入無用ノ事、

一 無皆済中互ノ寄合仕間敷候事、

一 無皆済中聲嫁取祝儀仕間敷候事、

一 無皆済中家普請并男女ノ衣裳新調間敷事、

一 無皆済中行脚ノ者入間敷候事、

一 無皆済中掛銭・カケ米可相留候事、

右ノ条々、噯衆・郡見廻ト見届、諸百姓并入作ノ者堅可被申渡候、条書ノ旨若相背者於有之ハ一途ノ科可被仰付候間可被申出候、所ノ横目衆エモ被申渡、承立次第大横目衆迄早速可有披露候、納米皆済仕候以後ハ私ノ自由ヲ可相達者也、

明曆二年七月十六日

町田勘解由 (欠題) 印

四七八四

覚

一 当年給地ノ物成可為如例、不請合百姓有之候共、領主

ヨリ可相究、若及口能郡座工於申出ハ檢者可差越事、

一 百姓ノ役米当年壹升ニ相定候事、

一 給地ノ納米法外ニ計ツカヘ致取納領主有之由其聞得候、

是又非道ノ課役申掛百姓痛入ノ由候間、向後定置納物

ノ外申付間敷候事、

一 就御奉公自他国往来ノ人、宿送人馬賃銀当八月朔日ヨ

リ当座払ニ相定候条、殿役所ヨリ賃銀受取如定無異儀

可相払候、若緩ノ儀有之ハ稠可及沙汰事、

一 諸士不依大身・小身御奉公ニ付外城行ノ時分、水夫并

野菜・薪受取儀向後堅可為停止、但、主従二三人ノ衆

マテ水夫耆人ツ、令免許候、若相役人致同宿候ハ、相

中ニ水夫耆人可召置付、野菜・薪ハ可為買物ノ間、則

代物竈法可相払、勿論所ノ造作ニテ酒宴カマシキ儀一

切令禁止事、

一 諸地頭狩代夫、従前々如定置年中兩日可召仕、若遠方

ニ召寄候ハ、往来ノ日数日傭銀可相払事、

右条々、近年諸百姓勞入ノ由其聞得依有之、鹿兒島与

中申渡候間、於何方モ猥無之様可得其意、若緩ノ人於

有之ハ横目ノ者可申出、他方ヨリ相知候ハ、可及沙汰

者也、

寛文五年巳八月朔日

(鎌田政有)
源左衛門 印

(町田忠貞)
勘解由 印

(新納久了)
又左衛門 印

(島津久通)
圖書 印

四七八五

覚

一新地ニ寺社建立御禁制ノ旨、先年天下一統ニ被仰出候付、隠居ノ節ハ寺中ニ可罷居旨申渡候ノ処ニ、寺中ニテモ山林ヲ切開致作事候故、新地建立ト相見得御条目違背ノ様ニ候間、向後隠居ノ節寺中ノ脇寺ヲ相応ニ令修補可致住居、若寺中ニ明合於有之者寺社奉行^(所カ)処工得差図、如何ニモ輕キ家ヲ致作事可罷移、縦へ無執儀ニテ新作事仕候共、隠居一代ニテ後住申付間敷候間、内々可得其意、何ノ道ニモ隠居所ノ儀ハ寺社奉行所工相斷可得差図、此等之趣末々ノ末寺迄モ儘可申渡旨、諸宗門首へ可被申渡者也、

寛文十三 二月廿日

寺社奉行

四七八六

覚

一御分國中井手溝川除等ノ儀、小破ノ節大形ニ致修甫ニ付、洪水ニ及大破或損地出来、或溝ニ水不通毛上不熟ニテ百姓勞入ノ由聞及候、依之此節檢使差越候間、念ヲ入見究ノ上致相談、堅固ニ修甫可申付也、所中ニテ難調普請ハ近外城エモ可被仰渡之間、早速郡座へ可申出事、

一耕作仕付并取納ノ時分ハ農人女童ニ至迄作場ニ出相応ニ所作可致旨、自前々申渡置候、弥以堅固ニ可申付之、若緩ノ在所於有之ハ科物可申付事、
一先年以来新田開申付置候、其在所ノ役人・郡見廻弥以精出增高有之様ニ可心掛付、植木ノ儀、每春郡奉行ヨリ如申渡儘ニ植置、尤、折節見廻候テ致養育様ニ可入念事、
右ノ条々、諸外城嘯・郡見廻・庄屋工儘ニ可申渡之、緩之在所於有之ハ右ノ役人中可及曲事、委細ノ段ハ郡奉行可相達者也、

寛文十三年癸丑四月十八日

(丹付久兼)
彈正 印

四七八七

(新納久丁)
又左衛門 印
(島津久竹)
出雲 印

覚

一去年風損・水損ニ付重疊雖御憐愍候、及飢者在之由其
聞得候、依之御分国中檢使差越、飢者ノ為体見計飢米
被下ノ条雖有奉存、其所ノ嘸・横目其外諸役人相札、
証文ヲ以可被申出之、聊偏頗於有之者稠數可有沙汰候、
委曲惣田地奉行相達ノ間可得其意者也、

延宝三年正月十六日

(肝付久兼)
彈正 印
(島津久元)
帶刀 印
(島津久輝)
中務 印

四七八八

他国工不出品々

一鉄炮 一硫磺并塩硝(硝カ)
○一刀 一數寄道具
一掛物 一蠟

一棕栢竹

一琉球焼酎

一蘇鉄

一馬ノ尾

一漆

一芭蕉布并苧ハセラ

一霧島ツ、シノ木

一カラ桐ノ木

一上布

○一雜穀

一鍋地金

一ミヤウハン

一下布

一ホラノ貝

一イタラ貝ノカラ

一焼物壺

一檜底樽

以上、

一棕栢ノ皮

一ツク綱并ツク

一蘭

一樽腦

○一売人

一サクロノ木

一琉球草木色々

○一大豆

一モタマ

一錫

○一鍋

一葺板

一ヤコ貝ノカラ

一粉ヌカ

一琉球ツケノ木

一半鍋

延宝五年己閏十二月廿二日 評定所印

朱書

宝永五子三月他国へ不出品被仰渡候内、本文ニ銅・

チン犬・琉緞相重候、丸星ノ分無之候、

一米・雜穀他国ヨリ不入人物ニ相立候事、

四七八九

諸士供ノ人数定写

一高老万斛以上

士拾五人以下

一高五千石ヨリ壹万石迄ノ間

士拾人以下

一高千石ヨリ五千石迄ノ間

士八人以下

一高五百石ヨリ千石迄ノ間

士五人以下

一高五百石以下

士三人以下

一家老衆

士拾人以下

一用人衆

士六人以下

一奏者番衆

士四人以下

以上、

延宝八年申五月廿一日

四七九〇

天罰靈社起請文前書ノ事

一大人ノ被召上御薬ノ儀ハ不及申上其外諸人療治可仕剋、

聊扶悪心申間敷候、且又誰人ノ雖為頼人ヲ凶害仕間敷

候、万一左様ノ人於有之者早速可致披露事、

一諸人御奉公被仰付候剋、当病ニ付医者証文ノ儀ヲ頼申

候節、雖為縁者・親類・知音有様ニ可申上候、大形ノ

病人ヲ重キ様ニ申成、御奉公不調様ニ致謀略間敷、

付、粉薬・練薬等仕候剋薬種入念可申事、

一膏薬并付薬相伝申外、私ノ配剂ニテ調合申間敷事、

付、酒女ノ戒堅固ニ可相守事、

一砒霜石其外毒薬之類、軽物ニテモ差テ取扱仕間敷事、

一就身上被聞召掠儀於有之者被遂御糺明可被下事、

右条々、若於偽申上者、

天罰靈社起請文前書ノ事

一我々家職ニ商売仕、薬種買取ノ剋入念可申候、就中和

薬ニテ為似物仕儀、且又品々買本ノ上ニ高利取申間敷

事、

付、御國中ニテ和薬種取可申剋、不見極薬草取ニテ

モ不審御座候ハ、可相捨事、

一麝香・龍腦・牛黃(密カ)々々ニ加物仕売申間敷事、

一砒霜石商売仕間敷事、若隱蜜ニ買可申ト致内談人於有
之者縦名承届役所へ内証ニテ披露可申事、

右条々、若於偽申上者、

先比如申渡置候御領国中医師并木藥屋へ神文就被仰付、

此節神文差越申候間、所ノ嘸召(列カ)諸所於祈願所堅固神

文可申付候、檢者并神文仕様ノ儀ハ奏者番所ヨリ別紙
ヲ以相達候間可得其意候、尤、神文相濟候ハ、末々外
城ヨリ右神文鹿兒島へ可差上者也、

天和二戌三月七日

評定所印

四七九一

法事調ノ覚

一高千石以上、出家七人、施物東堂工青銅百疋、衆僧工
式百文宛、振舞献立二汁三菜、
一高千石以下、出家五人、施物東堂工五百文、衆僧へ百
文ツ、振舞右同断、

一高三百石以下、出家人数・振舞等右ノ品ヲ以分限相応

二見合可有之候、

右ノ条々ヲ以諸事成程輕ク可被相調ノ旨、御出合ニテ
御座候、以上、

天和三亥三月晦日

取次

村田伊左衛門

諏訪仲左衛門

四七九二

覚

一生子ヲ殺候儀、従前々雖御法度候、頃日緩セニ有之由
不届ニ候、向後相背モノ於有之者、当人ノ儀ハ不及申、
五人組迄曲事可申付之、且又医者并姥ノ類ヲ頼、(密カ)蜜ニ
子ヲロシ候由其聞得候、右被頼候者共別テ不届ニ候、
若アラハレ候ハ、急度其咎可申付ノ事、

一子共余身致養育ノ儀ハ別テ身上ノ障、耕作諸殿役ノ妨
ニ可成事候間、向後不依男女当年子ヨリ九歳迄ノ子共
式人以上有之モノハ諸殿役差免ノ条、所中早々相改惣
那座へ可申出之、尤、右ノ子式人ノ内老人十歳ニ成候
ハ、早速諸殿役可相務ノ事、

一於所中為差知逼迫者并百姓ノ下人等、右ノ通子トモ二
人迄モ養育難成者ハ諸殿役免許ノ上勝手能様ニ可申付

之間、右身上ノ儀委細聞届、各吟味ノ上子共可致出生、
前積右同前二可申出事、

一 右ノ通、生子ヲ不殺候ハ、成人以後人数相増作地可致
不足ニ候間、其節ハ望次第作地可申付之、其外或大山
野或居屋敷、又ハ名頭不依何色願ノ儀於有之者可申出
之、僉儀ノ上勝手能様ニ可申付候事、

一 子共三人以上取立所帶ヲ分ケ、又七十才以上ノ親兩人
致格護候者ハ御憐愍ノ上為御心付諸殿役可差免候間、
是又相改同前二可申出事、

右条々、諸百姓委細承届、堅固ニ可相守之、子共アマ
タ有之儀ハ身上ノ為ヨロシキ事候得共、畢竟養育難成
故生子ヲ殺ノ由候ニ付、右ノ通被仰渡儀ニ候、且又老
親格護ノ者別テ被添御心被仰付候間、旁以難有忝可奉
存知、老子共儀ハ不依男女生次第生置候様ニ堅可申渡
候、乍此上相背モノ於有之ハ見立聞立可申出之、内々
横目付置候条、於大形各可為越度者也、

天和四年子正月十三日 祢寝八郎右衛門 印

四七九三

覚

一 他国人ノ儀ハ勿論御国者ニテモ胡乱成者ニ宿カス事自
前々雖御禁止候、頃日猥ニ有之由不届ニ候、尤、横目
蜜々致見聞ノ間、於大形ハ至宿主可致沙汰事、

一 不依男女可致度世程ノ家職無之、間々徒ニ罷居者ハ縦
慥成証文有之候共、早速主人又ハ札本ニ可返付之、右
体ノ儀大方イタシ宿ヲ借置ニ付方々ト致徘徊、悪事仕
出候間能々可得其意候、若於違背ハ可為曲事、且又一
日雇ノ者ニ別テ胡乱者有之由其聞得候ノ間、向後何カ
シ下人ト慥ニ不存者ハ証文ヲ立可相雇候、是又於緩者
可及沙汰事、

一 土屋敷ニミセ出シ候儀御禁止ニ候処ニ、名子ノ家ニ外
ヨリ戸口ヲ明、内ニ売物ヲ召置蜜々致商売ノ由、土屋
敷ニ不似合作法見苦敷候、向後毎々見分申付候間、見
及次第急度可致沙汰候事、

右ノ旨、与中堅可被申渡者也、

貞享元子五月廿四日

評定所印

四七九四

一諸士掛銀故借銀仕出、御奉公モ難成衆有之由不可然被
思召候、因茲向後諸士ノ銀掛銀致無用ノ様ニ可申付旨
被仰出候、此旨組中へ堅可被申渡ノ者也、

子十二月廿三日

評定所印

四七九五

覚

一上方道中往還ノ面々、荷物ノ貫目御定ヨリ頃日重キモ
有之由候間、御定貫目ノ外可致無用ノ由、道中御奉行
ヨリ諸所工被仰渡候間、向後可致其心得旨与中へ堅可
被申渡之、地頭所格護ノ人ハ右ノ趣其所へ可被申越ノ
旨可被申渡者也、

貞享二丑六月十一日

評定所印

四七九六

覚

一寺領閉門・逼塞・遠慮等ノ覚語、此中分テ依不被仰渡、
区々ニ為相心得儀モ可有之候、此節右ノ分ヶ段々委細

二被 仰出候ノ間、向後無緩忽堅固ニ可相守之、畢竟

御勘氣ノ上不念之儀ニテ不及重科様ニトノ御賢慮ヲ以
被 仰出儀ニ候、寔以難有御事ニ候間、謹テ可奉承知
之、勿論違背有之間敷儀ニ候得共、万一緩ノ輩於有之
ハ急度可被 仰付候間得其意、家中エモ堅可被申聞者
也、

貞享二丑九月廿八日

四七九七(の1)

覚

一寺領人ハ無扨仕合雖有之令帰宅間敷、尤、屋敷ノ儀ハ
可為逼塞事、

一閉門者門戸ヲ闔、外向ノ窓ヲ包、其外内ヨリ外ノ見得
候所ヲ可塞之、不叶用事ハ夜中密ニ裏門ノ北門ヨリ可
相達之、雖為無扨儀自身他出堅無用之事、

一逼塞ハ門戸ヲ閉、小門ヲ開置、猥ニ無之様ニ用事可相
達候、自身他出ハ無扨儀於有之ハ奉行所へ断可申出事、
一遠慮ハ門戸不及閉之、無扨儀ハ各別、猥ニ自身令他出
間敷候、依時宜致遠慮様モ可有之事、

一小身ハ閉門右同断、無拋事有之節ハ裏ノ口ヨリ可相達之、表門計有之三方他屋敷ヲ抱候所ハ表門ヨリ用事相達儀苦間敷事、

今以世上ニテハ拵馬有之由ニ付、向後堅御制禁被仰出候者也、
丑九月十八日

一小身者逼塞右同断、用事ノ時分ハ門戸ヲ開可相達之、

常ニハ闔置可申事、

四七九九

一小身ハ遠慮右同断、

覚

右ノ条々、向後無緩怠様可申付候、違背ノ輩於有之者可為重科、万一出火・洪水ノ節於屋敷危ハ何方へ成共退、其旨奉行所へ断可申出候、以上、

丑九月十八日

(四七九七の之)

右、寺領閉門等ノ覚語ノ儀、此節被 仰出ノ間可被承

置者也、

一諸士掛持屋敷ノ儀、自前々御禁止ノ処、猥ニ有之由不可然候、向後拝領地・買屋敷ニヨラズ月数拾二ヶ月限二図可罷移、其内罷移儀難成人ハ前以其断可申出候、若断ヲモ不申出之、拾二ヶ月相過不罷移候者早速可被召上ノ間、聊緩疎有之間敷候、此旨与中工堅可被申渡者也、
丑十二月廿日 評定所印

丑九月廿八日

四八〇〇

四七九八

覚

御書付

一馬ノ筋ノベ候儀、第一用方ニ不宜、其上不仁ナル儀ニ付、御厩ニ立候御馬共、先年ヨリ御停止被仰付候得共、

一諸百姓・寺社家町浜ノ者、男女共二年年季雇鹿兒島衆中工御免許候間、身上行廻候者拾年年季・五年季・三年季・壹年年季ノ奉公ニ可罷出、勿論百姓・岡町ノ者田地ノ障

二不罷成通、又ハ障ニ成候ハ、其分ケ委細ニ噯・郡見廻・庄屋証文ニテ惣郡座エ於申出ハ僉儀ノ上ヲ以年季相極免証文可被出候、尤、寺社家者寺社所、当所町中ハ町座、浦浜ノ者ハ船手、右座々エ其役々ヨリ同断ノ証文ヲ以可申出候、若年季願ノ者所役人共以依怙抑置、於致遲滞ハ可及沙汰候、年季ノ者ノ儀ハ寛文二年寅十月雖被定置候、此節給分銀相改左ニ記之、

拾年季ノ者

一雇銀式百五拾目 男老入 一扶持米六斗 但、年中分、

一雇銀百八拾目 女老入 一衣裳扶持 但、其家内並、

五年季ノ者

一雇銀百六拾目 男老入 一扶持米六斗 但、年中、

一雇銀百式拾目 女老入 一衣裳扶持 但、其家並、

三年季ノ者

一雇銀百式拾目 男老入 一扶持米六斗 但、年中、

壹年季者

一雇銀六拾目 男老入 一扶持米六斗 但、年中、

十五ヶ月江戸雇

一雇銀百式拾目 男老入 一衣裳扶持 但、其家内並、

一右雇者年十五才ヨリ五十才迄、右定ノ可為雇銀候、定内減少并十五才ヨリ下、五十才ヨリ上ノ者雇銀相對次第タルベシ、定ノ上ニ内談ノ増銀ヲ出シ、於相抱ハ双方共ニ曲事可申付事、

一年季ノ内、或煩或暇於有之ハ、年季明候テモ其日數ハ可致奉公事、

一年季不明内、熟談ニテ於相迦者定置雇銀割ヲ以可致差引、若氣任セニ相迦候ハ本銀返済可申付事、

一年季ノ内、於致欠落ハ口入前ヨリ不足ノ月數ニ応シ賃銀可相返事、

一雇ノ内、公私ノ法樣相背致氣任輩ハ急度曲事可申付事、右之趣、堅固ニ可相守之、若違背ノ輩於有之ハ稠可致沙汰ノ条、此旨所中へ可申渡者也、

貞享三年寅十二月三日 評定所印

四八〇一

覚

一惣テ人宿又ハ牛馬其外ニモ生類煩重ク候得ハイマタ不
死内ニ捨候様ニ粗相聞候、右不届ノ族於有之ハ急度可

被仰付候、密々ニテケ様成儀在之ハ訴人ニ出ベシ、同類タリトイフトモ其科ヲユルシ御褒美可被下候、以上、

貞享四卯正月日

四八〇二

覚

惣テ人宿又ハ牛馬其外ニモ生類煩重ク候得ハイマタ不死内ニ捨候様ニ相聞、不届ノ旨今度江戸自 御老中様右書付ヲ以被 仰出候間、謹テ相守候様与中并地頭所へ堅可被申渡也、尤、役座付ノ儀ハ其奉行、下々者ハ主人ヨリ能致心得候様可申聞之、若大形イタシ右体ノ所行於有之ハ、当人ハ勿論下々其主人迄無調法ニ可罷成事候間、聊緩有間敷者也、

卯三月六日

評定所印

四八〇三

七夕八朔晒着用御免ノ面々

一御一門ノ儀ハ不及申二男三男迄、

但、他ノ養子ニ成候人ハ其養父ノ可為家次第事、

一御家老中与頭ノ嫡子且又自分親代迄与頭役相勤、當時無役タリトイフトモ為差立筋目ノ人ハ嫡子迄免許ノ事、

一右ノ外御用人以下ハ晒着用無用ニ可申渡候、当七夕ヨリ相改可申付ト被 仰出候間被奉得其意候様、与中并地頭所へモ可被申渡者也、

元禄二巳六月十五日

評定所印

与所

四八〇四

一毎年正月初被仰付候御関狩ノ儀、 御家御代々有来候御作法付テ、從 公義不苦旨被仰付候間、御関狩并於諸外城正月初士中相催候初狩ノ儀ハ関狩同前ノ儀候間、一度ツ、前々ヨリ有来候御作法ノ故御免候間、旧式不致退転様心懸行儀專可仕候、相取候宍ノ儀ハ横目見届土中二埋之、其段山奉行所へ書付ヲ以可申出者也、

巳十二月廿九日

評定所印

新左衛門 印

主殿 印

蔵人 印
新納合了
又左衛門 印

(島津久当)
縫殿

印

(島津久竹)
図書

印

右、生類御憐ノ節被仰渡趣也、

四八〇五

覚写

火事ノ節着仕候革羽織、絵様ナト有之候ハ着仕間敷由、
従 公義被仰渡候、依之面々持合候革羽織紋所ノ外切入、
又ハ色替ノ模様、或ハ山道筋、或ハ横筋抔付候テ召置候
モ可有之候間、何レモ地ノ色ニ似候様塗隠可申候、尤、
塗隠見苦敷候共不苦候、火頭巾ノ儀甲ニ似候筋付吹返シ
ナトヲ仕候ハ縦目ニ立不申候共用ノ儀無用ニ可仕由、此
節從江戸被仰下候間、此旨組中・地頭并支配有之候面々
ハ其頭ヨリ堅固ニ申渡候様、与中へ可被申渡者也、

元禄三年六月八日

評定所印

四八〇六

一 御領國中ノ女路次行候節、古来ヨリ布ノカツキヲ用候
処ニ、近年綿帽子ヲカツキ候儀様体不宜候間、当極月

朔日ヨリ綿帽子カツキ候儀令禁止、何レモ古例ノ通布

ノカツキニテ路次行可申旨被 仰出候間、被相定日限

以後綿帽子カツキ候ハ、横目ヨリ右綿帽子押掛可有之

候、カツキノ布人々ノ応分限結構無之様ニ地染共二鹿

相ニ調用可申候、且又士ノ妻女并又家中ノ者妻子・歴々

ノ女性・供ノ女迄、常式カツキヲ用來候程ノ者ハカツ

キノ袖ヲトチ付候テ用之、町方ノ者ハ袖ヲ其儘ニテカ

ツキ候テ武士・町方ノ女カツキニテ相分り候様前方モ

為有之由候間、弥右ノ通仕候様所中へ可申渡者也、

九月十八日

評定所印

四八〇七

覚

一 途中其外何所ニテモ見付候物ハ其主相渡答候処、或隠
置或何カ違乱ヲ申輩有之由不可然候間、向後其主ト申
来候者於有之ハ子細承届、於無紛ハ無違儀可相渡候、
主不相知物ハ儘ニ所持イタシ置、主人并支配頭へモ申
達、其頭々ヨリ見付候辺ニ書付ヲモ可立置候、若隠置
脇ヨリ相知候ハ、可及沙汰候条、此旨与中并地頭所・

私領へモ可被申渡者也、

元禄五年申二月廿二日 評定所印

四八〇八

覚

一 出家・山伏・社人・神子ノ内、正道無之致祈念無謂儀

ヲ申立、施物其外品々取候者有之由其間得不可然儀候

条、右体ノ祈念仕候者一々其頭ヨリ急度相改之可申出

候、右ノ儀付テハ(審カ)蜜々申付置趣候ノ間、若隱置脇ヨリ

相知候ハ、可為越度ノ旨、寺社方支配ノ頭々エ可申渡

候、

申十月廿日 評定所

寺社奉行所

四八〇九

覚

学文・弓馬ノ道專可相嗜ノ旨従前々被仰渡置候、勿論其

身ノ嗜ニ候得ハ無油断可相励儀ニ候処、武芸ノ稽古修行

等令懈怠、第一学文ノ志大形故道專ノ心入無之、諸士ノ

風俗不宜儀被 思召候間、学文可心懸儀肝要ニ候条、講

談等致興行常式ノ参会ニモ相互ニ其穿鑿仕、自今以後風

俗ヲ引易志正道可仕候、就中御一門且又御家老其外面立

候人ハ弥以可心懸儀候之条、 御城退出已後於私宅催講

議、邪儀無之様相励可然候、此旨諸士下々至迄承知可仕

ノ由被 仰出候、以上、

元禄七戌正月廿五日

四八一〇

朱書 覚

諸寺院ノ住持、其寺ノ修補少モ無構隱居ノ支度致、專隱

居所作事等ハ却テ令奇麗僧侶在之由風聞候、左様ニテモ

有之候哉、漸々寺院仏閣令腐敗、依之住職中致修補候驗

不相見得、出家ハ修治為仕、早速隱居申渡、重テハ小庵

ノ住職ヲモ申付問敷候条、其旨門中エ可被申渡候由、先

奉行代ニ被申渡置候、弥以其心得ニテ門中へ可被申渡候、

以上、

元禄十二卯六月

寺社奉行所印

四八一

覚

一先年増上寺火御番御勤ノ節、御家中ノ士并一身ノ者・
 又者ニ至迄、火事ノ節着用ノ羽織目印被仰付置候、依
 之向後共火事ノ節着用羽織可為右目印候間、持合不申
 人ハ早々相調候様ニト去年於江戸被 仰出置候、於御
 当地モ火事ノ節着用ノ羽織・火頭巾相調候ハ江戸ニテ
 被 仰付置候目印同前ニ相調可然旨 御意候間、目印
 ノ仕様左ニ記之、
 一士并御直ノ一身者人足迄羽織ノ裾ニ八寸ノ白地、火頭
 巾調候人モ頭巾裾ニ三寸ノ白地、
 一家中又ハ羽織ハ腰ニ五寸ノ白地、火頭巾調候ハ是又シ
 コロノ中程ニ三寸ノ白地、
 右ノ通可相調候、調様ノ儀ハ先年ヨリ致来候通、惣テ
 御家中ノ目印候条、下人共ノ羽織迄調候儀不勝手ニテ
 難成人ハ衣服ノ腰ニ白地縫付置申候テモ、布木綿ノ單
 物ニ調申ニテモ御家中一統ノ目印ハ右ノ通仕候テ為着

候様可相心得候、此旨与中へ可被申渡者也、

元禄十二年卯十一月廿一日 評定所印

与所

四八二

一御家中挑灯ノ験、向後上ニ横筋大小弐ツ、中ニ自分ノ
 紋所、下ニ山道忝筋、御家中一統験可相改旨今度江戸
 ヨリ被仰下候条、絵図ノ通可相改候、早速ハ墨ニテ相
 験置、漸々張替可仕候、

但、外城ノ儀ハ地頭ヨリ右ノ趣可被申渡候、此旨与
 中へ可被申渡者也、

元禄十三辰十一月十六日 評定所印

与所



四八三

覚

庄内山田真方納右衛門粹
 真方藤八

真方主水左衛門
右主水左衛門
真方長左衛門

元禄十五年三月廿一日 評定所印

合三人

四八一五

右ハ、御足輕御無人ニ付御切米三石六斗被下三百五拾人

覚案文

火元何所何ノ
何左衛門

被召立候、御譜代ノ足輕子共被召出被召仕ノ旨被仰渡候、

依之御兵具奉行御見分被成筈候間、来ル廿五日ヨリ内当

座へ参上申候様可被仰渡候、

元禄十四巳十月十八日 御兵具所肝煎

都城役人衆中

四八一四

覚

一所中火事致出来申出候節、或屋敷ヲ不書出或焼失ノ家

数・火元等書落問付ノ節、漸申出候付テ披露ノ筋区々

ニ有之、不可然事ニ候、火事ノ儀所ヨリ申出候趣ヲ以

時々江戸エ申上事ニ候ノ条、従是以後ハ出火候ハ、火

事場工喫并役々ノ間走続、火元并火ノ起り様委細ニ遂

吟味、焼失物ノ分別紙案文ノ筋書付相認、火事相鎮候

ハ、跡々ノ通可申出候、聊延引有間敷者也、

一屋敷何ケ所 百姓ハ御蔵入私領ノ分可書出候、

内、何ケ所 衆中

何ケ所 中宿

何ケ所 寺門前

何ケ所 浦浜

何ケ所 百姓

一家数何ツ

一兵具類何程

一米糶雜穀何程

右ハ、何月何日出火自火付火、右ノ通致焼失候段、我々相

改別条無御座候、以上、

但、右ノ外焼失物不及書出候、尤、火本致走込候ハ、

其段ハ可書出候、

月 日 所喫役人名 印

覺

一今度高輪御屋敷并御取添方々御屋敷及御類火、不意ノ儀二候、就夫以前ニモ被仰渡候通、御家中御簡略ノ儀不怠様ニ可仕候、近年過分ノ御物入有之候処ニ御普請旁二付、猶以御銀入有之筈二候、御普請ノ儀ハ江戶御国本御城御普請ノ儀モ近年中ニ可被仰付候、左候得ハ段々大分ノ御銀入打統筈二候、御奉公方相勤候面々、身上差迫及訴訟御救不被成候テハ不叶人々モ可有之候、左候ハ、相応ノ御心付可被仰付候、御兵器等ノ肝要ノ御用ハ可被相調ト被 思召候、右式故此砌随分致簡略專一二候、簡略ノ儀ハ每度被仰渡置事候間、此節ハ取分ケ内証向ノ簡略可仕候、大身・小身共ニ相応ニ致、表向ハ置候テモ依人内証ノ驕有之、女性ノ衣類等上着ノ分ハ御仕置相守候風情ニテ、下着ニ至御法度ノ衣服ヲ用、大身ニテハ縫金糸・鹿子・摺箔杯ノ花麗何角無用ノ費モ有之由相聞得不可然事候、簡略ノ儀ハ人ノ心入次第何分ニモ可罷成事候条、内証向并衣類等ノ儀ハ其家主ヨリ氣ヲ付分限相応ニ仕、聊徒ノ費無之様ニ可

申付候、御国ノ者共花麗ノ様子ニテ何カ驕ケ間敷有之候テハ不相応ノ儀ニテ、四方ノ聞得モ不宜事候間、随分簡略ノ心掛第一仕候テ、御奉公方首尾能相勤候様ニ可仕候、

可仕候、

右ノ趣、堅可申渡様ニト被 仰出候間、謹テ奉得其意無緩疎可相守者也、

午三月廿二日

四八一七

オボエ

江戸火事ニテタカナワ御屋敷御ルイクワ、ソレニツキヲ表方(高輪)ニハ何カカンリヤクノ事ヲ、セ出サレ候、内証(簡略)シヤウムキノ事ハソノラクカタノヨリキヲ付申サス候テハカナハサルキ候ヘク候、何ホドオモテムキカシリヤクイタシ候テモ、内シヤウカタニイタツラノクワレイニクイタク候間、イシヤウマタハ何カニツイテ内シヤウハリカタク候間、(衣裝)イエ又シヨリカンリヤクノ心(心得)ヘカンヤウニテ候間、ヨクノソノコ、ロヘイタサルヘク候、以上、

三月日

右ノ通、御女中方へ被仰渡候事、

四八一八(の1)

覚

一物テ馬ニ荷付候儀、其馬ノ様子ニヨリ荷物ノ分量ヲ以考、馬不致難儀様ニカロク付可申候、并道中荷付馬定ノ貫目、弥無相違様ニ念ヲ入、重荷付申間敷候事、

一病馬并イタミ有之馬随分イタワリ、左様ノ馬ハツカイ申間敷候事、

但、右ノ類ノ馬ハコクミカネ候者ハ最前モ相触候通可訴出候事、

右ノ趣、堅可相守候、若違背ノ族於有之ハ可為曲事者也、

午五月日

(四八一八の2)

右ノ通、於江戸從 御老中様被仰渡候間、御書付ノ通

堅固ニ相守候様ニ所中へ可申渡者也、

六月十二日

評定所印

四八一九(の1)

覚

一諸人仁愛ノ心有之様ニテ常々被思召候故、生類アハレミノ儀度々被 仰出候処、今度橋本権ノ介犬ヲ損サシ不届ニ被思召候、依之死罪被仰付候、弥人々仁愛ノ心ニ罷成候様ニ大身・小身共ニ相守、末々迄急度可申含者也、

午十月日

(四八一九の2)

右ノ通、於江戸御老中様ヨリ被仰渡候ノ間奉得其意、

堅固相守候様所中へ早々可申渡者也、

午十一月廿六日

評定所印

四八二〇

覚

一他国ノ者御当国エ入来候節ハ衆中宰領ニテ取次ニ送届候様兼テ被仰渡置候、弥其通有之可然候、

一他国者入来、取次ニ宰領相付差送候節、本道筋召列馬

次所エ列届、其所ノ役人工可継渡之候、辺路筋召列申

間敷候、尤、請取候諸所モ右ノ筋ニ相心得可申候、旅人何様ニ申候共刃路筋曾テ罷通間敷候、

但、馬繼所ヨリ刃路工役人罷居所於有之者、旅人ハ馬次所へ召置、宰領人、扈從人、役人所工相達、役人馬次所へ出合候節次渡可申候、

一 寺社參詣ノ者モ右同断本道筋召列可申候、万一所ニヨリ本道ヨリ踏入刃路工寺社有之所モ可有之候、左様ノ所ハ各別ニ候間、其通ニ社可有之候、乍然夫トテモ又々最前ノ道筋ニ出、本道筋何方へモ召列可申候、脇道罷通間敷候、道筋ノ儀ニ付テハ先年為被仰渡趣モ有之候間、其通ニ可相心得候、

右ノ通可申付旨、此節被 仰出候間、堅固可相守之候、乍此上万一刃路筋召列候者於有之ハ宰領人曲事可被仰付候、尤、横目エモ申渡置候間、相背者有之ハ可申出候条、右ノ旨得其意候様ニ私領役人工可被申渡置候、

一 往申渡候マテニテハ以後違背仕儀モ可有之候条、折節可被申聞旨御家老衆御差図ニテ候、以上、

元禄十六未五月

猿渡喜右衛門

村田平右衛門

朱書

本文之通被仰渡候後、此中宰領不相付差通候者ニモ此節ヨリ宰領相付候様ニトノ儀ニテハ無之候、先規ヨリ宰領付来候者迄ニ相付本道筋可召列之旨、未六月五日御同人ヨリ被仰渡候、

四八二一

覚

一 前方由緒不相知合葉猥ニ売買仕モノ有之、諸人障ニ罷成候付、合葉主取上野新右衛門工被仰付趣有之、御領國中売買一手ニ被仰付、下売ノ者へハ手札相渡、新右衛門一手ノ外脇売不致様ニト先年被仰付置候処、頃日似セ合葉売買致モノ有之由相聞得不可然事ニ候間、向後新右衛門一手ノ外曾テ合葉売買致間敷候、若違背ノモノ於有之ハ可及沙汰候条、此旨所中へ堅固ニ可申渡者也、

元禄十七申正月十八日

評定所印

四八二一(の↓)

覚

一御領國中道作ノ儀、双方ノ土手ヲ缺ニテ削候ニ付テ、並木有之処ハ木ノ根出候ヲ、風雨ノ砌並木倒、以後道造却テ大破ニ相成ノ由候、並木有之候テモ崩掛リ等有之、通道危相見得候処ノ儀ハ各別ニ候条、其見計モ可有之事ニ候、差テ道造ノ詮ニモ不成結構迄ニ土手ニ缺目ヲ付候諸所モ有之由ニテ、自今以後道造ノ節弥以双方ノ土手ニ無構、通道筋迄ヲ人馬踏籠無之様ニ致道造ノ様ニ可被申渡候、右ノ儀ニ付テハ被 仰出趣モ有之間、此段諸所へ堅固ニ可被申渡者也、

申正月晦日

御国遺座印

取次

川上八郎左衛門

(四八二の2)

右之通被仰渡候間得其意、向後道造無相違様ニ可被相守候、以上、

元禄十七年申二月朔日

殿役所

山崎藤七郎 印

桑波田勘介 印

四八二三

覚

一喧嘩其外災殃等ニ付疵付候者可有之節ハ手疵委細見届可申出事、

一致自害候者有之候節、自害無別条候哉死体別テ入念見届候テ可申出事、

一行倒者等可有之節モ死体入念見届、所持道具有之候ハ、相改可申出事、

一右体ノ死人可有之節ハ近外城横目中招寄、死体見届候上見分ノ趣可申出事、

一右式ニ付死候者死体取置ノ儀ハ横目ヨリ致差図ニテ無之候条、死体ニハ構申間敷事、

一所ヨリ訴訟申出候儀有之候節、噯杯同列ニ横目致加判儀不可然候、横目ノ儀ハ惣テ見分ノ旨致言上役目ノ事候条、所ヨリ訴訟申出趣有之候節、其儀ニ付テ横目中

存寄趣モ候ハ、別達テ横目座工可申出事、

一於所遂檢使候儀ハ勿論可致加判事、右ノ趣可得其意候、此外ノ儀先規ノ通、向後無相違堅固相勤之候、以上、

申四月六日

横目頭所印

諸所

横目中

覚

一 御家老座

右、評定所ノ事、

一 御勝手方

右、御国遺座ノ事、

一 御用人座

右、日帳所ノ事、

右ノ通、向後唱可申ノ由從江戸被仰下候付テ、今日ヨ

リ被相改候間奉得其意、所中エ可申渡者也、

宝永二酉二月十二日

御家老座印

覚

一 鹿兒島中組ノ人数方々入交候付、此節被相改取寄ヲ以

組分被仰付候間、其旨可致承知候事、

一 方角限ニ被仰付候儀ハ御触流ノ通達無滞為ニモ候間、

向後諸事組中ニ相伝候儀無遅々可次渡候事、

一時々被仰渡御掟之趣、無違背可相守候事、

一切支丹宗・一向宗弥以稠敷被制禁候条、万一捨者モ於有之ハ可遂言上事、

一 御奉公方難波ケ間敷申出儀令停止事、

一 口事沙汰ノ儀、先於与中可相済之、与中ノ捌ニテ難済

儀者可有披露候、惣テ結党ノ儀、一切令禁止候事、

一 志不宜者又者諸人ノ妨ニ罷成者於有之者可申出ノ事、

一 依科御仕置被仰付候者有之剋、縁者・親類タリトイフ

トモ、無御差図面々其場へ致推参間敷候事、

一 組中ノ死人者早速組頭へ申出、追テ跡目ノ儀御法ノ通

可申出候事、

右、組合付テ御掟ノ儀、委細ハ追テ被仰付筈ニ候得共、

先右ノ趣申合諸事首尾克可仕候、内々不宜儀ナト有之

候時分、令大形候故事立候儀モ致到来候間、令油断大

破ニ成立候ハ、御詮儀ノ上組中迄モ其咎可被仰付候、

組頭・小頭又ハ組中へ不札不熟ノモノ於有之ハ可被行

厳科候条被奉得其意、組中ノ面々堅相守候様可被申渡

者也、

西四月廿八日

肝付(久兼)主殿

種子島藏人(久時)

組所

喜入安房(久)
 新納市正(久)
 島津助之允(忠)
 島津中務(忠)

四八二六

覚

一 御供并間々上下道具印・小荷駄印・駄荷印今度被相改候、向後者自分調ニ被仰付候間、本形ノ通可相調之、

小荷駄印・駄荷印ハ此節ヨリ一様ニ被仰付候間、モメ
 ン布絹類何様ノ物ニテモ色サヘ不相替候得ハ不苦候、
 程比大小御構無之候、

一 御家中ノ荷札并宿札ノ儀モ被相改候間、向後荷札ハ薩
 州某ト可相調候、宿札ハ松平薩摩守内何某ト可相調候、
 一 武具馬具其外衣類等異様ノ儀仕間敷候、就中武具馬具
 ノ儀ハ夫々ノ用方モ道理不相叶見分迄ノ物数寄ヲ調候
 儀不可然候条、常々其旨ヲ存知相調可申候、馬道具憚
 房用候儀無用可仕候、

右ノ通、於江戸被 仰出候間、与中へ可申渡由ニテ、
 道具印・小荷駄印ノ本形被差下候間、右ノ本形式通相
 調候条被得其意可被申渡也、
 一 二疋龍ノ紋ノ儀、御家ニ御由緒有之ニ付テ、向後致
 遠慮可然ノ由御沙汰候間、此段モ寄々可申伝ノ由江戸
 ヨリ申来候間、右道具印・衣類等申渡候序ニ可被相伝
 候、

右ノ通被得其意、与中工儘ニ可被申渡者也、

西五月廿日

御家老与所印

四八二七

一 中ノシンハ紙ノ百重合ヲ
 上ヲ白モメンノヌイカケ、
 緒ハムラサキ革ニテ候、

丸輪ヨリ外惣様コン染、裏表染ヌキ、

写



此丸輪ノ内惣様白手本ハモメンニテ候、
柄ハ此中ノ通ト、承候、緒ハモメンヨリニテ候

右黒緒ノ付所也

四八二八
 (四八二七号行間朱書)
 一 平生行跡不宜人ノ儀又ハ重立候人悪事有之候節、可及

沙汰儀ヲ用捨有間敷候旨、横目頭方へモ申渡候間可被
 得其意事、

一 重立候人、諸人エノ礼儀実体ニ仕候様ニト先頃モ被
 仰出、委曲為申渡事候得共、猶以其心得肝要候事、
 右二ヶ条、西七月廿八日中務様御宅ニテ被仰渡候ヶ条
 書ノ内書拔也、

一 御先代訴訟申出置未相濟儀、今以奉願心入ノ儀ハ前方
 申出候趣ヲ以、又々願申出候様有之可然候、
 一 御赦免願ノ儀、自分ヨリ立身ヲ致訴訟候筋ニ有之不宜
 候条、向後自分ヨリ及訴訟候儀ハ停止ニ被仰付候、然
 ハ一命ヲカロクイタシ一廉ノ御奉公仕候儀無紛者ノ子
 孫、殊更当分屹ト芸有之候歟、又ハ何ソ重宝ニ罷成候
 器量ノ者又ハ御奉公方別テ情ヲ出、正道ニ相勤ノ儀無
 紛者ハ難捨置事ニ候条、其支配頭連々其器量ヲ見届置
 候上其頭ヨリ訴訟申出候様有之可然候、

以上、
 西八月

右、島津中務様於御宅被仰渡候、

一 兵庫殿・周防殿・玄蕃殿御間柄ト申御連続ノ御家筋詠
 モ有之候付テ、御当代猶以御取持被成御事候、就夫
 御城工被為上候砌モ此節ヨリ御取持ノ格相替候、於

御前屹披露ノ儀又ハ書付等ニハ最前ノ通殿ノ字ヲ唱可

申候、其外ノ節ハ 御前ニテモ様ノ字ヲ唱可申候、且

又右ノ訳ニ候得ハ於何方參合候節モ成程慇懃ノ敬可申

候、此旨与中ノ面々得其意候様可被申渡候、尤、外城

ノ儀ハ右ノ件ヲ以地頭ヨリ申渡候様、是又可被申渡者

也、

酉九月六日

御家老座印

与所

申聞置候、以上、

八月廿八日

四八三一

一 鹿兒島士・外城衆中、士ノ格ヲ相迦レ不屈有之、或ハ

付或斬罪被仰付候者ノ子共ハ遠流御願等御免ノ已後モ

士ニハ此已後ヨリ不被仰付候、且又士ノ格ハ不相迦答

付、切腹被仰付候者ノ子共ハ遠流御願等御免ノ已後、

願ノ上御取分モ可有之候、右ノ段向後不致混乱様可申

付ノ旨被仰出候間被奉得其意、与中へ可被申渡候、尤、

地頭有之面々ハ地頭所衆中へ可申聞置由、是又可被申

渡候、以上、

酉九月廿五日

御家老座

与所

四八三一

一 主人ノ傍輩ノ名者何方ニテモ様ヲ付唱申事候処、御家

中ノ儀ハ殿ノ字ヲ付唱候由、就中本身ノ家来共其通有

之由、就夫此節於江戸不成合ノ儀度々有之由、カ様ノ

儀ハ畢竟御家中ノ風俗不正様相聞得不宜候、此段急度

被 仰出ニハ不及事候間、私共ヨリ寄々申通惣テ家来

共へ可申付旨、旧冬御内証ニテ御意候、此段別テ御尤

ノ儀奉存候故、早速御屋敷中へハ申通様ノ字ヲ唱候事

罷成候、 御帰城前寄々被致承知、急度其訳相立候様

有之可然旨、此節 御中途ヨリ申来候条奉得其意可被

四八三三

一 出家成ノ儀、三男ヨリ御免被成来候得共、此節ヨリ鹿

兒島士并外城士ノ子共願有之候者ハ、二男ヨリハ可被

成御免候、諸士家来ノ者ハ主人心次第嫡子ニテモ遂出

家サセ可申候事、

一 右ノ外出家成ノ儀者此内ノ通被仰付置候事、
右ノ通、此節被 仰出候間、願ノ者ハ此中ノ通法様ノ
書物ヲ以寺社座へ可申出候、此旨与中へ可被申渡候、
尤、外城ノ儀ハ右ノ趣ヲ以地頭ヨリ申渡候様、是又可
申渡者也、

西十一月十二日

御家老座印

四八三四

一 御一門・御家老其外ニモ御紋ニ似候紋ハ嫡子計付可申
候、二男ニテモ分地イタシ、急度御奉公ヲモ可為仕被
存候ハ、依願ノ訳可被遊御免候、二男・三男・末々子
共紋改候ニ、御紋ノ様子ニ少モ不似寄紋ヲ為付可申候、
一 輕キ士ニモ御紋ニ似候紋有之候間、別紋ニ替可申候、
一 丸ノ内ニ三紋ハ遠目ニ葵ニ似候間可致遠慮候、
右ノ通被 仰出候間被奉得其意可被申渡者也、

十一月十八日

御家老座印

与所

四八三五

一 鳥津伊豆紋、十文字丸ニ離候所少ク候間、能見得候様
ニ相ヲ明可申候、右ノ旨可申聞由 御意候間可被奉得
其意候、以上、

西十一月十八日

(鳥津久達)
佐多豊前

四八三六

一 國中ノ僧侶、近年道学ノ心懸ウスク我慢ノ族有之由不
可然候、向後本寺又者導師ヲ輕シ、修学等ノ志有者ヲ
嫉妨ニ成、又ハ法ノ為ナト、申ナシ口事諍論ヲ企候僧
於有之ハ相糺、急度可申付旨寺社奉行へ申付置候、且
又修学ノ志モ堅固雖有之無福故難勤段無紛僧ハ志相迷
候様可令供養候、右ノ旨得其意宗門ノ法式ヲ不乱如法
相勤、畢竟道儀不衰様可致接得也、
宝永二年十一月十五日 吉貴

大慈寺

四八三七

御袖判

今度繼目無相違被 仰付候付テノ領國中申渡趣雖有之、

諸外城ノ儀ハ鹿兒島ヲハナレ段々ニ差置事候条、士ノ古風ヲ不乱地頭ヨリ申付候旨專相守、武芸ノ儀ハ勿論山坂ノ歩行・早馳リ其外達者業致肝要、争事到来候節ハ勤場へ早速馳付候儀ヲ兼テ可心懸、就中若キ者共ナマヌルク無之様、平日地頭ヨリ可申付置也、

宝永二年十一月十五日

四八三八

御袖判

条々

一去秋 (綱貫) 大玄院様御卒去無遺方仕合ニテ、未齋モ不終内

繼目無相違被 仰付、追付被任少將、累代ノ領国首尾克令相統、此節御老中 上使ニテ国元エノ御暇被下置、拜領物等段々先格不相替結構被 仰付難有次第候、國中ノ者共謹テ可存此旨事、

一兼日從 公儀被 仰渡置候御条目ノ趣、且又時々被仰出候御法度ノ旨堅固ニ可相守之、就中キリ支丹宗門ノ儀、御大禁ノ事候条、自然隠レ居ル儀聞付候ハ早速可

申出之、一向宗之儀モ子細有之、当家代々令禁止之候条、不可有違犯事、

一家老中ヨリ申付候趣致違背間敷候、其外奉行・頭人ヨリ申付候儀、支配中ノ者無違儀可相勤、惣テ下役ノ者ハ其分ケ相立候様ニ相心得、礼儀正シク相マシハリ、頭人ヨリモ下役ニ対シ無礼ナク叮嚀ニ相交、役所ノ風格無作法無之様ニ互ニ可相嗜、且又不依何篇党ラムスビ類ヲ引連判等ライタシ、妨ニ成候儀ハ従前代禁止ノ事候間、弥此旨ヲ可相守、若違犯ノモノアラハ重科可申付、尤、荷担ノ者ハ本人可為同罪事、

一平日学文武芸ヲ相嗜、親子兄弟其外類中ニムツマシク傍輩中ノ交無表裏、万端風俗ヲ不乱正道ニ可相勤、武器馬具等ノ儀其用モトツキ分限相心ニ可調置、見分迄ヲ存異様ノ道具又ハ不応分際結構ノ道具調問敷候、龜相ニ有之候テモ不事欠儀ヲモツハラ相考可致置其用意事、

一領国ノ者共ハ代々当家エ隨身イタシ来候ニ付、都テ古来旧友ノ筋目候、然ハ尋常何分ニモ致熟談、喧嘩・口事・出入等不致様可相慎、自然口事・出入等有之候節

ハ組中又ハ支配等ヨリ可相濟、其頭人共大形ニ取扱、
輕キ儀ヲ致披露為及沙汰候ハ其頭人可為越度、勿論支
配中ノ者頭人ノ扱ヲ不請、我儘ヲ申モノアラハ先例ノ
通可行重科事、

一若キ者共髮月代惣テ為体ヲ見クルシクイタシ、何国ニ
テモ士ノ風俗ニアラサル無作法ノ所行共有之ニ付、從
先代稠敷被仰付候得共、于今其風儀不相改由不屈ニ候、
武芸鍛鍊ニツキ勇サマシキ業ハ可有之事候、容体ノ儀
ハ眼前ノ事候故氣ヲ付ヘキノ処、愛念ノ一通ニマトイ、
若輩者共ヲ氣儘ニ生立候儀、畢竟親兄弟不屈候条、此
以後者親兄弟其外親類共ヨリ稠敷可申付、乍其上不用
者アラハ応其謂科可申付、勿論常々申付様大形成者ハ
親兄弟・親類共工其科可申付事、

一不依大身・小身無益ノ費無之様可令欠略、衣服等之儀
男女共二前々ヨリ被定置候趣有之、唐織類ハ雖不用、
絹紬ニテモ内々過分ニ衣服ヲ調候得ハ費トイヒ、法度
ノ無詮事候条、此節相定趣家老中ヨリ可申渡候間、其
旨ヲ可相守事、

一不勤故身体及衰微、申付候奉公モ勤カタク成行候者、

或我意ヲ働キ諸人ノ妨ニナリ候者、或乱心ノ催有之候
者共ハ服忌相懸ル程ノ親類、又ハ家ニ付無扱者共ヨリ
急度引受首尾好様可相計、若右体ノ從類無之者ハ遠キ
親類縁者タリトイフ共引取宜相計、致油断家ヲ禿サセ、
又ハ及怪我候ハ、其可計親類中可為越度事、

一農民ノ仕置題目ノ事候間、飢寒ノ苦シミナキ様ニ救之、
耕作ノ時節ヲ不違、年貢徵納等ノ儀無油断様ニ田地ノ
支配人并地頭職ノ者共精ヲ出シ可申付事、

右条々、無緩疎可相守、國中ノ者共ハ譜代ノ筋目ニ候
得ハ、聊於心底疎略ハ有間敷候得共、代々ノ旧恩ニ馴
心得違候者有之、他方ノ及批判儀ナト候テハ不然候条、
譜代ノ好ヲ存当家ノ瑕瑾ニ不成様ニト於心掛者可悅入
候、勿論行跡ヨロシク面々職分堅固ニ相勤候者ハ不依
高下段々品能申付、又ハ応其働時々可加褒美、地頭又
ハ一所ノ地ヲ遣置候者共、其外奉行・頭人等モ件ノ趣
ヲ以支配所ノ仕置入念可申付者也、

宝永二年十一月十五日

四八三九

覚

此節鹿兒島下札ノ辻ヨリ高岡筋・大口筋・出水筋三通道、他領境目迄間壹里毎ニ道程付町木ヲ被立候付テ、道程見分檢者并書調トシテ弁官新右衛門ニ大工壹人差添被遣候間、諸役人罷出首尾能様ニ可申談候、尤、委細ノ儀ハ右檢者方工覚書ヲ以被仰渡置候間、右ノ趣可被承知、此旨可申越由御差図ニテ候、以上、

宝永三戌正月廿日

町田八右衛門

諸所
嘜中

役人中

四八四〇

御書付写

一組頭・番頭相勤候者共不勤モ有之、又ハ若キ者共出合ノ沙汰不宜モ有之由、以後右通ノ儀有之候ハ、此方ニ存趣モ候間、随分勤方其外行跡心掛候様家老中ヨリ可申聞候、諸人工札儀等々、シク有之候様可申聞候、以上、

戌二月廿六日

家老中工

四八四一

諸節句衣服定

一年頭

月次ノ御目見ニ罷出候諸役人ハ鬘斗目着可仕候、無役ニテモ御一門・一所衆・与頭・御番頭并同列ノ子共・

地頭持ノ嫡子迄ハ鬘斗目着可仕候、乍然小身者ハ可為勝手次第、右ノ外ハ鬘斗目ニ及間敷候、江戸ニテハ御馬廻・新番者鬘斗目着可仕候、

一上巳 端午 重陽

御役并無役ニテモ何レモ月次御礼日ノ衣服同断ニ可仕候、

但、重陽青ノ物ハ大身ニテモ態卜用候儀ハ無用候、有合候ハ、格別ニ候、

一七夕 八朔

御一門・一所衆・組頭・御番頭并同列、且又右面々ノ嫡子迄ハ白帷子着可仕候、二男三男ニテモ分地又ハ別

立テ御奉公相勤、組頭格式ノ勤可仕体ノ者ハ白帷子着
可仕候、無左候ハ、無用之、

右ノ通被 仰出候条被奉得其意、組中工可被申渡者也、

戌三月日

御家老座

与頭中

島津家歴代制度卷之六十五
正和
明和

四八四二

写

一 万石成御免ノ儀、別テノ訳無之候ハ、御免被成間敷候、
当分万石以上ノ面々、高上リノ人有之候共御免被成間
敷候、

一 寄合並ノ格ニテ無之者ハ千石ノ者御免被成間敷候、只
今迄持来候者・格別ノ持来候者モ千石以上ニテ候ハ、
其上ノ高上リ御免被成間敷候、

一 祖父・曾祖父代ヨリモ屹立候御役相勤候者、且又地頭
職ヲモ被仰付候者ノ子孫、小番勤来候者ハ五百石成御
免可被成候、小番迄ヲ勤来候者エハ五百石成御免被成
間敷候、

一 三百石成ハ代々士筋ニテモ近代御步行格ノ勤迄ヲ仕、
其身モ右通ニ候ハ、御免被成間敷候、乍然江戸詰坏ノ

道中鐘持セ候程ノ務仕候者ハ依様子御免被成儀モ可有
之候、道中鐘持セ候者ニテモ御步行格ノ者ニテ鐘持セ
候共、右体ノ者エハ御免被成間敷候、

一 初テ高持ノ願申出候者ハ吟味ノ上御免可被成候、

一 外城養子者、其身ノ代ニハ高五拾石ニハ被仰付間敷候、
俸代ニハ五拾石以上ニモ可被仰付候、座付士ハ三拾石
ニハ被仰付間敷候、

右ノ通ニ候得共、御奉公ノ品ニヨリ候テハ格別ニ候、
只今迄持来者ハ其通ニ候、尤、只今迄持来候者ニモ右
ノ程ヨリ上ノ高ニテ候ハ、其上ノ高上リ被仰付間敷候、

一 外城ヨリ養子罷成候者、三四代過候ハ、百石成御免可
被成候、座付御赦免ハ座ヲ離御奉公仕候ハ、三四代相
過百石成ノ願申出候ハ、御免可被成候、三四代ノ内ニ
テモ諸奉行ノ格、無役ニテモ御馬廻又ハ小番ニ御免被

成候者ハ百石成御免可被成候、

一 外城養子ニテモ小番ニ被召入候ハ、三百石成御免可成
候、且又御赦免者小番相勤候筋目ノ養子ニ罷成、小番
相勤候ハ、是又三百石成御免可被成候、

一 外城ノ者又ハ御赦免者、其身若能ニ付テ被召出候者、

又ハ筆者・小役人体ノ務迄ニテ大番相勤体ニ候ハ、百石成御免被成間敷候、乍然月並 御目見仕候程ノ御役相勤候歟、又ハ中通ニモ被仰付候程ノ者ハ百石成御免可被成候、

一右ノ通、段々高上リノ儀被相定候得共、或病者或御奉公難勤体ノ者へハ向後高上リ御免被成間敷候、

一外城衆中高上リ、以前ヨリ士筋目ニテ三四代指立務来候者ノ子孫、高上リ申出候ハ、百石迄ハ御免可被成候、外城衆中ノ儀ハ惣テ百石以上ニハ高上御免被成間敷候、以前ヨリ百石以上ノ高持来罷在者ハ御構無之候、当分持高百石以上ニテ其上ノ高上リノ願申出候共御免被成間敷候、

一諸外城衆中何ソ御奉公不仕者、或幼少或病体ニテ御奉公不仕罷在候者共、此節ヨリ小普請銀被仰付候、尤、小普請ニ被召入候者ハ弥小普請銀被仰付候、右ハ、寄合又ハ寄合並格ノ者共ヨリ以下高上リノ儀、且又外城養子并御赦免者高上リノ御格式被相定候間、時々入念吟味ノ上可奉伺候、且又外城衆中高上リノ儀ハ向後時々地頭所へ申出候様申渡、此節被相定候趣ヲ

以願出者ノ筋目相記候上、高上リノ儀申出候ハ、御家老承届可被差免候、小普請銀ノ儀ハ御奉公不仕者又ハ小普請ニ被召入候者共相記、鹿兒島改同前ニ於地頭所相シラへ、明所ハ当番ノ御用人ヨリシラへノ上可申出候、

右ノ通被相定候間、諸地頭并表方支配中へ可致通達候、以上、

正徳三巳九月

四八四三

一諸士縁組、不達 貴間取組候面々ハ、家中士書下名字付候者又ハ足輕・御中間・御小者ノ娘ニテ候ハ、縁与御免被成候、

一達 貴間縁与被仰付程ノ諸士エハ家中士書下名字付候者又ハ足輕・御中間・御小者ノ娘縁与不被成差免候、乍然本妻離別又ハ死後罷成、右体ノ者共ノ娘妻ニ致置、嫡子致出生候ハ、妻ニ御免可被成候、二男以下出生候ハ、母札ニ可被成御免候、

一家中士肩書名字付ノ者娘且又諸士ノ下人札ノ者ノ娘ハ、

諸士ノ妻札ニハ都テ不被成御免候、乍然嫡子致出生、

又者其時ノ吟味次第ニ母札ニハ可被成御免候、

一諸士家内札ニテ罷居候者娘、士筋儘成者ニテ候ハ、

不達 貴聞縁与取組候工ハ縁与被成御免候、

一士家内札又ハ足輕・御中間・御小者家内札ノ者ニテモ

肩書・名字有之筋目儘成者ノ娘ハ縁与御免被成候、右

体ノ者無名字ノ者ノ娘ハ縁与不被成御免候、乍然右腹

二嫡子又ハ二男以下致出生候ハ、母札ニハ可被成御免

候、

一社家・寺門前者ノ娘、士工縁与不被成御免候、

右ノ通、自今以後被仰付候間可奉承知候、

十一月

四八四四

一此比馬牽共於中途猥ニ馬ヲ追カケ或ハ途中立置、歴々

被罷通ニモ構ナクヒキ掛無作法ノ仕形ニ候、右付テハ

前方被仰渡置趣有之候処、御法様ヲ相背ノ不屈候間、

向後左様無之様屹ト組中工可申渡旨、大御目付衆ヨリ

御目付町田孫右衛門ヲ以被仰渡候間致通達候、以上、

巳十二月二日

高橋七郎右衛門

四八四五

諸地頭領主へ申渡

一衆中并家来又ハ寺門前・町浜・在郷、乱心者有之節ハ

早速囲ニ入置随分念ヲ入可致覚悟候、輕者共ノ儀ハ囲

等相調候儀難成モ可有之候、右体者ハ其旨所役人中へ

申出、自分調難成ハ於無別条ハ所役ニ囲調申付、堅固

致覚悟候様可仕候、

一囲ニ入置候以後致快気候由ニテ囲出ノ願申出候節、十

分ニ致快気候トハ不見請候得共、其者ノ父母妻子等歎

候間、親類又ハ近所ノ者不便ニ存、願申出儀モ可有之

候条、右式ノ願申出候節ハ所諸役人中随分念ヲ入承届

候上、所横目并近外城ノ横目立合致見分、正氣無紛候

ハ、囲出ノ願地頭又ハ領主へ申出差図次第可仕候、尤

囲出差免候テモ無刀ニテ可差置候、乱心者ノ儀者一往

正気体ニ罷成候テモ不図致再発事モ有之候間、於所中

モ氣ヲ付可申候、近所ノ親類中專氣ヲ付、少ニテモ再

発ノ様子見及候節ハ早速囲ニ可入置候、若大形ノ儀有

之、何様ノ悪事モ致出来候ハ、可為越度候、
朱記

私領ノ者乱気体有之候節、格護方依領主テハ自分計モ
有之由相聞得候、右ニ付テハ正徳三巳年分テ申渡有之
通候条、随分入念致格護、囲并座敷内取拵入置候儀又
八囲出等ノ儀共、惣テ被得差図可被取計旨、天明三癸
卯七月主馬様ヨリ鹿島辺様御取次ニテ被仰渡候事、
(喜入久福)
一正気ニ罷成候テハ身体為持無間不致徘徊候テ不叶者有
之候ハ、吟味ノ上地頭又ハ領主へ申出差図次第可仕
候、尤、御城下へ徘徊仕候儀堅無用可仕候、

右ノ通、向後相心得大形ノ儀無之様急度可申渡候、左
候テ、右体ノ者ノ儀ニ付地頭・領主へ申出候節ハ段々
承届、別条於無之者遂披露、差図次第可申渡候、以上、
正徳三巳十二月十六日
(島津久当)
將監

四八四六

写

私領ノ者乱気体有之候節、格護方依領主者自分計モ有之
由相聞得候、右付テハ正徳三巳年分テ申渡候通候条、随
分入念致格護、囲并座敷内取拵入置儀又八囲出等ノ儀共、

都テ可得差図可被取計候、右外取締ニ付テハ其後段々申
渡候通可被相心得候、種子島ノ儀ハ遠海ノ事候間、仕来
ノ通ニテ、向後出入等ノ節、時々首尾可被申出候、
右可申渡候、

天明三卯七月

(喜入久福)
主馬

右ノ通、鹿島辺様御取次ニテ被仰渡候、正徳三年巳ノ仰
渡候処へ朱書入置候、

四八四七

大雄山南泉院

一大雄山 御宮

一南泉院 御位牌殿

右者、此内南泉院御宮ト唱并書付等ニモ相記候得共、
向後書付又ハ唱ノ儀ニモ右ニケ条ノ通可相心得候、右
ノ通、与頭・支配頭・諸地頭・諸役人へ不洩様通達可
有之候、以上、

正徳四年四月十六日

四八四八

諸地頭并私領持ノ面々へ可申渡覺

一御当地ヨリ諸外城へ差越候諸奉公人、自然病氣差発候

節ハ所中ノ醫師早速可申付候、醫師無之所ハ醫師罷在

候近外城へ申越、早々罷越致療治候様可致肝煎候、尤、

醫師へモ兼テ可申聞置候病人ノ儀ハ宿亭主并役人中諸

事叮嚀ニ可相計候、右ノ段、地頭所ハ嘸、私領ハ役人

へ可申聞置旨、不洩様可申渡候、以上、

午四月廿五日

取次
市来次郎左衛門

四八四九

一諸人召仕ノ男女相抱候節ハ受人ヲ立抱置事候処、抱ノ

内或不所行或氣任又ハ暇出候節、身代限ノ首尾等受負

ノ者ヨリ埒明筭候処ニ、至其期受人ヨリ不構体ニテ何

角ト致不埒者有之由相聞得不可然候、畢竟右体ノ節為

可埒明証印ヲモ致置事候処ニ右通ノ仕形不屈候、向後

抱者ノ儀付テ惣テ受負ノ者引受無滞可埒明候、若受人

於令不埒ハ急度可遂披露候、此旨与中・地頭所・私領

へ可被申渡者也、

四月廿八日

御家老座印

四八五〇

一其身代々別立候者、他へ養子ニ罷成候ハ、最前別立候

名跡ハ被相立間敷候、

一二男屋敷、依願被下事候得共、漸々多人数ニ罷成、可

被下屋敷モ無之候付、向後二男屋敷被下間敷候、

一新規ニ被召立候者工屋敷被下候儀ハ格別ニ候、

一外城衆中ノ儀モ其身ニ別立候者、他ノ養子ニ參候ハ、

最前別立候名跡者被相立間敷候、二男三男居屋敷ニ現

地不被下候、切明屋敷ノ儀者此内ノ通御免可被成候、

右ノ通、此節御法被相定候間可得其意候、此已前ハ御

人少ニ付少ニテモ士人体相重様ニトノ儀ニテ、別立候

者他ノ養子ニ罷成候テモ別立候名跡者被相立候処、近

年者多人数ニ罷成候故右ノ通不被相達候、且又二男屋

敷願ノ者モ多人数有之、可被下屋敷無之旨、現地ノ内

居屋敷ニ被下候得共、年々願ノ者ハ多罷成、現地ハ漸々

相禿候、出家・山伏成ノ儀モ前方ハ御人少ニ付テ二男

迄ハ御免不被成候処、近年多人数ニ罷成候付テ二男ヨ

リ被差免、依申分者嫡子ヲモ御免被成事ニ候得ハ此節

被相改候、尤、別立候自分ニ居屋敷ヲ求罷居候儀、且

又別立候願申出候儀ハ無御構候間、此中ノ通可相心得

候、此旨与中并地頭所へモ申渡候様ニ可致通達候、以

上、

五月十六日

内記

四八五一

御関狩ノ節惣奉行備定

一 馬印壹本

一 手鍮壹本

一 鉄炮式挺

一 挟箱一

一 雨具箱式荷

但、竹馬、

一 先供六人

一 馬廻四人

一 草履取壹人

一 中間式人

一 踏籠壹

右同与頭・御番頭并同格ノ人備定

一 馬印壹本

一 手鍮壹本

一 鉄炮式挺

一 挟箱一

但、御馬追ノ節、鉄炮ノ代弓台壹挺、

一 雨具箱壹荷 但、竹馬、

一 先供四人

一 馬廻式人

一 草履取壹人

一 乘馬壹正

一 中間式人

一 踏籠壹ツ

但、弁当ノ儀、行列ノ内可為無用候、

右者、御関狩又ハ御馬追ノ節備定此節被相改候間、向

後右通可被相心得候、御定ヨリ供人等相重候儀可為無

用候、畢竟行儀専有之候様可被相心懸候、結構ケ間敷

儀不入事ニ候、家来等ノ支度有候候用龜相ニテ相濟筈

ニ候、勿論股引類致サセ間敷候、兼テ結構ケ間敷取立、

尤、目立候儀無用候、年々結構成立儀ニ候間、右定ノ

通可相守候、以上、

但、出水瀬崎御馬追ノ節備定、此内ノ通、

正徳五未三月

四八五二

諸外城衆中并私領役目有之者、其役付テ無調法ノ儀寺

入・遠慮・逼塞等ノ御科申付候節、此程ハ地頭又ハ領

主へ申渡、引付相渡、赦免ノ節モ右ノ次第申渡、地頭

又ハ領主其者見届候得共、此已後右体ノ御科申渡様、

此節申談候趣左ニ相記候、

諸外城衆中并私領役掛ノ者寺入并赦免ノ節申渡様ノ次第

一 引付於異国座相調、大御目付へ相渡、大御目付ヨリ若御年寄請取、御用人工相渡、当人役目支配ノ大頭へ相渡、大頭ヨリ支配頭へ何某事依科寺入被仰付候間可申渡旨申渡、引付可相渡候、支配ノ大頭無之役人ハ其支配頭へ右ノ科申渡、引付可相渡候、支配頭御目付へ取合罷出候次第、御目付相詰候儀被定置候通可有之候、

但、家内迄モ御咎目有之候ハ、其段ヲモ可申渡候、

且又何某事依何科寺入被仰付候間可承置旨、地頭又ハ領主へ御用人ヨリ可相達候、

一支配頭ヨリ引付本寺へ差越、本寺ヨリノ書付取候テ所嘸・役人方へ差遣之、右仰渡ノ趣ヲ以嘸・役人ヨリ申渡候様可申渡候、

一 右赦免ノ節、何某事寺入被仰付置候処、出寺被仰付候間可申渡由、寺工ノ書付於異国座書調、大御目付へ相渡、大御目付ヨリ若御年寄受取、御用人へ相渡、御用人ヨリ本寺へ差越之、本寺ヨリノ書付取候テ所嘸又ハ

役人方へ宿次ヲ以差越、与頭又ハ五人与ノ内卷人相付、支配頭何某宅工罷越候様ニトノ儀迄モ同前ニ可申越候、使僧ヲモ相添候様ニトノ儀モ可申渡事、

但、何某事寺入被仰付置候得共、出寺被仰付候段、地頭又ハ領主へ御用人ヨリ可相達候、

一支配ノ大頭工何某事寺入被仰付置候得共、此節赦免申付候、支配頭宅ニテ見届赦免ノ段申渡候様可被申渡旨可相達候、支配頭へ右ノ件可申渡候、尤、当人出寺申付候間、使僧并与頭五人与ノ内卷人相付、支配頭宅へ罷出候様ニトノ儀ハ先達テ所嘸・役人方へ申越旨モ御用人ヨリ可申通候、支配頭へ申渡候、支配頭御目付へ取合罷出候次第、御目付相詰候儀モ前条同断、

一 当人ハ使僧并与頭又ハ五人与ノ内卷人相付、支配頭宅へ罷出候節、支配頭へ致対面寺入御免被成候間、難有可奉存旨申渡、且又月代仕役儀不相替可相動由ヲモ可申聞候、

但、家内迄御科有之候者ハ当人赦免ノ節無御構段モ可申聞候、

一 赦免申渡候当日ニテモ翌日ニテモ支配頭罷出、右ノ首

尾并御札可申出候、其後当人ハ心次第在所へ可罷帰旨

可申聞候、

但、外城ヨリ御当地へ差越候者、与風寺入申付候節
ハ支配頭ヨリ直可申渡候、赦免ノ節モ所与頭、五人
与ハ不有合筈ニ候間、使僧計相付支配頭宅へ罷出候
様可申渡候、

一右同遠慮・逼塞等ノ御科申付候節又ハ赦免ノ節申渡様
ノ次第、右同断ニテ、此間地頭又ハ領主首尾仕候儀ヲ

モ支配頭首尾ニ可仕候、

朱記

一嘸・役人并与頭・横目其外無役ノ者ハ有来候通、地頭
又ハ領主へ申渡、地頭・領主首尾可仕候、

一役目ニ無構其身付テノ無調法有之、其科申付候節又ハ
赦免ノ節申渡様ノ儀ハ、尤、地頭・領主へ申渡、地頭
又領主首尾可仕候、

右ノ外城衆中并私領役目有之候者御科申渡候次第御法
様有之候処、役目有之候者御科申渡様、鹿兒島筆者・
小役人へ御科申渡候次第ト不相弁儀有之候、依之此節
右ノ通申談候条通達可致候、以上、

五月

内記

四八五三

写

一先頃近国ヨリ飛脚差越、帰国ノ節夜中ニ罷通候所有之、
道筋無案内ノ由ニテ案内ノ者被相付度ノ旨、其所ニテ
申達候得共、鹿兒島ヨリ無御差図候得ハ案内相付ノ儀
ハ不罷成ノ旨致返答、飛脚ノ者難儀仕候事共為有之由
其間得候、使者ノ儀ハ不及申、飛脚類ニテモ往来付テ
用事ノ儀、頼掛候節ハ相応ニ相達、支無之様叮嚀可仕
事候処、無其考右体ノ挨拶不成合ニ候、役人共有合候
所ノ儀ハ勿論其外往来筋ニ居住仕候者共迄、向後気ヲ
付往来ノ人ヨリ頼寄候儀共可有之節ハ相応ニ相達、尤、
其所ニテ難達儀ハ其訳ヲ申断叮嚀致挨拶、道筋案内寺
ノ儀ハ役人共へ得差図候ニモ及間敷事候得ハ有合候者
ヨリ致案内、已後ニ役人共へ其首尾申出候様有之可然
事候、此儀屹被仰渡儀ニテハ無之候、通路筋ノ諸所為
心得地頭・領主ヨリ役人共へ得ト被申合置可然候、此
段同道筋地頭・領主へ通達可仕旨、主殿殿被仰候、以
上、

未七月廿八日

取次
町田八右衛門

四八五四

写

寺社奉行へ申渡

不依何事御咎目被仰付候者ノ儀付、福昌寺・大乘院ヨリ
訴訟ケ間敷儀曾テ申間敷候、御仕置ノ相掛事候得ハ、軽々
敷被仰出事ニテハ無之処ニ、委細訳ヲモ不存、与風為存
寄計ニテ訴訟ケ間敷儀申候事不宜候、重テ左様成儀不申
様可申渡候、

右ノ通可申渡候、

申四月廿九日

内記

四八五五

覚

客屋預り

御春屋役

右ノ通唱候様此程被仰付置候得共、客屋評定所預御春屋
役ト向後相唱可申候、客屋評定所御用ノ儀ヲモ御春屋ト
唱、又ハ御春屋御用ヲ客屋ナト、唱違書違候儀共有之、
不宜候条、已後客屋并評定所・御春屋、其御用ノ向ニヨ

リ唱違書違無之様与中へ可被申渡者也、

申六月二日

御家老座

御家老

組頭

四八五六

一寺人人并閉門等被仰付候者、御赦免ノ節役儀有之者ハ
本々ノ通御役被仰付候旨被仰渡候、然ハ御咎目内ハ御
役御免ノ事候得ハ、御役料・御切米共ニ御咎目内ハ不
被下咎候、逼塞・遠慮等ノ者ハ、御赦免ノ節如本々御
役相勤候様ニト申渡ニ不及候得ハ、尤、逼塞・遠慮ノ
内御役料・御切米無御構候間、此旨可承置旨惣通達可
致候、以上、

申七月二日

大藏

四八五七

一江戸へ大廻船往来共ニ武具馬具・錫・鉛積乗候儀 公
義御禁止ノ段ハ兼テ申渡置候、硫磺ノ儀モ御法度候、
早駄船ニモ石品々積乗候儀、御禁止ノ事候間、自然御
番所ニテ被改出候得ハ 御難題ニ罷成事候間奉得其意、

曾テ積入申間敷候、此旨末々迄堅相守候様、与中并地頭所へモ可被申渡者也、

享保二酉正月十七日

御家老座印

御家老組所

四八五八

一質屋共質ニ取候諸物ノ内、武具馬具類ハ以前ヨリ証拠相立請取由候間、弥其通可仕候、其外ノ品物ハ兼テ質屋使致来候者ハ勿論何方ノ者トモ不相知者ニテモ持来候ヲ幸ニイタシ、持主ノ不及沙汰請取置由候間盗人有之、質屋改申渡候節、何方ヨリ質ニ入置候モ不相知事而已有之候条、向後ハ何方ノ者共不相知者持来候品ハ不依何色ニ儘ニ証拠相立候上可致質借候、且又質屋使致来能為存者ニテモ其身所持ノ外頼物ニテ候ハ、持主又居所モ承届可受取置候、自然持主難頭ナト申儀モ候ハ、持来候者ヨリ証拠相立、已来紛敷無之筋ニ候ハ、可致借候、此上大形受取置質ニ入置候ハ、究テ不相知儀於有之ハ可為曲事候、
右ノ趣、質屋共へ寺門前ハ寺社奉行、町方ハ町奉行、

諸外城ハ地頭・領主ヨリ屹可被申渡置候、此段可申渡候、以上、

酉六月

四八五九

写

一質屋使イタシ候者共、此内致取次質ニ入置候品々ノ内盗物有之段々遂詮儀候得共、何方ノ者致盜持来品物不相知候、依之先頃質屋共へ段々申渡趣モ有之候得共、偶証人ナトヲ立候モ名代迄ニテ其詮不相立候、畢竟使イタシ候者共大形故不相知候間、向後質屋使イタシ候者共随分入念、不依何色質ニ入品持来候ハ、居所等相知、紛敷儀無之者ハ其上ニテ証拠人詮相立候様仕置可致取次候、万一此已後盜物ヲ質屋ニ使イタシ御詮儀ノ節、盜イタシ候者不相知候ハ、其品致取次候質屋使ノ者へ屹其科可申付候、尤、質屋へハ此内委曲申渡置候間、乍此上大形ノ儀於有之ハ是又可及沙汰候、以上、
右ノ趣、与中ハ組頭、寺門前ハ寺社奉行、町者町奉行、質屋へハ御勝手方、諸外城・私領ハ地頭・領主ヨリ屹

可申渡旨可申渡候、

酉十二月

主殿

四八六〇

一御咎目被仰付置候内相果候者ノ子供、不案内ニテ継目ノ願申出者モ可有之候間、組頭并小与頭ヨリモ氣ヲ付其沙汰可致候、尤、右体ノ子共継目申上様ノ儀、御内意可申出候、御吟味次第御差図可有之候間、右ノ通可相心得候、以上、

酉十二月五日

四八六一

写

諸座付ノ者、其外御奉公ノ依功者以前ヨリ士ハ御赦免被仰付事候、此以前ハ御人少ノ事ニテ他所ヨリ被召抱候儀モ有之候故、右通御赦免為被仰付事ニテ子孫迄モ士ニテ罷在儀ニ候、然共士ノ二男三男迄大分ノ人数ニ罷成、近年ハ他所ヨリ無抛被仰方有之候テモ、御断被仰達不被召抱事候、右ノ次第ニテ御人御不足モ無之候、

依之向後御赦免左ノ通御法被相定候、

一諸座付ノ者、別テ勤ノ功モ積、御調法ニ罷成候者ハ其身一代座付士ニ可被仰付候、左候得ハ其子親同前ノ宜勤ノ者ニテ候ハ、其子モ一代士ニ可被仰付候、三代相続首尾克相勤候ハ、三代目ヨリ永々座付士ニ可被仰付候、

一右同断ノ者、無隠働ノ者又ハ及数十年勝テ勤方宜者、其身ヨリ永々座付士ニ可被仰付候、

一御船頭ノ儀ハ有来候通永々士ニ可被仰付候、

一脇船頭ノ儀ハ、当分ハ外城衆中ニ御赦免被仰付事候得共、向後座付士同前ニ依功ハ其身一代御船手付士ニ被仰付、三代相続脇船頭ヲモ相勤功有之候ハ、永々御船手付士ニ可被仰付候、若至子孫御船手士ノ御奉公ノ御用無之者ハ御納戸・御兵具所座付士ニ被仰付候、勿論御船頭ヲモ相勤候程ノ功有之者ハ有来候通其身ヨリ永々士ニ可被仰付候、

一何ノ御用相立候程ノ儀有之者、吟味ノ上外城衆中可被仰付候、

一右同断ニテ座付士又ハ一身者体ノ者被召出候ハ、其身

計可被仰付候、三代相統御用向首尾克相勤候ハ、永々座付可被仰付候、

右ノ通、此節被相定候、勿論右ノ外何ソニ付被召出候者有之候節、右ニ準其節ノ様子次第可被仰付候条、此旨支配中不洩様承知可仕置旨、支配頭へ可致通達候、以上、

享保三戊二月廿二日

(島津久当)
将監

四八六二

覚

一 諸士二男三男家ニテ三代モ別立罷在者、嫡家又ハ二男家跡職無之節、自分ノ家ヲ禿致相統候儀有之候、此儀家相統ノ為ニハ尤ノ儀候得共、代々別立罷在候家ヲ禿候儀ハ如何ノ事候条、向後右体ノ者ハ被仰付間敷候、其身ノ代ニ別立候者、又ハ子孫ノ内ニ男三男有之者、又ハ一類ノ内ヨリ致相統者有之候ハ、其者ヲ跡職ニ願可申候、若右類ノ者モ無之、家及断絶事候ハ、代々別立罷在候者ニテモ、跡相統不致候テ不叶訳モ有之候ハ、其身ノ跡ヲ仕居可申候条、相統御免被下度候旨可申出

候、尤、外城養子ニテモ願可申卜存候者ハ是又願可申出候、依其趣御沙汰次第可被仰付候、

一 組中ノ者死人有之節ハ早速申出、組頭承置候、家督ノ者相果候時ハ忌明次第法様ノ書付ヲ以繼目ノ願可申出候、何ソ子細モ無之延引候ハ、名跡被相立間敷候条、時々可致沙汰候、急ニ跡職ノ儀願難申出訳相立候儀有之者ハ向後月数十二月ヲ限りニ可申出候、若無抛子細モ有之、右月数ノ内跡職ノ儀難申出者有之、延引仕訳候ハ、其趣無油断可申出候、勿論以御見合跡職可被仰付者ハ格別ニ候、

一 直子無之、親類中ニモ跡相統候者無之、外城養子ノ願ヲモ申出筈ノ者モ右同断ニ可相心得候、急ニ相究難申出訳モ候ハ、依其趣御沙汰ノ上御取分モ可有之候、乍此上致大形、御断ヲモ不申出致延引候者於有之ハ名跡被相立間敷候、
右ノ通、此節被相定候条得其意、与中へモ可被申渡者也、

戊三月二日

御家老座印

御家老与組頭

四八六三

写

御当地并於江戸諸人ヨリ訴訟等申出候節、同役有之面々申合相中ニテ申出ノ儀者御口上無之筈ニ候、御訴申出訊有之候ハ、一分ノ御訴可申出候、同役ノ内身帯ノ甲乙モ可有之候処、皆同前ノ儀ト申合一同ニ御訴申出間敷候、右ノ通、不洩様可致通達候、以上、

戌三月廿八日

将監

四八六四

一御家老坏ノ様ニ一月ツ、相勤候者、月番、
一御近習役并御納戸奉行杯十日代ニ相勤候ハ、御用番、
一御小姓類非番・当番有之候ハ、当番、

右ノ通ニ唱可申候、

右ノ通、御番頭・与頭其外頭々々例ノ通御用人ヨリ可

致通達候、以上、

戌六月十七日

彈正
取次

伊地知越右衛門

四八六五

写

御直元服・御前ニテノ元服且又元服ノ御礼申上候共、其親ヨリ願申出初テノ御目見別立テ不申上、元服ノ節初テノ御礼ハ相濟事ニ候、右ノ通ノ者ハ其通ニ候、若年ノ家督者ハ家督御礼モ不申上、元服願候事ハ其家ノ格式ノ御礼不相濟内者不事足格有之候間、若年ノ家督繼目御礼其家ノ格ノ程ニヨリ進上物相納可申候、其以後ハ元服イタス年程ニ罷成候節、元服ノ願可申候、

右ノ通被 仰出候条、別紙ノ面々御家老与并六与与頭ヨ

リ与中ノ人へハ可被致通達旨可被申渡候、以上、

戌六月

将監

四八六六

二男迄 御直元服

島津兵庫殿 (久年)

島津玄蕃殿 (眞徳)

島津左衛門殿 (久甫)

島津周防殿 (久徳)

嫡子 御直元服・二男 御前元服

島津左中

島津図書 (久倫)

島津内記 (久眞)

〔久兵〕 島津内膳	〔久白〕 島津助之丞	〔久應〕 新納四郎左衛門	〔久應〕 島津筑後	〔久應〕 島津將監
〔久應〕 嫡子 御直元服	〔久應〕 川上久馬	〔久應〕 樺山權左衛門	〔久應〕 桂太七郎	〔久應〕 御前元服
〔久應〕 島津頼母殿	〔久應〕 島津求馬殿	〔久應〕 喜入数馬	〔久應〕 喜入数馬	〔久應〕 川田長右衛門
〔久應〕 町田郷九郎	〔久應〕 伊集院藏人	〔久應〕 島津主計	〔久應〕 島津市太夫殿	〔久應〕 本田新次郎
〔久應〕 島津新八	〔久應〕 北郷作左衛門	〔久應〕 吉利左衛門	〔久應〕 種子島彈正	〔久應〕 秩父十郎兵衛
〔久應〕 島津伊織	〔久應〕 大野太郎太夫	〔久應〕 祢寝千十郎殿	〔久應〕 肝付典膳	〔久應〕 服忌人ノ儀者古来ヨリ段々ニ 御代々ノ思召ヲ以被仰出、
〔久應〕 島津内藏	〔久應〕 伊集院半太夫	〔久應〕 山田新介	〔久應〕 川上縫殿	〔久應〕 度々相替候故、社人・神道者等ノ用候服忌令ハ古キ書留
〔久應〕 島津主水	〔久應〕 顯娃娃長右衛門	〔久應〕 新納右衛門	〔久應〕 平田新左衛門	〔久應〕 ヲ不改用、又ハ中古ノ書留ヲ用、依神道ノ法其家々ノ家
〔久應〕 入来院主馬殿	〔久應〕 比志鳥隼人	〔久應〕 島津登	〔久應〕 比志鳥善八	〔久應〕 伝ヲ申候故一同ニ無之、神道者ニテモ段々伝ニテ間ニ
〔久應〕 菱刈藤馬	〔久應〕 諏訪神六	〔久應〕 山田新介	〔久應〕 比志鳥善八	〔久應〕 ハ取違候事モ有之事候、從 公義被仰渡置候服忌令ハ日
〔久應〕 鎌田藤四郎	〔久應〕 伊勢兵部	〔久應〕 山田新介	〔久應〕 比志鳥善八	〔久應〕 本國一同ニ其趣ヲ可相守旨被仰渡置候事候得ハ、從 公義
〔久應〕 新納左京	〔久應〕 伊集院十藏	〔久應〕 山田新介	〔久應〕 比志鳥善八	〔久應〕 被仰渡候趣ヲ守候得ハ少モ無調法相成事ニ無之処、諸所
〔久應〕 島津右平太	〔久應〕 樺山長太夫	〔久應〕 山田新介	〔久應〕 比志鳥善八	〔久應〕 ノ社人等ニ尋候事モ有之由候、向後一切服忌ノ事ニ付神
〔久應〕 町田宇右衛門	〔久應〕 鎌田要人	〔久應〕 山田新介	〔久應〕 比志鳥善八	〔久應〕 前ノ勤、御參詣ノ御供其外自分事付テモ紛敷事不仕、
〔久應〕 仁礼仲右衛門	〔久應〕 島津彦太夫	〔久應〕 山田新介	〔久應〕 比志鳥善八	〔久應〕 公義被仰渡候服忌令ノ趣ヲ堅相守可申候、神道者・社人
〔久應〕 新納十郎	〔久應〕 土持權兵衛	〔久應〕 山田新介	〔久應〕 比志鳥善八	〔久應〕 公義被仰渡候服忌令ノ趣ヲ堅相守可申候、神道者・社人
〔久應〕 渋谷三四郎	〔久應〕 諏訪仲右衛門	〔久應〕 山田新介	〔久應〕 比志鳥善八	〔久應〕 公義被仰渡候服忌令ノ趣ヲ堅相守可申候、神道者・社人

四八六七

写

御前元服
 川田長右衛門 本田新次郎 秩父十郎兵衛
 肝付八右衛門
 元服ノ御礼
 桂仁治太郎 本田六左衛門 川上左京
 〔久應〕
 戌六月廿五日

服忌人ノ儀者古来ヨリ段々ニ 御代々ノ思召ヲ以被仰出、
 度々相替候故、社人・神道者等ノ用候服忌令ハ古キ書留
 ヲ不改用、又ハ中古ノ書留ヲ用、依神道ノ法其家々ノ家
 伝ヲ申候故一同ニ無之、神道者ニテモ段々伝ニテ間ニ
 ハ取違候事モ有之事候、從 公義被仰渡置候服忌令ハ日
 本國一同ニ其趣ヲ可相守旨被仰渡置候事候得ハ、從 公義
 被仰渡候趣ヲ守候得ハ少モ無調法相成事ニ無之処、諸所
 ノ社人等ニ尋候事モ有之由候、向後一切服忌ノ事ニ付神
 前ノ勤、御參詣ノ御供其外自分事付テモ紛敷事不仕、
 公義被仰渡候服忌令ノ趣ヲ堅相守可申候、神道者・社人

等ハ其家々ノ家伝ヲ以神前ノ勤イタス事候得ハ武家ノ格

式ニ可相替候、此趣諸役人へ可致通達候、

右ノ通被仰渡候間、例ノ通不洩様可致通達候、以上、

戌八月

空

取次

樺山権左衛門

都テ火元へ駈付可被相働候、

一夜更出火ノ節ハ不聞付者モ有之候条、火事有之候通諸

人呼可申候、

右ノ通、組中并支配中へ可被申渡候、以上、

戌八月

取次

中神与五左衛門

四八六八

組頭・支配頭へ申渡

一出火ノ節、兼テ火消不被仰付置者ニテモ最寄次第早速

走続可相働候、於其場者御目付下知ヲモ可致候、此程

出火ノ節、其場へ致見物居候者モ間々有之不可然事候

条、向後右体ノ者於有之ハ稠敷追弘、其上下知不用者

ハ可及沙汰候、

一諸御役座勤ノ諸役人、其御役座遠出火ノ節ハ火本へ駈

付、御目付差引次第可相働候、

一近方出火ノ節、為用心門ヲ閉置者モ有之候、向後門ヲ

開置水ヲモ吸候様可致候、且又井戸へ諸道具不持入様

兼テ可被申付置候、

一兼テ請取ノ場所所有之候定火消、其場所念遣モ無之節ハ

四八六九

主ヲ殺候者又ハ可殺ト企候者并親族科ノ事

一当人鋸挽ニテ両日サラシ逆八付、女ニテモ同罪、

一当人男子梟首、

一当人男兄弟梟首、

一当人娘一世遠流、

一当人姉妹一世遠流、

一当人父母一世遠流、

一当人男孫斬罪、

一当人女孫一世遠流、

一当人伯叔父一世遠流、

一当人伯叔母遠流、

一当人甥一世遠流、

一 当人姪遠流、

一 当人従弟一世遠流、

一 女ヨリ主ヲ殺候節夫アラハ夫ハ梟首、

一 義絶ノ親族ニテモ其科無差別、

一 主ヲ殺候者へ同家ノ家来致同意候者ハ本人同罪、他ノ

者致同意候テモ其科本人同罪、

一 乱心酒狂ニテ主ヲ殺候者、親族迄モ正念ニテ殺候者同罪、

一 一朝一夕致奉公罷在者ニテモ右悪行ノ者、譜代ノ家来可為同罪、

父母ヲ殺候者又ハ可殺ト企候者并親族科ノ事

一 当人両日サラシ逆八付、女ニテモ同罪、

一 当人男子斬罪、

一 当人娘遠流、

一 当人妻遠流、

一 当人男孫先籠込ニテ一世遠流、女孫親類御預、

一 女ヨリ直父母ヲ殺候節夫アラハ夫ハ逼塞、

一 乱心酒狂ニテ父母ヲ殺候者、正念ニテ殺候者同罪、

以上、

戊閏十月

四八七〇

主并親ヲ殺候者又ハ可殺ト企候儀ハ無謂悪意候故、其儀少モ不存親族迄別紙ノ通御仕置被仰付事候、一朝一夕致奉公候者ニテモ譜代ノ家来同前ノ事候、別テ惡逆無道ノ事候故、従前ノ御仕置被仰付候次第、諸外城衆中并下々迄兼テ承置可宜事候、此度屹申渡儀ニテハ無之候間、尤、触流ニハ不致地頭所囓并私領役人共へ所中何ソ仕置ノ儀付テ申渡儀共有之節、其序ニ右ノ趣トモ申聞、於其所々以下ノ者共迄連々別紙ノ趣申聞置筋ニ相心得可申候、以上、

但、夫妻子其外身ヲキ者共へ仇ヲ成候者、別紙ノ趣ニ

準親族迄御科目被仰付事候、

亥二月

取次
讚良善助

四八七一

覚

行司

竹木見廻

郡見廻

庄屋

溝見廻

右ノ役々、私領ノ儀ハ向後代合ノ節ヨリ領主見合可申付候、左候テ、何某ヘ申付候旨、行司・竹木見廻ノ儀ハ山奉行所、郡見廻・庄屋・溝見廻ノ儀ハ郡座ヘ時々其首尾可申出候、尤、当分勤居候人ノ内右両座ヘ不相知者ハ領主ヨリ致書付、右両座ヘ可差出候、

六月

彈正

四八七二

写

一今度於江戸井上河内守様ヨリ唐船拔商ノ儀ニ付被仰渡趣有之候様子ハ、右体ノ者改付テ被相触候書付ヲ統聞セ、或証文等申付、或誓紙血判致サセ候迄ニテ書付預リ置候儀、畢竟改ノ名聞迄ニテ候、向後拔商イタシ候

者忝人成共召捕ノ儀ヲ專一二可申付通段々被仰渡候、

右拔商ノ儀ニ付テ改様ノ儀ハ追テ申渡答ニ候、

一右拔商ノ儀ニ付テノ仰渡ニ不限、向後 公義御用筋ハ

勿論御領國中ノ儀、諸篇共ニ其事ノ相知候手筋ヲ專入

念可致吟味候、一通ノ吟味ニテ書付等讓置候儀不可然

事ニ候条、右ノ心得ヲ以可致沙汰旨、此節被 仰出候

条可奉得其意候、此旨諸地頭・領主・与頭并支配有之

御役人工不洩様ニ可有通達候、

以上、

亥七月

内記

四八七三

写

一鉄炮打候儀、式里余方御免被仰付候得共、向後ハ以前

ノ通五里余方御免被仰付候、尤、近名狩小髷等御免被

仰付候人モ、向後五里余方内ニテ打候儀無用可仕候、

此旨与中ヘ不洩様ニ可被申渡者也、

十二月十七日

御家老座印

四八七四

写

一出水加志久利大明神ヲ薩州ノ宗廟ト唱来候得共、向後ハ薩州ノ惣社ト唱可申候、此旨支配中へ惣通達可致候、以上、

子正月

彈正

四八七五

写

一川内ノ文字、川内又ハ千台ト両様ノ文字書来候得共、御調進ノ上リ絵図ニ河内川ト銘書有之事候条、向後川内ノ文字ヲ被用候間、此旨致承知、書付等ニモ川内ノ文字可書記候、右ノ通不洩様可致通達候、以上、

子正月廿三日

内記

四八七六(の1)

写

御用人ヨリ寄々可申通覚

一諸外城工被遊 御光越御供ノ面々工所賄出候節、二汁

ニテ候ハ、一汁者精進ヲ可調候、菜皿ノ内ニモ一ツハ精進ニ可仕候、精進物無之候得ハ御供ノ内精進イタシ

候人モ有之、又ハ出家ナト被召列候節、右通調方有之候得ハ相濟儀ニ候、別達テ精進料理等調候ニハ不及事

ニ候間、向後右通可相心得旨、諸地頭・領主工寄々可申通候、所役儀ノ者共得其意罷在候様有之可然候、以

上、

三月

(四八七六の2)

右ノ通、將監殿ヨリ寄々可申通被仰渡候間、其段為御

知申候、以上、

三月廿二日

御取次
高橋七郎右衛門

四八七七

写

一継目家督并養子嫡子成等被仰付候節、九歳以上ノ者ハ早速御礼ノ願無延引可申出候、八歳ヨリ以下ノ者ハ名代ヲ以家筋ノ進上物仕、御礼申出度旨願可申出候、右

ノ通、名代ニテ御礼申上候得ハ致成長重テ御礼願申出
不及候、且又若輩者共ハ一類共ヨリ右ノ通願可申出候、
此旨支配中へ不洩様可致通達候、以上、

四月

四八七九

内記

取次
讚良善介

右ノ通、与中へ不洩様ニ可被申渡者也、
子七月朔日
御家老座印

四八七八

写

丑二月十一日

御家老座印

一人家来・下人自分勝手ヲイタシ主人申付候不致奉公モ
主人為ニ成候儀モ無之召仕候節、勝手能儀ヲ申立断申
候ニ付無是非差免、別二人ヲ雇ニ重ノ物入モ有之由候、

四八八〇

写

下人ノ儀ハ主人召仕候タメノ儀ニ候処ニ我儘ノ申分仕
候儀不宜候、若左様ノ者有之候ハ、主人物入無之様ニ

此葉代定、享保十五戌十月改故朱ニテ直置也、
此葉代元文三年七月相改候、

其者ヨリ人代差立、主人用事相達候様可申付候、惣テ

一煎葉壹廻リニ付 木葉代新銀壹匁五分
三分五リ

末々ノ者自分勝手ヲ専ニ仕候ニ付、士不勝手成立候儀

一煉葉壹貝ニ付 代新銀三分五里七毛
四分三厘

ノミニ候、依之右ノ通被仰渡事ノ条其旨ヲ可存候、

一目葉壹貝ニ付 代同五分
壹匁三分

一下人持候テ罷仕候ハ、自他国勤被仰付候節、自分下人

一膏葉七付ニ付 代同壹匁五分
壹分五リ

不召列雇者イタシ召列候ハ、其料下人共ヨリ出シ候様

一粉葉七包ニ付 代同七分五里

ニ可仕候、

一丸葉五十粒ニ付 煎葉壹服代

一 振葉沓服二付 右同断

一 目洗葉沓包二付 右同断

一 針沓度二付 代新銀三分

馬葉

一 煎葉七服 代新銀五匁 四匁三分三里

但、沓服二付掛目五匁、

一 痛洗葉沓度二付 代新銀壹匁七里五毛 九分三里

但、掛目七匁五分、

一 目差葉沓服二付 代新銀貳分壹里四毛 沓分八里五毛

一 目洗葉沓服二付 右同断

一 膏葉沓付二付 右同断

一 付粉葉沓包二付 右同断 六分壹里八毛

一 四足并血上ケ煎葉沓煎分 代新銀七分壹里四毛 壹匁三分

一 悪爪付葉一七日分 代同壹匁五分

右ノ通、葉代被相改候間、不依御医師脇醫師ニ当月朔

日ヨリ御抱并諸人共ニ此節改ノ通可相払候、此段与中・

支配中諸外城・私領迄可致通達候、
藏人 丑十月

四八八一

写

一家ノ差図ヲ繪図卜唱、書付等ニモ記候様ニト此間申渡

置候得共、已前ノ通差図卜唱、書付等ニモ相記可申候、

此旨表方支配并地頭・領主へ可致通達候、以上、

丑十二月 藏人

四八八二

写

一 御精進日ニ申渡候事并不申渡事付テ段々被 仰出候事、

十日 十四日 十七日 十九日 晦日但、小ノ月ハ廿九日、

右御精進日ニ不申渡事、

一 御祝儀事并進上物ノ事、

一 御役人帳ニ有之程ノ御役被仰付事并御役替ノ事、

一 地頭職被仰付事并御繰替事、

一 重キ勤方被仰付事、

一 敷舞台ニテ申渡程ノ屹為致御褒美ノ事、

一 輕キ儀付テモ御咎目被仰付事、

一 首尾能方ニ無之御役替御免并御役替輕キ役人迄モ、

右御精進日ニ申渡候事、

右ノ通、此節被 仰出候、以上、

一 御役料被下事、

丑十二月廿六日

藏人

一 御心付ニ拝領物事、

一 自分依願被 仰出儀ヲ申渡候事、

四八八三

一 依願首尾克御役御免ノ事、

覚

一 輕キ役人役替ノ事、

一 腹当

一 御座ニテ申渡程ノ輕キ御褒美事、

但、染式寸幅白黒横筋、

八日 廿日 正月廿四日 十一月廿九日

右者、脇々へ御預ノ仕込御小荷駄馬腹当一統ニ右ノ通

右御精進日不申渡事、

染調、常々相用候様申渡候条、脇方ノ仕馬右最様ノ儀

一 御祝儀事并進上物、

者不及申、似寄ノ腹当ニテモ不相用候様可被申渡候、

一 輕キ儀共ニ御科メノ事、

若又右模様此内染調致所持候者モ有之候ハ、御厩方へ

右外ノ儀ハ何色ニテモ可申渡、

致持參得差図候様、是又可被申渡候、以上、

一 正月廿四日ハ正御忌日ニテ候間魚類進上仕間敷候、月

享保七寅三月廿三日

御厩別当

次廿四日ハ魚類進上不苦候、殺生等ノ儀ハ御免無之候、

一 御法度ヲ背候者、為御詮儀捕候者御精進日ニ無構、

四八八四

十二日

一 於江戸七月盆上野并増上寺へ諸家ヨリ被献候御灯炉、

一 右、毎月朝計御精進被遊候付、進上物ノ儀ハ魚類者差

頃日輕相調被献候付、大円寺 御先祖様方又者御当地

控可申候、

御寺方へ御進納有之候御灯炉モ、当年ヨリ色紙又ハ白

一 諸事申渡等御構無之候、

紙張ニテ以前ヨリ輕相調被差上筭候条、御家中ヨリ御

寺方へ御灯炉差上候面々モ有之候、其御灯炉モ鬼頭七

寸角ヲ限り随分輕相調可差上候、勿論自分先祖灯炉ハ

七寸角以下相調、猶以輕仕立可然候、志迄ノ儀ニ候処、

様子相替候灯炉又ハ作物杯イタシ、金銀ノ箔ヲモ用、

別テ手間相掛仕立候儀無益ノ費ニ候間、惣テ結構イタ

シ候儀無用可仕候、此旨所中エ可申渡者也、

五月廿八日

御家老座印

四八八六

覚

一 依科他所ヨリ移者ニ被仰付候者、

一 右同百姓・下人等ニ被下候者、

一 御預者并逼塞・遠慮其外惣テ慎被仰付置候者、

右一帳ニ相調、銘々腰書ニ科ノ訳并年号月日・取次人

ノ名委ク可相記候、

一 依科其所ヨリ他所へ移者又ハ百姓・下人等ニ被下候者、

右一帳ニ相調、銘々腰書ニ科ノ訳并年号月日・取次ノ

名委可相記候、

右ノ通、衆中・在郷・町浜・杜家・寺門前・中宿者ニ

至迄随分入念不洩様年々相改、八朔差出候高帳同前ニ

右ノ帳式冊相調糺明奉行方へ可差出旨、大御目付衆被

仰候、聊大形有之間敷候、以上、

卯正月四日

糺明奉行

四八八五

覚

一 御使者并輕使・飛脚通路ノ節、以後共一宿ノ所ニテ盜

人又ハ悪事等為有之候間、右宿ノ辺町中ヨリ夜廻又ハ

不寝番ニテモ見合次第申付、夜中毎度可相廻候、尤、

事々敷無之様可相心得候、此段可被申渡旨御差図ニテ

候、以上、

七月晦日

都城

役人中

谷山角太夫

其理申達可被罷通候、右ノ勤相濟被帰候時分ハ人体相応ノ心得ヲ以可有礼儀候、

右ノ通、兼テ被定置候間、御名代參被相動候面々々右ノ趣可申達置候、以上、

卯五月

久馬
取次

伊地知越右衛門

四八八八

一石塔ノ文字ニ箔ヲ込候得共、自今箔込候儀一切無用申付候条、此旨与中・地頭所・私領・支配中不洩様可致通達候、以上、

卯十二月

藏人
取次
讚良善助

四八八九

一元服・継目・家督等ノ屹立候事付テ進上ノ三種二荷・二種壹荷・天井折・馬代青銅ノ儀ハ有来通、右ノ外何ソ付テ進上ノ節ハ代銀四部一ノ上納申付候、一右三種二荷・二種壹荷進上ノ節、樽・台ハ御納戸、三

種二種ハ進物藏ヨリ借物ヲ以致進上候得共、此已後ハ樽・台ノ儀モ進物藏へ差置、借物申付候条、致進上候人ヨリ物奉行へ申出致借物、進上相濟候節、直二進物藏へ相調、其首尾物奉行へ可申出候、

一何ソ付寄合並以上ノ相中者進上物在之、右入目此跡ハ人数割ニテ相納候得共、以後ハ大小身ノ無差別高ノ割ヲ以上納申付候、

一何ソ付進上ノ御太刀ノ儀、以前ハ礼式太刀ヲ致進上候処、近年中太刀致進上候、当分中太刀有合候分ハ其通ニテ、向後ハ礼式太刀可致進上候、

一自分事付テ互ニ取カハシノ品随分輕可致候、尤、儉約ニ事寄礼儀不取失様可相心得候、右ノ通、組中不洩様可致通達候、

卯十二月

藏人
取次
讚良善助

四八九〇

一米穀直段下直候処、諸色ノ直段高直付諸人及難儀候、依之諸色直段引下候様ニト 公義仰渡ノ趣有之、其段

者先達テ申渡置候、右付テハ御物御払ノ品米直成相応ノ見合ヲ以此節直下ノ吟味被仰付事候条、諸商売物ノ儀モ買元仕入等迄委致沙汰、当分ノ米直段ニ応シ此程直成相改売出候様、猶又可申渡候、乍此上違背イタシ不依何色高直ニ致商売候者於有之ハ、仮令雖為少事買手ヨリ無遠慮其旨地頭・領主又ハ其所横目へ相付可申出候、左候ハ、屹可申付候、此段堅固相守候様可申渡者也、

辰閏四月十一日

御家老座印

四八九一

覚写

島津兵庫殿

島津周防殿

島津玄蕃殿

右中間・草履取刀差候儀無用可仕旨、先年 総州様被仰出置趣有之候処ニ何様ニ相心得候哉、間ニハ中間・草履取刀差候儀有之候由相聞得、別テ不宜儀ニ候、中間・草履取刀差候儀ハ於江戸モ此御方様ナラテハ外ニ

會テ無之事候、左様成訳ヲ以無用ノ筋為被仰渡置事候間、此旨ヲ存刀差候儀堅無用可申付候、

一家来共へ肩衣着用致サセ召仕ハ、此儀モ国持御大名ノ外ハ城主トテモ不罷成事候、左様成思召ヲ以 総州様御隠居被遊候已後、平日被召仕候者へハ肩衣御着セ不被成候処ニ、為倍臣(幣カ)家来共ニ平日肩衣着用致サセ召仕、且亦中間・草履取エ刀差七候儀ハ絶テ無用ノ事候処ニ、大身分ハ平日家来共ニ肩衣着セ召仕候、且又中間・草履取刀差七候儀、不苦事ト無案内故心得違ニテ可有之候得共、我儘ノ仕形ニ相見得候間堅無用可仕候、右ノ趣、御物数寄ヲ以被 仰出儀ニテハ無之候条、得ト可奉得其意旨可申渡候、已上、

辰閏四月

四八九二

一御名代被相動候面々、正月廿七日ヨリ内御名代ノ節ハ家来共上下着用可為致候、其外ノ御名代ノ節ハ袴計着用候様可被申付候、

一女中ヨリ家来使ヲ以御祝儀申上候節ハ銘々ノ通上下着

用可為致候、

一 寄合並以上ノ役人御用ニ付御役座へ罷出候節、袴計着用可為致候、

一 八朔家ニ付家来ヲ以御太刀進上ノ節、長上下致着用來候得共、自今ハ半上下着用可為致候、

一 八朔馬進上ノ節、中間上下致着用來候得共、自今ハ上下無用可致候、尤、馬宰領ノ家来相付罷出事候ハ、其者ハ上下可為致着候、

一 八朔諸地頭ヨリ中紙進上ノ節、家来上下致着候、此儀ハ有來通上下可為致着用候、

一 私領役ノ者、諸外城役人同前誓詞申付事ニ、且又私領杯外ノ家来共諸御役座へ相繰、御用相勤候者モ誓詞申付事ニ候、其節ハ上下致着用候得共、自今ハ平日鑓持セ、役々ノ家来ハ致誓詞候砌上下致着用、其外ノ家来ハ袴計着用可致サセ候、

一家来共ノ内役人并取次番其外ノ者、月並礼日ニ肩衣致着候所モ有之候間、向後無用可致候、家来共へ肩衣着七候儀ニ付テハ先々段々被仰渡置趣有之候間、其旨ヲ堅固ニ可相守候、

一 中間・草履取ニ刀差七候儀無用可仕旨、先年被仰渡置

趣有之候処ニ、何様ニ相心得候哉、間ニハ中間・草履取ニ刀差七候モ有之由相聞得、別テ不宜候間、此旨ヲ

役中間何時ニテモ馬ヲ率候節、且又草履取供ニ召列候砌、刀指七候儀堅無用可致候、仮足輕ニ馬引七候儀在

之候共刀ハ無用可致候、乍然他國又ハ往來御領内ニテモ田舎へ差越候節、中途ノ儀ハ刀指セ、於其所中間・草履取ノ勤致候節ハ脇指迄ハ差セ可召列候、尤、余事

ニ召仕候節、刀差七候儀ハ其通可有之候、右ノ通、此節被相定候条、得其意候様ニ与中へ可被申渡者也、

辰五月十一日 御家老座印

四八九三

一 諸御役人ノ内大身ノ者、所へ參候テ料理ナト被下候由相聞得候、此段ハ不宜事候間、向後右体ノ儀無之様、表方支配ノ御役人へ可致通達候、以上、

辰七月 柰

覚写

一 八朔御太刀・御馬進上仕来候家々、此跡進上ノ場所段々

相替候、今度年頭御札着座、思召ヲ以一統被仰付候

付テハ八朔進上物ノ儀モ年頭御札着座ノ御格式準、左

ノ通被仰付候、

御対面所 御太刀進上廊下ノ敷居ヨリ二枚目頭

一 御太刀一腰 島津兵庫殿

一 御馬一疋

直馬屏子門ノ内ニテ請取渡可仕候、

一 右同断 島津玄蕃殿

一 右同断 島津左衛門

一 右同断 島津周防殿

一 御太刀一腰 川上一学

一 御馬一疋

一 右同断 島津中務殿

一 右同断 島津内膳殿

一 御太刀一腰 島津図書

一 御馬一疋

直馬屏子門ノ内ニテ受取渡可仕候、

右中務殿・内膳殿・図書家同格ニテ、此以前ハ三家共

別御座ニライテ御太刀進上有之候故、三年代リノ差別

無之候、此節一列ニ被仰付ニ付テハ今度被相定候年頭

御札着座ノ御格式ニ準、御役無役ヲ以中務殿・内膳殿・

図書殿下次第被仰付候、図書事中務殿・内膳殿同格ノ

御役ヲモ相勤事ニ候ハ、図書頭ニ被仰付筋ニモ可有

之候得共、当分其身ノ格式ヲ以右ノ次第被仰付候、至

後年八年頭御札着座ニ付、先達テ被 仰出置候御書付

ノ趣ヲ以相シラヘ可申候、

一 御太刀一腰 島津空

一 御馬一疋

一 右同断 島津将監殿

一 右同断 島津助之丞

右将監殿・助之丞家同格ニテ、此已前御太刀進上隔年

前後有之候、今度被相定候年頭御札着座ノ御格式準、

将監殿御役ノ内者頭ニ御太刀進上被仰付候、至後年年

頭御札着座ノ通、同格ノ家者其身御役ノ順、無役ノ者

八年生ヲ以前後ノ沙汰可致候、

一 右同断
新納菊千代(時增)

右者、此以前虎ノ間ニテ御太刀進上仕候、此節一列ニ

被仰付候付テ八年頭御礼着座同前、三年ニ一度島津李

家ノ次ニテ御太刀進上被仰付候、右ノ外ハ此席ニテ御

太刀進上可仕候、

一 右同断
樺山主計(久初)

一 右同断
島津筑後(久應)

直馬屏子門ノ内ニテ請取渡可仕候、

右ノ兩家、此已前ヨリ御太刀進上隔年前後有之候得共、

此儀年頭御礼着座ニ不相並候間、右ノ次第被仰付候、

一 御太刀一腰
桂太七郎(久音)

一 御馬一疋
喜入主膳(久茂)

一 右同断
町田郷九郎

一 右同断
伊集院藏人殿

一 右同断
島津帶刀(久名)

一 右同断
島津内記

右帶刀・内記家同格ニテ、此已前御太刀進上隔年前後

有之候、年頭御礼着座ノ御格準、帶刀御役内者頭ニ被

仰付候、後年ノ儀ハ前条同格ノ家ニ同断、

一 右同断
北郷四郎

直馬屏子門ノ内ニテ受取渡可仕候、

一 御太刀一腰
島津權太夫

一 御馬一疋

一 右同断
大野七郎太夫(久矩)

一 右同断
吉利李右衛門(久種)

右七郎太夫・李右衛門家同格ニテ、此已前御太刀進上

隔年前後有之候、年頭御礼着座ノ御格準、七郎太夫御

役ノ内者頭ニ被仰付候、後年ノ儀ハ前条同格ノ家同断、

一 右同断
種子島彈正殿

直馬屏子門ノ内ニテ請取渡可仕候、

右者、此以前虎ノ間ニテ別立テ御太刀進上有之候得共、

年頭御礼着座ノ次第ヲ以此一列ニ被仰付候、

一 御太刀一腰
島津仁十郎殿(久種)

一 御馬一疋
顯娃(久近)長左衛門(清方)

一 右同断
柢寝内記(清方)

一 右同断
入来院主馬殿(重想)

右ノ両家、此以前ヨリ御太刀進上隔年前後有之候、此

儀年頭御札着座ニ不相並候間、右ノ次第被仰付候、

一右同断 比志鳥隼人殿(龜房)

一右同断 肝付典膳

一右同断 菱刈孫兵衛(重之)

一右同断 諏訪甚六

一右同断 河田助右衛門(國應)

右惣人数、此已前御太刀并直馬進上ノ場所段々相替候、

年頭御札着座ノ次第準、向後於御対面所右ノ次第御太

刀進上仕、直馬進上ノ人数モ惣テ屏子門ノ内ニテ右ノ

次第被仰付候、

菊ノ間 御太刀進上ノ廊下ノ敷居ヨリ二枚目頭

一御太刀一腰 島津大藏殿(久卷)

一御馬一疋

一右同断 島津頼母殿(久起)

一右同断 島津求馬殿(久房)

一右同断 島津市太夫殿(久龜)

一右同断 島津内藏(久敷)

一右同断 伊集院半太夫

一右同断 島山式部殿(正純)

一右同断 鎌田小藤次(貞起)

一右同断 伊勢兵部

右人数、此以前ヨリ於菊ノ間御太刀進上仕候、年頭御

札着座於御書院被仰付事候得ハ、御対面所ニ被召出候

人数ト一列ニハ難被仰付候条、以前ノ通菊ノ間ニテ御

太刀進上被仰付候、

虎ノ間ノ事 御太刀進上ノ席中敷居ヨリ二枚目頭

御広間 中紙進上ノ席下敷居ヨリ二枚目頭

一御太刀一腰 名越右膳殿(恒應)

一右同断 義岡右京殿(久守)

一右同断 島津彦太夫(久重)

一右同断 平岡八郎太夫(之助)

一右同断 島津登(久應)

一右同断 二階堂舎人(行應)

一右人数、中紙進上仕来候得共、大御目付以上御役ノ儀

ハ格別ノ儀候条、諸地頭持同前中紙進上仕候儀、御役

付テ不相応ニ候、依之此節ヨリ右ノ人数御役ノ内ハ御

太刀進上被仰付候、此已後一所持・一所持格外ノ者大

御目付以上ノ御役被仰付候節ハ、家筋無構御役ノ内ハ
御太刀進上可被仰付候、

一御太刀一腰
川上縫殿(久徳)

一御馬一疋

右、此以前ヨリ杉ノ間ニテ御太刀進上仕候、向後此席
被仰付候、

一中紙三束ツ、
新納次郎(久通)四郎

桂仁治(久徳)太郎

新納右衛門

町田宇右衛門(久老)

伊集院十蔵

山田新助(有徳)

一右六人、地頭職ニテ無之候テモ八朔中紙進上可仕旨被

仰付置候所、次第ヲ以此席ニテ中紙進上被仰付候、

一中紙三束ツ、
諸地頭

右御役ノ次第ヲ以前ノ通八朔中紙進上被仰付候、

右ハ、今度年頭御礼着座、思召ヲ以一統ニ被仰付候

付テ八朔進上物ノ儀モ年頭ノ御格式ニ準、右ノ通被仰

付候条、向後右ノ次第可仕候、勿論同格ノ家前後ノ沙

汰付テハ右 仰出ノ通時々相替咎候、

右ノ通、此節被相定被 仰出候付申渡候間、来ル八朔

御太刀・御馬進上ノ儀、右 仰出ノ趣ニ無間違様可被

申渡置候、以上、

辰七月

空

四八九五

写

島津兵庫殿

島津周防殿

島津玄蕃殿

島津左衛門

島津筑後

島津図書

右中抑

用頼へ

御光儀ノ節、内証へ相頼候者ノ内、御用人ノ外月並御礼

ニ罷出候御役人有之候ハ、向後御通ニ罷出不及候、尤、

無役ノ内新御番以上ノ者又ハ家付テ由緒有之者ノ儀ハ御

役人ニテモ有来通 御目見可被仰付候、尤、御付人中抑・用頼ノ儀ハ可罷出候、

右ノ通、自今被仰付候条、此旨可被致承知置旨可申渡候、以上、

辰八月

藏人
御取次
土持十右衛門

四八九六(の1)

写

壹万石以上ノ人并寄合以上其外ノ面々、年頭又者屹立候折目ノ供廻多過候、依之来年頭始自今屹立候折目ニテモ若党召列候儀、左ノ通被相定候、

一 壹万石以上、先供・馬廻リ都合十人、

一 右同以下、大身分・大目付以上ノ御役人、右同七人、

一 独礼ノ格并大身分ノ嫡子、右同五六人、

一 与頭・御番頭以上ノ御役人、右同四人、先供無用、

一 御用人已下、平日鑓持セ候御役人、右同三人或式人、

一 平日鑓不為持者ハ御役人ニテモ右同式人或壹人、

一 大身分ノ外ハ一所持・寄合並ニテモ、無役ノ者ハ、千

石以下ハ右同式人或ハ壹人、千石已上ハ三人迄ハ不苦候、

一 小番・大番、無役ノ者ハ右同壹人、右格ニテモ御役人ハ式人迄ハ不苦候、

右ノ通被相定候、當時ノ儀者 公義ヨリモ供廻等ノ儀惣テ御減少ノ時節ニテ、此旨存右供定候上、若党相重

召列候事堅無用候、勿論右供定候人数ヨリ減候テ召列候儀ハ勝手次第モ、御役人ノ内与力有之候者ハ右若党

ノ外ニ可召列候、尤、兼テ被仰渡置候通年頭ノ外家来エ上下着セ、供ニ召列候事無用可仕候、此旨不洩様可

致通達候、

(享保九年) 十二月

(伊樂院入廻) 藏人

(四八九六の2)

右ノ通被仰渡候間致通達候、以上、

辰十二月二日

左近(尤)充与太夫

四八九七

写

一 御家中大身・小身共、御奉公モ難勤病身又ハ老体ニテ

隠居ノ願モ不申出罷居候者多ク有之、頃日為御知ノ上願申出候者共モ多ク候、御奉公モ不仕老人罷成、右ノ願不申出儀ハ不氣付ト相見得候、致隠居候テモ其分限ニヨリ輕ク可致処、小身ノ者ニモ家督ノ厄害ニナリ、(吉忠) 隠居料多ク取候者モ有之候、(吉忠) 繪州様御隠居被遊候御様子ヲ輕キ者迄モ了簡仕、諸事致輕候様御沙汰モ有之候、

右、屹不及申渡ニハ、与中工寄々可致通達候、

享保十巳九月十日

藏人

篠崎八右衛門

四八九八

写

一 葵御紋ノ儀、公義仰渡ノ趣ニ付テ、衣類ハ勿論諸道具等ニ至迄男女共付申間敷旨被仰渡、十文字ノ儀者少ニテモ似寄候紋所付申間敷旨、先年段々被仰渡置趣有之候間、弥其旨ヲ相守可申候、右被仰渡置候趣付テハ女童以下ニ至迄、カネ又ハ鯨ノヒレ類ニテ葵・十文字ヲスカシ蒔絵紋ナトニモイタシ候カウカイ(辨)着用候儀モ

有之不宜候条、向後右両御紋所カウカイニスカシ以下ノ者ニ至迄用候儀モ無用可仕候、只今迄持来候テモ用申間敷候、右付テハ細工人作出候儀且又上方筋ヨリ売人共買下候儀、向後無用可仕旨申渡候条得其意、違背不仕様与中・地頭所・私領并明所ノ外城八月番御用人ヨリ不洩様可致通達候、以上、

巳十月十四日

中務

加治木仮屋守

花岡仮屋守

島津玄蕃殿中抑

島津左衛門跡中抑

島津筑後中抑

右ノ外御人数余多有、

四八九九

一出火 一変死

右披露ハ地頭・領主承届、衆中ハ表方、浦浜百姓ハ御勝手方へ被差出候、末々ノ支配分ヲ以被申出候得共、自今出火・変死ノ披露者都テ表方へ可被差出候、

一大風洪水ノ損失ハ早速諸所嘸・役人共ヨリ直ニ御勝手方へ申出事候処ニ、間ニハ地頭へ申出、地頭ヨリ被差出所モ有之候得共、向後地頭方ニ申出ニ不及候間、以序右ノ段可被申渡置候、

一諸所ヨリ飢米・拝借米等ノ願申出候節、衆中ハ表方へ被申出候得共、向後銀米拝借地方・山方其外何方ニテモ懸リノ儀ハ都テ御勝手方へ可被申出候、
右ノ通、地頭所・私領へ可被申渡旨、(種子島久基)彈正殿御差函ニテ候、以上、

享保十二未九月廿八日 宮之原(重行)甚太夫

四九〇〇

諸人墓石并葬礼、頃日段々結構相調、分限不相応ニ相見得候故、向後左ノ通相定候、

一石塔壹通 地上五尺五寸

但、石形ハ望次第、結構ノ模様等ハ望有之候共彫付

申間敷候、

代銀百四匁

右、寄合並以上、

一同壹通 地上四尺

但書右同、

代銀拾六匁(二脱之)

(次三行、卷之三十二) 一同一通 地上三尺五寸(二三四一の号文書より補)

但書右同、

代銀十五匁

右、諸士

一同壹通 地上三尺

代銀拾貳匁五分

右、諸士以下末々迄、

一井垣ハ一間ニ付代銀三拾目程ニテ相調事ノ由候間、寄合並以上ノ人ヨリ頼来候ハ、右直段ニテ可相調候、夫ヨリ以下ニ石塔ニ井垣イタシ儀(候脱之)無用申付候間、何方ヨリ頼来候共右ノ段申達、石切不請付様申渡候、

一四尺五寸 土台棺一通

但、厨屋四方門垣迄、

代銀貳百四拾目

右、寄合並以上、

一三尺五寸 土台棺一通

代銀四拾六匁

代銀式拾四匁

但、紙ニテ調候所ヲ木綿・芭蕉ニテ相調、又ハ花籠

等相付候故、直段両様有之事候由、

右、諸士、

一三尺五寸 土台棺一通

代銀十四匁

一三尺 土台棺一通

代銀十匁

右、諸士以下末々迄、

右ノ通、此節相定候、右ノ定ヨリハ輕キ方ニ頼来候ハ、

格別ニ候、定ヨリ高直石塔棺望何方ヨリ頼来候共、曾

テ不受合様ニ石切并棺屋共へ可申渡置候、若致違背候

ハ、其沙汰可申付旨申渡置候間、与中末々迄此旨承知

仕置候様、寄々可致通達候、以上、

(享保十二年)
未十月

彈正
取次

宮之原甚太夫

四九〇一

写

起請文前書

一 忠義疎意奉存間敷候、挟悪心不忠ノ志ノ輩、且又御仕

置ノ御心得ニ可罷成儀ハ見聞ノ趣不依何角言上可仕候

事、

一 勤方付テ被仰渡候趣相守可申事、

一 御仕置ヲ相背輩ハ雖為親類・縁者無蟲負偏頗可申上候、

毛頭用捨仕間敷候事、

一 口事沙汰并喧嘩口論、其外可申上儀慥承届候得ハ延引

罷成候条、其場ノ様子又ハ脇々風聞承付次第実不実共

ニ早速速披露、慥成儀ハ承届追テ可申上候、傍輩中ノ

批判ヲハ、カリ大形仕間敷候事、

一 依私ノ遺恨其人ノ上申掠儀曾テ仕間敷候、且又当役儀

付邪儀私欲ヲ以ハ諸人ヨリ取入儀候間、賄賂ノ進物受

用仕間敷候事、

右条々於相背者、

右者、私領横目ノ儀、領主方ニテ誓詞被為致事候間、

右ノ通前書相調可被為致誓詞候、此段可致通達旨、

(島津忠行)
彦太夫殿被仰候、以上、

享保十三申七月廿七日

取次
左近允与太夫

四九〇二(の1)

前々ヨリ
浦々高札

忠孝ヲ
ハケマシ

伴天連并
切支丹

公義ノ
船ハ不及
申

浦々ニ於
イテ船ヲ
借り候

毒薬并
似セ薬種

キリシタ
ン宗門

捨馬ノ
儀付

質地取
候者

右従
公儀

異国船并
拔荷ヲ
買取候

駄賃馬
壹疋

浦町・岡町ニヨリ御高札ノ多少者可有之候得共、駄賃御
定御高札ハ御副札ノ下又ハ末ニ相掛候様可心得候、

戌八月二日

(四九〇二の2)

諸外城御高札掛様不相並所モ有之候付、別紙絵図ノ通掛
置可申候、只今掛置候御高札右絵図ニ相違ノ外城モ有之
候ハ、早速掛改可申候、以後御高札掛替等ノ節、不致混
乱様ニ可仕候、尤、別紙絵図銘々書写置可申候、

右ノ通可申渡旨、大御目付衆被仰候、以上、

享保十五戌八月二日

御目付

四九〇三

御当地ニテモ草履取・鏈持中間黒染毛次着用致サセ来候得共、何レモ無勝手ノ時節ニ候間、自今以後ノ儀ハ屹御出ノ節御供相勤者ノ草履取・鏈持中間迄モ何色染ニテモ着用致サセ候様可相心得候、他所ニテハ各別ノ事候間、以前ノ通黒染着用可仕候、此旨可致通達候、

戌十月三日

左

取次
諏訪仲右衛門

四九〇四

一 近年ハ高・屋敷ヲモ致所持、相応ノ致渡世候者私欲ヲ以不謂仕形付、其身家迄モ禿候者多々有之、前方ニ相替リ風儀不宜者モ有之、且又頃日意趣ノ訳モ不相分傍輩ヲ打果差殺ナト致候儀度々有之、相手切腹サヘ致候得ハ事濟候様ニ存候体ニ相見得、旁以不可然事候、喧嘩口論令停止、理不尽ニ事ヲ不致様ニト兼テ被仰渡置

儀ニ候処、輕儀ヲ諍論ノ上及喧嘩ノ儀、別テ不宜事ニ候条、短慮ノ働無之随分致堪忍、可遂披露儀モ候ハ、

其訳於申出者可及沙汰候、過半者故モナク致参会候所ヨリ何角ト事起リ、無礼法外ノ仕形有之筋ニ相間得候、右付テハ此已後喧嘩ノ訳ヨツテハ、其当人ハ勿論親又ハ子共・親類ニ至迄御咎目屹可被仰付候、士ノ儀ハ御奉公ヲ專ニ心懸可罷在儀ニ候処ニ、不謂儀共ニ身命ヲ相果、本意ヲ取失候様ニ有之、至極了簡違ノ事候条、与中ノ面々兼テ被仰渡置候御条目ノ旨ヲ相守、実体ニ相交其外風儀等宜猶以可心懸候、

右ノ通被 仰出候間、与中ノ面々ハ屹可被申渡者也、

亥七月

四九〇五

一 自今以後致喧嘩候者及切腹候節、喧嘩ノ次第意趣親類共得ト聞届、横目ヘモ申遣、意趣其場ノ次第横目ヘ申聞置可為致切腹候、若大形ノ儀有之候ハ、親類共可為越度候条、此段可申渡置旨被仰付候、

但、地頭所支配有之面々ハ地頭所・支配中ヘモ可被

申渡候、

亥十二月

内匠

彈正

藏人

左

大藏

四九〇六

写

一致隠居候者其分限ヨリ輕ク可致処ニ、小身ノ者ニモ家督ノ厄害成候テ隠居料多取候者モ有之候間、致輕候様可有之旨御沙汰ノ趣、享保十年巳九月致通達置候、隠居料多取候テモ子共ヨリ減少ノ筋ニハ難致答候間、親類共ヨリ右通無之様可致助言候、自然大形ノ儀有之候ハ、親類共へ不念ノ御咎目可有之儀候、知行高二不限合力坏受候儀モ家督ノ障ニ不成様可相心得候、右、屹申渡ニハ不及、与中・支配中へ寄々可致通達候、以上、

但、御側方・御勝手方へモ可相達候、

享保十七子六月十七日

(島津入貢)
中務

取次 (入忠)
島津右平太

四九〇七(の1)

写

高岡 勝岡 山之口 都城

志布志 松山 末吉

右地頭并島津筑後中抑へ

他領境ノ儀、別テノ入御念事候故、兼々被仰渡趣有之候、就中諸稼等ニ付テ他領ノ山野へ踏入候儀、猶以御禁止ノ事候間、右体ノ儀兼テ無之様ニ可被申付候、

右ノ通申渡、山之口・梶山在番人エモ可被申越候、以上、

十月

大藏

(四九〇七の2)

右ノ通被仰渡候間被得其意、早々可被申渡候旨御差図ニテ候、以上、

子十月十九日

島津右平太

四九〇八

一 鹿兒島問屋根帳付ノ旅人致病死候節ハ町奉行致首尾事候、鹿兒島根帳外ノ旅人致病死候節、遂披露候次第地頭所又ハ町奉行・御船奉行工申出、不相弁候付、向後右体ノ旅人何方ニテモ致病死候節、一統町奉行首尾申付候条、病死ノ節ハ問屋并旅人宿ヨリ所横目其外役々工申出、病死無別条候ハ、取置、諸証文等取揃横目并嘸・役人奥書ヲ以町奉行所工可申出候、尤、變死等ノ節ハ先年申渡置候通可被相心得候、

但、旅人致病死候節ハ諸証文案紙此節町奉行ヨリ相渡候、

右ノ通申付候条、諸地頭・領主・明所ノ外城八月番御用人工不洩様可申渡候、以上、

取次
丑二月 伊集院十藏

四九〇九

一 御前工差上候書付ニ誰奥又ハ内妻ト書付差上来候、向後ハ夫婦ノ内於 御前殿ノ字唱候妻ヲ内ト書付、其外者誰ニテモ妻ト書付可差上候、此段御勝手方へ相達、

御役人限可致通達候、以上、

享保十九寅正月

(權山久初)
主計

四九一〇

写

御勝手方ハウ 異国方ハウ 寺社奉行所トコロ

御番頭詰所トコロ 御近習役所シヨ 御使番役所シヨ

高奉行所シヨ 御目付役所シヨ 郡方カタ

金山方ハウ 屋久島方ハウ 代官所シヨ

御書院方カタ

右ノ通、唱・書付等ニモ致候様被仰付候、其外者此内ノ通相心得候様被仰付候条、此旨表方へ致通達、御側方・御勝手方へモ写ヲ以可相達候、以上、

享保廿卯七月 (島津久純)
大藏

四九一一

写

大御目付以上ノ御役被仰付候節、鹿兒島ハ勿論外城迄モ同名ノ者致名替事候、然共以後大御目付御役ノ儀者同名

有之候共名替致不及、支配下ノ者ハ名替可致候、

右ノ通被仰付候条、御役人并地頭・領主へ不洩様致通達、

御側方・御勝手方へハ写ヲ以可相達候、以上、

卯七月

大藏

四九一三

写

諸士高相求高相直申出候者、拝借取込等有之候テモ高直御免被成候得共、向後拝借取込等有之、皆返上不相濟内

者高直御免被成間敷候、此外ノ儀ハ有来御法ノ通被仰付

置候、

四九二一

写

一所持并諸地頭へ申渡覚

外城工諸奉公人差廻候節、何程輕品進物并馳走ケ間

敷儀、惣テ所中造作成儀致間敷旨、先年申渡置候趣有之

候条、弥其旨可相守候、早朝ヨリ遠所ヲ掛終日相勤候節

ハ輕キ昼飯可出旨、是又申渡置候得共、向後昼飯差留候、

若緩セノ儀有之候ハ、其所役人共可為越度候条、此旨可

申渡候、役人替合ノ節ハ堅固可次渡候、

右ノ通致通達候、以上、

卯八月

四郎太夫

彈正

左

大藏

四九一四

写

一於諸座御用筋相認候書付、文字ヨメカネ候儀モ間々有

之候、書付ノ儀者畢竟御用筋ノ旨趣相分候儀肝要ノ事

候処ニ、字画不相分読兼候テハ向々ニテ御用筋不相達

滯儀ニ候、急成書付等相認候節ハ、文字入念候儀ハ不

罷成積候得共、可成程ハ字画相分候様氣ヲ付書付可相

認候、此旨御側方・御勝手方支配ノ座々へ不洩様可申

渡候、以上、

卯十一月

左
(享保二十年)
(島津久憲)

四九一五

写

一 諸座ヨリ江戸・京・大坂エ問合ノ書付、文字大キク無
之様可書調候、文字大ク行ノ間遠ク候テハ卷タケモ大
キク、荷高二モ相成筈候間、字細ク行ノ間ニ朱書ヲ書
込候程ニ行ヲ置、行ノ間近ク書調可申候、

右ノ通、向後相心得、於御当地諸座問合ノ書付等モ都
テ右ノ通相心得候様、可承座々へ可申渡候、尤、京大
坂エモ右ノ趣可申越候、以上、

(享保二十一年
卯十一月)

空

四九一六

写

一 御番人ノ儀、前年八月ヨリ翌年七月迄ノ間、一日ニテ
モ御番相勤候ハ小普請銀不相懸候得共、向後八月ノ割
被相定、御番相勤候月計小普請銀御免ニテ、一日ニテ
モ不相勤月ハ小普請銀可相懸候、尤、病氣ノ節ハ御医
師証文前々ノ通差出、星合不明様可仕候、

一 嫡子定役ノ御奉公相勤候テモ御役料等被下置候ハ、

家督ノ高役二者罷成間敷候、尤、地下・旅江戸詰杯ノ

御奉公相勤候テモ御賦其外出物方御物ヨリ被下物有之
候得ハ家督ノ高役ニ罷成候故、小普請銀可相懸候、

一二男三男其外家内札ノ者、地下・旅何御奉公相勤候テ
モ家督ノ高役ニハ罷成候故、小普請銀可相懸候、
右ノ通、当年ヨリ小普請銀御格式被相定候間、此段可

被致通達旨御家老与并組頭エ可致通達候、以上、

但、外城ノ儀モ当年ヨリ右ノ通申付候間、諸地頭へ
可被致通達候、

卯十月廿六日

空

四九一七

写

一大身分ノ格ニテ一万石以下ノ人ハ九千式三百石迄高上
リ御免可被成候間、九千石ニ不及内八百石、千石ニ及
候節ハ前以高上リノ願申出不及、高直可申渡候、九千
石及節ハ御法ノ通願可申出候、

一一所持ハ七千石、一所持格ハ五千石、寄合ハ三千石、

寄合並ハ式千石迄高上リ御免被成候間、右定ノ高二不

及内ハ百石千石ニ及候節々、前以高上リ願申出不及、高直可申渡候、右定ノ高二及候節ハ御法ノ通願可申出候、

但、何千石ト限リ御免ノ事ニハ候得共、高直ノ節少々余計有之、差支儀モ候ハ、御定ノ高ヲ越候共、百石ノ内ハ御免ノ内ニ相加、高可相直候、

一 右定ノ上高上リノ儀、為差立故有之候ハ、各別ニテ候間、願可申出候、左候ハ、其節ノ勤方人ニヨリ御加増ノ思召ヲ以、高上リ被成御免儀モ可有之候、何ソ故モ無之願迄ニテハ御免被成間敷候、

一 寄合並ニテ無之者ハ、千石以上ニハ高上リ御免無之候得共、寺社奉行・御勘定奉行・組頭・御番頭杯被仰付候者、御役ノ内勤方人ニヨリ御加増ノ思召ヲ以、千石迄ノ高上リ御免被成儀ハ品ニヨリ可有之候間、無抛訳有之候ハ、願可申出候、尤、千石ヨリ内ハ百石ノ節モ前以高上リノ願申出不及、高直可申渡候、

但、千石迄高上リ御免被成候人有之、高直ノ節少々余計モ有之、差支儀モ候ハ、千石ヲ越候テモ百石ノ内ハ御免ノ内ニ相加、高可相直候、

一 右定ヨリ上ノ高當時持来候ハ各別ニ候、持来候者モ其上ノ高上リハ願迄ニテハ御免被成間敷候、勤方人ニヨリ御免被成儀モ可有之候間、無抛訳有之候ハ、願可申出候、私領并持切名仕明高ハ各別ニ候間、定ノ上高上リ候共、前以願申出不及候、右ノ增高ハ持高二可相加候、

右ノ通、此節被相定候間、寄合並以上ノ人工可致通達候、以上、

享保廿一辰二月

(鳥津久兼)
全

四九一八

写

一 御代參被相勤候面々、中途礼儀ナシニ御名代勤ノ由相断被罷通候、御代參勤付テ中途ノ礼儀付川上久馬ヨリ申渡置候趣有之候得共、御代參ノ儀ハ御靈前ノ勤ニ候間、座席等ノ儀ハ当分ノ通ニテ、中途又ハ座敷ニテ礼儀ノ儀ハ平日ノ通可被致候、

右可申渡候、以上、

元文元年辰九月

(鳥津久兼)
主殿

四九一九

写

一 本田大和

諏方ノ神号、方・訪ノ文字両様有之、御当地ニテハ難被決、諏訪(里林)因幡守様御方へ被相尋候処ニ、諏方明神ノ唱ニ八方ノ字書来候旨申来候間、神号ハ以来共ニ方ノ字用可申候、
右ノ通可被申渡旨可申渡候、

元文二巳二月

主殿

四九二〇

垂水・加治木・花岡・都城
飯屋守

右ノ通唱来候得共、向後留主居ト相唱、書付等ニモ其通可致候、

右ノ通申渡、可承役々へモ可申渡候、以上、

巳四月

主計

四九二一

垂水飯屋・加治木飯屋・花岡飯屋・庄内飯屋ト唱来、家来ノ内飯屋守ト唱候役名有之候、下屋敷杯ハ家作致置候ヲ飯屋トハ唱候、右四ヶ所ハ何某屋敷トテ唱事候、飯屋守ノ役名、此節留主居ト可改旨申渡有之候間、向後飯屋守又ハ飯屋トハ唱間敷候、
右ノ段、御目付ヲ以御役人限ニ相達、寄々申通様ニ可致候、以上、

(元文二年)
巳四月十七日

(榊山久初)
主計

四九二二

写

一外城衆中・家来其外末々ノ者共、無調法有之御咎目被仰付候節、嘸・役人其外ノ者共へモ大形有之御咎目被仰付候砌、入目致無調法候者ヨリ取賄候所モ有之由候、畢竟嘸其外ノ者共モ大形有之御咎目被仰付事候処、右ノ次第不相応候、向後右体ノ御咎目等被仰付候節、入目銘々自分相弁、無調法仕候者ヨリ曾テ取賄不申様、地頭・領主ヨリ堅可申付候、

右ノ通、地頭・領主・月番御用人へ可申渡候、

巳五月

主計
主殿

四九二三

一 參勤交代其外道中往来ノ節、本陣ニテ被相定候旅込錢等、タトエハ百錢トテ究ノ内ヲ於下陣ハ引錢ト申、三拾錢或ハ四拾錢程ツ、減渡候付、旅籠屋共承引不致候得ハ脇宿へ替可申ナト申掛、其支度費ニ成候故無是非引ケヲ立請取、旅籠屋共致迷惑候由相聞得候、畢竟末々ノ者イタシ候事被存候、自今右体ノ儀無之様、道中被召連候末々ノモノ迄急度可被申付候、

右ノ通、今度從 公義被仰渡候間、此旨与中・支配中・

地頭所・私領・明所ノ外城へ可致通達候、以上、

(元文二年)
巳九月

(島津久實)
主殿

四九二四

写

町奉行へ

一 於御領国廻国旅人相煩帰国難叶モノハ、御城下ノ儀者

有来通問屋共致養生、廿日已後ハ右入用等相応ニ可申

付候、諸外城ノ儀ハ相煩候当日ヨリ養生料可申付候間、

医師・横目見分ノ上所役人ヨリ地頭・領主へ相付、町

奉行へ可申出候、和人参等不用候テ不叶節ハ横目証文

ヲ以可申出候、

右ノ通、町奉行ヨリ地頭・領主へ相達候様可申渡候、

已上、

巳九月

主計

四九二五

写

一 入道号ノ儀、高位ノ人ノ外ハ相用間敷候事ニ候、当分

ハ猶以遠慮仕筈ノ処、石塔類ニ入道ト相記候事間々有

之候条、向後堅可為無用候、享保十七年以来石塔其外

ニモ記置候入道号ハ可消除候、

右、如例可致通達候、以上、

巳十二月

主計

四九二六

写

一 異国船御手当ノ儀ハ前々ヨリ被定置候趣有之、此跡モ御シラヘ有之、此節又々御シラヘノ上委細別紙ノ通被仰渡候、右ノ次第ニテ新敷被仰渡御手当ニテハ曾テ無之候間、末々迄モ取違無之様可被相心得候、
右可申渡候、以上、

元文三年正月

主殿

四九二七

写

一万石以上ハ馬代現銀壹枚、
一五千石ヨリ九千石迄ハ馬代銀拾式匁、
一五千石以下ハ馬代銀六匁、
右ノ通、向後年頭・八朔進上被仰付候、其外身ニ付家筋付テ御札等申上候節、進上馬代銀員數ノ儀ハ被定置候通進上可有之候、此旨表方ヘモ可相達候、已上、

午正月

大藏

島津左衛門

島津筑後

右名代中抑

四九二八

一 異国船御手当付テ、御領内惣人数、大身分・御家老ヲ始組中ノ面々、惣手ノ相印、前立物三寸五部ノ角角落シ、金ミカキ黒漆、一文字書紙形ノ通、

但、脇立物ハ面々好次第、

一 笠印・袖印・腰印、地白、幅六寸、長八寸四部、上二ツ引、下山道一筋、中紋所、

但、二ツ引山道紋所、紺染出、地合何ニテモ不苦候、

一指物者六組ニテ色替被相定候、一番与白地ニ紺染出ノ紋、二番紺地ニ白紋、三番梅地ニ紺染出紋、四番浅黄地ニ梅色染出ノ紋、五番トキ地ニ紺染出ノ紋、六番白浅黄染分ニ紺染出ノ紋、

但、染分ハ半分、上白、下浅黄、

右、色立ニテ面々定紋付、一幅四半ニテ上二ツ引、

地色ニ不紛様致、其下ニ紋所相付、ダシノ儀ハ面々好次第、定紋相付候得ハダシ無之候テモ相濟事ニ候、

但、四半ハ幅壹尺ニハ長壹尺五寸ノ賦ニテ候間、右割合ノ尺ニテ可相調候、地合同斷、

一右、前立物印ノ儀ハ外城衆中・又者迄モ一同ノ立物印相用申答候、

一御家老組ノ面々、指物ノ儀ハ御用ノ節ニ至リ色立等ノ儀被仰渡答候、

右ノ通、此節被相定候間、具足持合候人ハ漸々不事立様調替可申候、尤、以後具足調候人モ其通相調候様、
申脱之支配・地頭所・私領へ不事立様通達可有之候、

一右ノ段ハ触流ニハ難致儀ニ候間、月並御礼罷出候面々ハ於御城銘々直可致通達候、同役有之御役人ハ壹人ツ、無役ノ人病氣差合ハ同格名代、

一右外、与中ノ諸士ハ与頭宅工召寄、直ニ可致通達候、
一玄蕃殿・御家老・若御年寄・大御目付へハ不及通達候、
一磯御方勤ノ面々エハ不及通達候、

右ノ通可致通達候、以上、
(元文三年) 午正月

(島津久實)
主殿

四九二九

一煎薬七貼二付 代銀壹匁五分

一煉薬壹匁二付 代銀三分五厘

一目薬壹匁二付 代銀四分九厘

一膏薬七付二付 代銀壹匁五分

一粉薬七包二付 代銀七分五厘

一丸薬五拾粒二付 代銀貳分壹厘

一振薬壹貼二付 右同斷

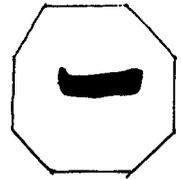
一目洗薬壹包二付 右同斷

馬薬

一煎薬七貼二付 代銀四匁九分九厘

一痛洗薬壹度分二付 代銀壹匁七厘

一目指薬壹貼二付 代銀貳分壹厘



一 膏葉壹付二付 右同断

一 目洗葉壹包二付 右同断

一 付粉葉壹包二付 右同断

一 四足并血上煎葉一煎分 代銀七分壹り

一 惡爪付葉一七日分 代銀壹匁五分

右ノ通、葉代相改候条、御物并諸人共来月朔日ヨリ右

定ノ通可相払候、此旨与中・諸外城・支配中エ不洩様

可被申渡候者也、

午七月廿一日 御家老座印

四九三〇

一 御当地ニテ万石以上乗物御免被成候、 玄蕃殿・壮之

助殿・兵庫殿家格者部屋栖迄モ御免被成、其外ハ家督

計年生ニ無構御免被成候、万石以下大身分・大御目付

以上ハ、五拾歳ニ罷成候ハ、乗物被成御免候、大御目

付以下ノ御役相勤居候テモ万石以上ハ年生ニ無構被成

御免候、且又大御目付以下ニテモ五拾才以上ニ罷成、

於江戸乗物御預被下程ノ者ハ御当地ニテモ願出次第可

被成御免候、尤、於江戸被成御免置候ハ御当地ニテ猶

以御免被成候、

右ノ通被仰付候間、承知可仕面々エ不洩様ニ可被申渡

候、以上、

但、大御目付以上ノ御役人エハ申渡ニ不及候、

午十二月 大藏

四九三一

一 医師ノ儀、忌中ニテモ無扱療治相頼、尤、見廻ノ儀不

苦候、御医師ノ儀、勤ハ遠慮任、脇方病用ニ付療治相

頼見廻候儀不苦候、此段御医師工申聞被置候、

右ノ通、表方へ致通達、御側方・御勝手方工者写ヲ以

可相達候、以上、

元文四未三月 (頼桂久庵) 左京

四九三二

写

(繼豊) 太守様当分御病中ニテ江戸エ被成御座候故、御用筋ノ儀

(吉貴) 総州様へ御頼、乍 御隠居磯ヨリ掛テ御用被 聞召候、

御家督ニテ 御本丸エ被遊御座候様ニモ無之、御家老中

ヨリモ輕事共不申上、少ニテモ御用薄候様ニ相心得罷居候半ト被思召上候、左様成所ヨリ何ト差候テモ難被聞召候得共、間々大形ノ儀モ可有之哉ト被思召候間、諸事大形無之様ニ締方ノ儀氣ヲ付、被仰渡置候趣ヲ不致忘却様ニ可相心得ト御家老中致承知、大御目付、御勝手方添役、寺社奉行、御勘定奉行、御側・表御用人、町奉行、御近習役、御目付エモ可申聞候、

右ノ通、 総州様御意候、

元文五申八月
島津權左衛門(入道)

比志島隼人(範房)

四九三三

写

カセ取打以前有之由候得共、向後停止申付候、
右ノ通、表方エ致通達、御側方・御勝手方へ者写ヲ以可相達候、

但、諸外城・私領へモ如何可申渡候、

元文六酉正月廿二日

(島津入兼)
李

四九三四

写

疱瘡人工無理ニ食事喰セ、夫故間ニハ怪我等致候者モ有之由相聞得候、向後無理ニ食事等喰セ候儀差テ無之様ニ可相心得候、

右ノ通、表方へ致通達、御側方・御勝手方へハ写ヲ以相達、組中・支配中・地頭所・私領・明所ノ外城へ可致通達候、
寛保二戌二月 主計

四九三五(の1)

(御触書寛保集成 一三九五号)

写

此度関東水損ノ所々へ米穀行届候様ニ有度儀候ノ間、損毛無之國々ヨリ商人ノ米穀勝手次第相廻、商売候様領主并地頭ヨリ領下ノ商人エ可被申付候、
右之通可被相触候、

九月

(四九三五の2)

右ノ通、從 公義被仰渡候間、乍遠国可差廻ト存候、商人者勝手次第可致候、此段与中・諸外城・支配中エ不洩

様ニ可被申渡者也、

戌十一月十九日

御家老座印

觸候、△

閏四月

四九三六

牛馬ニ重荷不付様兼テ鹿兒島中申渡趣候処ニ、頃日重荷ヲ付候モ有之由相聞得候条、向後不相応ノ重荷差テ不付様可致候、諸外城ノ儀モ同前可相心得候、右ノ通、表方へ致通達、御側方・御勝手工写ヲ以相達、組中・支配中・地頭所・私領・明所ノ外城へ可致通達候、

戌十二月

織部

四九三八(の1)

写

於町中数ノタラサル錢ヲ通用ノ儀堅致間敷候旨、先年ヨリ度々申触候ノ処、近比ニ至節季每別テ猥ニ成令難渋ノ旨願人モ有之、不埒ノ事ニ候、而替屋共者不及申ニ、其外諸商売人、以來右不足ノ錢通用イタスニオイテハ吟味ノ上急度可及沙汰候間、此旨三郷町中可触知候、以上、

亥六月

(四九三八の2)

写
火事装束美々敷不仕様^ニ、前々モ被 仰出有之候、弥其旨ヲ被相心得、組并家来等迄猶以結構無之様可被申付事、
一 近來頭巾ノシコロカサネ多ク目立候模様モ有之候、右^(鑑) 体ノ儀向後可為無用候、以上、
▽ 右之通、火消役、火事場見廻りえ申渡候之間、可被相

右ノ通、三郷町中エ被触知候由、惣年寄薩摩屋仁兵衛忰徳次郎ヨリ差出候ニ付、大坂御留主居ヨリ差越候条、此旨相守候様、町中エ可被申渡旨町奉行工申渡、地頭所・

私領・明所ノ外城ヘ不洩様ニ可申渡候、

亥八月三日

織部

四九三九

写

六拾六部經納又ハ順礼行脚モノ等、他国ヨリ御領内工入
来候節者入来候所ヨリ宰領相付、本道ヲ為送越事候得共、
近年右宰領差留置候処、經納被究置候神社仏閣外御領内
心次第行廻ノ由相聞得不締ニ候、依之向後右体ノ者入来
候所ヨリ前方ノ通宰領相付、經納所外工不立寄様申渡本
道可列越候、

右ノ通申付候条、聊大形ノ儀無之様ニ可申渡旨、町奉行・
物頭ヘ申渡、御領内境目御番所并諸外城・私領ヘモ不
洩様申渡、御勝手方ヘモ可相達候、

亥十月

空

四九四〇

写

近来面体ヲ隠シ候頭巾ヲ拵、途中ニテカフリ候者数多有

之、奉行所ヨリ尋者ニ紛敷候間、前々ヨリ有来候丸頭巾・

角頭巾ノ外一切カフリ申間敷旨、從 公義被仰渡候間、

右体ノ頭巾相用間敷候、此旨与中・支配中・諸外城ヘ不

洩様ニ可被申渡者也、

亥十二月二日

御家老座印

四九四一

写

刀脇差ノ儀ニ付テハ從 公義被仰渡置候趣モ有之候条、
朱サヤ相用候儀無用ニ可致候、尤、目立候サヤ相用間敷
候、

右ノ通、表方工致通達、御側方・御勝手方ヘモ可相達候、
延享元子十月

(龜津久純)
大藏

四九四二

口略

一外城役々、何ソ付鹿兒島ヘ差越候節、浦人・百姓共ヘ
品物調方申渡、鹿兒島ニテ自分付届ニモ相用候間得有
之不可然候条、右体ノ儀曾テ致間敷候、若右申渡ノ趣

致忘却緩セノ儀有之候ハ、可及沙汰候条、堅相守候様
可申渡候、

右ノ通、地頭・領主・月番御用人・郡奉行へ可致通達
候、

延享二丑四月

(鎌田政直)
太郎右衛門

四九四三

写

夜行・辻歌ノ儀者兼テ御禁止被仰渡置候条弥以可相守
候、且又頃日人家来其外末々ノ者ニハ致夜行候由相聞
得候、猥ニ徘徊致間敷候、

一 追掛馬イタシ又者荷付馬杯ヲ狭小路工繫置、往還ノ妨

ニ成候儀有之由相聞得候、向後右体ノ儀無之様ニ可相

心得候、

一 馬ニ重荷付間敷段ハ兼テ被仰渡置趣候条弥以可相守候、

右ノ通相守候様、組中・諸外城・支配中へ不洩様可被

申渡者也、

丑十二月朔日

御家老座印

四九四四(の1)

朱記

一世上葬礼ノ節金銀錢或ハ六道錢土中へ埋捨候事無益ノ

儀候間、右無益ノ道理ヲ寄々且方共へ説聞セ、向後金

銀錢并六道錢土中ニ埋候事相止サセ候様可仕候、俗習

ノ儀急ニ不相仕候ハ、土中へ埋不申葬可申候、右ノ趣、

江戸・京・大坂右三ヶ所近辺ノ配下迄相触候様可致候、

戌三月

(四九四四の2)

別紙、六道錢ノ御触被 仰出候間触遣候、各可被得其

意候、以上、

丑十月

江戸浅草日輪寺

四九四五

覚

諸所並松・浜松へ虫相付別テ松相痛ノ由候、右ニ付先年

ノ通虫追躡ノ儀申上候処、申出ノ通被仰付候旨、卯三月

十六日ノ御証文ヲ以被仰渡候間、松ニ虫付葉色悪敷相見

得候ハ、タイコ躡可被申付候、最早御当地ノ儀ハタイコ

躡被仰付候間可被得其意候、左候テ、躡被相調候首尾又

ハムシ付松無之所ハ其段可被申付候、且又当時迄ハ虫付候様ニ不相見得所モ有之、ムシ付無之段首尾被申出候已後ニムシ付相見得候ハ、是又踊申付、又々其首尾可被申出候、何分ニモ枯木ニ不罷成様ニ可被氣付候、以上、

延享四卯三月十八日 山奉行所

四九四六

廻国者致病死候節ハ其段遂披露死体取置、諸証文町奉行所工差出候諸所有之、又ハ不遂披露死体取置、証文等取揃町奉行所へ首尾申出候所々モ有之、諸々不相並候、依之向後廻国者病死ノ節ハ享保十八丑二月申渡置候鹿兒島根帳付外ノ旅人病死ノ者同前ノ首尾申付候条、死体取置、諸証文取揃町奉行所へ其首尾可被申出候、
右ノ通、地頭・領主・明所ノ外城へ月番御用人ヨリ申渡、町奉行へモ可申渡候、

卯五月 右平太

四九四七

写

一 近年士ノ風儀悪敷、耽利欲候者有之由相聞得、甚以不可然候、末々ノ者逆モ邪成心底無之様可相嗜候、

卯十二月

四九四八

写

一 諸所札ノ辻御高札雨掛ニテ無間モ相損、書改御物入ノ事候間、札ノ辻已後修雨ノ節ヨリヤネ板雨掛無之様、長メ棟木ヨリ下ニ式通可相掛候、柱モ御高札ノ間ニ合内法ニ掛候様可相調候、肱木ヨリ下式通掛ニ致間敷候、右ノ段御城下三町并諸外城工不洩様可被申渡候、調料有来通御物御構無之候、

右ノ通申渡、御右筆エモ可申聞置候、
延享五辰二月

(島津入道) 左衛門
(平田正輔) 掃部
取次 (貞利)
有川幸右衛門

四九四九

一 御関狩并諸所御馬追ニ付外城衆中罷越候節、供夫トシ

テ百姓召列差越候所モ有之由相聞得候間、供夫召列候

ニ及間敷候、弁当持夫等者相間ニ召列、費無之様可被

申渡候、

右ノ通、諸外城へ可被申渡旨、地頭・領主・明所八月

番御用人ヨリ可被申渡候、

辰四月

掃部

四九五〇

写

一 養子家督ノ者違変不致候テ不叶訳有之候節ハ跡相統ノ

者ヲ見立其跡へ仕居置、其者隠居ノ願可申出候、已後

依申分本家ニ立帰候様ニモ可被仰付旨、正徳三年被仰

渡置候得共、向後養子難達者於有之ハ双方親類致異見、

何レノ筋ニモ違変不致候テ不叶訳有之節ハ其身隠居ノ

願ニ不及、違変於御免ハ跡養子ノ儀ハ親類見合、追テ

可願出趣ノ書物ヲ以可申出候、

一 小番・大番倅へ代番願ノ儀、御家老承届差免事候得共、

以後ノ儀ハ、当番ノ節小番者嫡子又ハ小番ノ内名代番、

大番者嫡子・二男・三男又ハ大番ノ内名代番被仰付候、

但、一代小番・新番ハ嫡子、名代番ハ不被仰付候、

同格ノ者名代番可差出候、

一 諸士子共角入・前髪願被極置候得共、向後ノ儀ハ年生

極ニ不及、初テノ 御目見相濟、勢ヒ相応ニ相見得候

ハ、与頭可申出候、御家老見分ノ上何分ニモ可申渡候、

一 諸所へ勤方ニ付テ引越居候者・田舎入御暇被下置候者

ノ子共角入・前髪執ノ願、始テノ 御目見相濟、勢ヒ

相応ニ相見得候者ハ御当地へ差越ニ不及、其所ヨリ与

頭へ相付願可申出候、見分ニ不及何分ニモ可申渡候、

一 諸人御礼事等屹立候願書ハ豎紙、其外ノ儀ハ文言依長

短豎紙・横紙相用候様被仰渡置候得共、向後ノ儀ハ豎

紙・横紙ニテモ勝手次第可相用候、

右ノ通、表方へ致通達、御側方・御勝手方へハ写ヲ以

可相達候、

(延享五年)
辰四月

(島津久臣)
大藏

四九五一(の上)

(四九五〇号行間朱書)
写

一 諸外城役々衆中共諸百姓へ米錢借付置、別テ高利ヲ取

又ハ利錢ノ方ニ門地ヲ相禿、致支配候地面ニハ諸出錢

不相懸候付、都テノ百姓共及不勝手ノ由候、

一異国方為御用被寄置候人馬ヲ所役々自分用事ニ召仕由候、

一百姓中諸奉公請ニ出候儀有之由候、所役々百姓共へ得ト不申聞請方申付事モ有之由候、

一依所候テハ諸役々へ田地ヲ仕付、致加勢相濟候已後百姓自分作職ニ取掛候故、時節後ニ相成作職致不出来弥差迫由候、

一下リ竿上見其外百姓共願有之候節、所役々へ致進物候上願申出事ノ由候、

一依所百姓共不致同意候得共、其上委敷迷吟味候儀モ無之、門割直竿ノ願等振テ申出候様申付儀モ有之由候、

一諸百姓其身又ハ妻子ノ内年季暇申出候節、祝料差出候由為差廻候故、年季暇ヲモ申出事候処不宜仕形候、

一牛馬改ノ節、牛馬ニ相掛候出銀外出錢申付馳走用致来由候、且又牛馬改ノ節、不得出者エハ利ヲ相掛、役人

致御用由候、

一庄屋正月・八朔其外節句ニ百姓共ヨリ米麦類為出ノ由

候、

一 所役ノ用夫壹兩人モ平日自分用事ニ召仕置、諸用夫ニ相懸候出錢米不相懸ノ由候、

一 庄屋へ百姓中ヨリ壹人壹日ノ加勢仕来候処、近年八百姓前ヨリ銀錢ノ間頭ニテ受取、其上庄屋近辺ノ百姓共ヲ自分召仕由候、

一 庄屋役代合ノ節、本庄屋家作調遣ノ由候、其上家内ノ者召置候家ヲモ百姓共へ為作候故、大分ノ夫費有之由、間ニハ普請料錢ニテ相受取者モ有之由候、

一 櫛代米・日用代米其外被下候米錢、百姓共へ憲法ニ不相渡儀モ有之、且又宿送御奉公不相勤者へモ日用代米相渡所モ有之、所役々押へ置事モ有之由候、

一 山奉行廻ノ節、入用ノ竹木申受候付、半紙・墨代相懸受取置、山奉行差人付テ入目又ハ竹木代相納候節、諸

仕方相払、殘錢ハ山方役々致勝手由候、

一 山方役人共携候祭礼ノ節、百姓共へ米為出ノ由候、

一 山方諸札運上銀外ニ入目錢相懸、行司役ノ者受取、自分勝手ニ致由候、

一 諸所取納究ノ儀付テモ段々不宜仕形モ有之由候、

一 嘜・郡見廻・庄屋方へ客人有之候節、諸野菜類各方へ申付、且又普請晝替等ノ節モ百姓共へ申付由候、

一 諸外城役々、御用ニ付鹿兒島へ差越候節、地頭所進物又ハ所役所ニテ何用ニ付、召仕候入目ノ由ニテ百姓中へ出銭申付、所中相談ノ節又ハ村々差入ノ剋、料理又ハ吸物・取肴・酒等取ハヤシ候諸入目相掛百姓中へ大分申付ノ由候、

一 名頭致付属ノ節、嘜・郡見廻・庄屋多人數相集料理等申付、且又百姓普請調候節モ役々多人數差越為致馳走儀モ有之由候、

一 御関狩・御馬追ニ罷越、又ハ私用ニ付鹿兒島へ差越候節、郡見廻申談賦付ノ外二人馬ヲ取候故、大分費及ノ由候、

以上、

四月

(四九五一の?)

諸外城ノ内、別紙ノ通聞得候所モ有之候、百姓共別テ致困窮被納方相滞御損亡被出候、畢竟所役々兼テ被仰渡置候趣取違不可然事候間、早速可相改候、若緩ノ儀

於有之ハ屹可及沙汰候、別紙ノ外ニモ御法ニ不相叶儀

ト存付候事ハ可相改候、段々不宜聞得モ候間、追テ及沙汰儀モ可有之候、右ノ趣、地頭・領主へ申渡、地頭・領主ヨリ所役目ノ者召呼申渡、於所役々立合締方横目モ差添人別ニ申渡、百姓共へモ承知可為仕候、何月何日申渡候段首尾申出候様、是又可被申渡旨可申渡候、

四月

左衛門

掃部

取次

有川幸右衛門

四九五二

写

一 御役人・小役人、諸人願事ニ付進物受納不致事候処、間ニハ無案内ニテ進物遣候モ有之、又ハ願ノ趣不申聞已前致進物置、追テ願ノ旨趣申聞儀モ有之候、右体ノ進物一切イタス間敷候、此旨与中・支配中・諸外城へ不洩様可被申渡者也、

辰四月廿二日

御家老座印

四九五三

写

一 諸御奉公人、諸外城へ差越候節、所役々ヨリ進物又ハ馳走イタシ、自分付届ノ様被成、入料百姓へ割付候故出来・出錢過分及、其上夫仕多別テ致困窮ノ由候間、右体ノ儀曾テ無之様可相心得候、若緩セノ儀於有之ハ屹卜御沙汰可被仰付候、所々へ差越候面々モ存其趣、兼テ被仰渡置候通可相嗜候、

右ノ通、表方へ致通達、御側方・御勝手方へハ写ヲ以相達、諸外城へモ可被申渡候、

辰四月

左衛門

有川幸右衛門

四九五四

写

一 御当地・諸外城ノ者、勘定方又ハ座々ヨリ手形引付等申受候節、日数为滞ノ儀有之由相聞得不可然事候間、右体ノ儀無之様可相心得候、就中外城ノ者日数及滞在候テハ致迷惑ノ由候間、諸事不洩様奉行・頭人ヨリ屹

卜可申付候、若緩ノ聞得モ候ハ、可及沙汰候、

辰四月

左衛門

有川幸右衛門

四九五五

一 借銀ノ利合高利致間敷旨、先年ヨリ被仰渡置候、弥其通可相心得候、諸外城ノ儀ハ借銀・借米致高利取遣ノ者モ有之由相聞得不可然事ニ候間、相応ノ利合ニテ自由無之様取遣可致候、若高利取候聞得モ候ハ、屹可及御沙汰候、此旨与中・支配中・諸外城へ可被申渡者也、

辰四月廿五日

御家老座印

四九五六

写

一 御側衆・諸御役人其外拜借申出候人多々有之候、身帯差廻無扱者迄訴訟申出筈候得共、随分儉約用可成程訴訟ケ間敷儀不申出様可心掛候、一 江戸へ相話候面々、分限不相応ノ調物又ハ佳成致参会

等差廻、訴訟申出人モ可有之候条、右通ノ儀會テ不仕

様可心懸候、為差知病人旅中ノ銀子才覚不相調人ハ被

定置候通可被仰付候、其免難達、於御国元早速上納ノ

筋ヲ以御取替ノ願申出候ハ、訳ニヨリ可被仰付候、

右ノ趣、毎度被仰渡事候得共、當時別テ御所帯向難取

続砌ニ候条、猶以委被遂吟味聞合等被仰付、其上ニテ

何分ニモ可被仰付候、万一不勤ノ聞得モ候ハ、吃卜被

仰付様モ可有之候条、此旨御役人限致通達、御側方・

御勝手方へ写ヲ以可相達候、

辰四月

左衛門

四九五七(の1)

写

一人家来ノ者、主人乗馬致外乗候節、納殿役人以上ハ勿

論御役人其外兼テ士卜見及候人へハ都テ可致下馬候、

此段可被申付置候、已上、

五月

(四九五七の2)

右ノ通、口達ニテ寄々通達可致旨、作左衛門殿被仰候、

以上、

辰五月廿二日

御目付

四九五八

一旅人為商売諸外城へ差越候節ハ三ヶ外城宛書ニテ問屋

付状ヲ以差越、在々へ入込諸色致商売来候処、問ニハ

高直ニ売渡聞得モ有之候、向後旅人諸外城工入込相對

致商売儀被差止候、御当地又ハ何方外城ニテモ旅人

持来候諸色、其所ノ旅人問屋并商人共買取置、売払候

儀ハ勝手次第可有之候、左候テ、買取置候品々高直ニ

不売出候様稠可被申渡候、尤、問屋ヨリ買取売払候筋

ニテ、内々者旅人ヨリ致差引商売方イタシ候儀共會テ

無之様可被申渡候、此旨主計殿御差図ニテ候、以上、

寛延二巳二月廿三日

川田与右衛門

四九五九

覚

一諸所認犬山ニテ取得候鹿皮上納申渡候処ニ、都城ノ儀

他領境目ノ訳ヲ以以前ヨリ皮上納御免ノ申伝ニテ跡々

上納無之由ニテ被申出趣有之、得御差図候処、他領へ相境候鹿倉ニテ取得候ハ、猪鹿共ニ其者自用、内場鹿倉ニテ取得候節ハ、猪ハ片平鹿皮上納被仰付候旨、巳四月十七日肥後平左衛門殿御取次以御証文被仰渡候、尤、右締方付テハ詰居候締方横目又ハ所横目承届、証文相渡置答候間可被得其意候、以上、

巳五月二日

山奉行所

都城役人中

四九六〇

一銀錢米穀等借付、不相応ノ高利取間敷候旨兼テ被仰渡置候、弥其旨ヲ相守式割巳下相对次第随分軽利足ニテ可致取遣候、自然右以上ニテ借付候聞得於有之者吃可及沙汰候、

右ノ通、与中・支配中・諸外城・私領へ不洩様ニ可被申渡者也、

巳五月十三日

御家老座印

四九六一(の1)

御袖判

一今度我等エ家督無相違被 仰出候、領国ノ輩専重 公義ノ御政道万端可相慎也、国家ノ仕置御先代ノ通申付候条、不致忘却堅固可相守者也、

寛延二年十一月十六日

(四九六一の2)

今度 御家督無相違被 仰付候付テ以 御袖判被 仰出趣、御領国ノ輩謹テ相守之、第一重 公義御政道、御家ノ御仕置御先代被定置候通被 仰付事候条可奉得其意、 御代替ノ時節候得ハ他所ヨリ諸事氣ヲ付、批判モ可有之候間、古来ヨリノ風俗ヲ不乱万端可相慎之也、

寛延二年巳十二月

(島津久徳)

主殿

(榊山久初)

主計

(義岡久中)

相馬

(鎌田政昌)

典膳

(平田正輔)

取負

四九六二(の1)

(御触書宝曆集成 一〇六九号)

写

一 大御目付工ナシ

国々私領ノ百姓年貢取筋備或夫食種貸等ノ願筋ニ付、領主・地頭城下陣屋又ハ門前ハ大勢相集リ訴訟イタシ候儀、近来間々有之由相聞得候ナシ、都テ強訴徒党又ハ逃散候儀者堅停止ニ候処、不届至極ニ候、自今以後右体ノ儀有之ニオイテハ急度遂吟味、頭取并差統事ヲ工ミ候者夫々急度曲事ニ可被申付候、右ノ通、向々可被相触候、

寛延三年正月

(四九六二の2)

右ノ通、從 公義被仰渡候条、此旨組中・支配中・諸外城工不洩様可申渡者也、

三月十八日

御家老座印

月番御用人

四九六三

御筆写

一 國中連々ヲコロノ体ニ成行、御先代段々被 仰出オ

モムキ有之候処、頃日ニ至諸事緩セノダン相聞得候、重役中又者一門・大身ノ面々質朴ニ有之候ハ、自イツレモ違背不致筈ニ候、此度家督初テ入国ニ付旧式ノ儀共ハ事輕申付、此節一涯自分物数寄ヲ相止、衣服等モ御先代ノ通弥龜服相用、万事古風ノ体ニ申付了簡ニ候条可得其意候、不図オモイ違無益ノ儀、物入等ノ事共申渡候ハ、家老勝手方ヨリ不差置可相止旨幾度モ可申聞候、適々存寄ノ儀ヲ差控候テハ心ニ不相叶候、重役ヲハシメ大身ノ面々同心イタシ、忘却無之候ハ、國中末々迄モ自然ト思ノ通可相成事ニ候、万一了簡違ノ者有之、不相応ノ儀共候ハ、誰人ノ上ニテモ役々兼テ氣ヲ付申出候様可申付候、

寛延四未六月

四九六四

一 平日ノ時付状者老人持、

一 異国方御用其外常式ニ相替候、別テ急事ノ節ハ其段宿

次ニ書記可有之候間、兩人持ニ可被申付候、

右ノ宿次状持定ノ儀、正徳六申年右通被仰渡候付、其段早速申渡置候得共、程久敷事故役々代合付テハ不存モ有之、自然間違ニ相成候テハ別テ如何ノ事候間、右ノ段又々申渡候、

一右通申渡置候間、異国方御用其外常式ニ相替候、別テ急成御用申上候節ハ宿次ニ其段委細書記可差越候、於其儀ハ中途持夫兩人可申付候、

一御印紙相付候宿次状ハ格別候故、此内ノ通兩人ニテ持届候様可被申付候、

右ノ通、此節又々申渡候間各被得其意、間違無之様可被致首尾候、左候テ、向後失念不致様右ノ趣書写壁書イタシ置、役々代合ノ節ハ堅固可被次渡候、右通再篇申渡置候上、此已後相滞候ハ、屹ト可及御沙汰候、

宝曆二申五月六日

郡奉行

四九六五

写

一諸人願事ニ付進物受用不致事候処ニ、間ニハ無案内ニテ進物遣候モ可有之儀候故、右体ノ進物取遣致間敷候、

乍此上願事ニ付進物等イタシ候人有之候ハ、曾テ致受用間敷候、

一諸奉公人、諸外城へ差越候節、所役々ヨリ進物又ハ致馳走、自分付届候様ニ取成、入料百姓共へ割付候故出錢・出米及過分、其上夫仕多百姓共致困窮ノ由候、且又外城役々何ソ付鹿兒島へ差越候節、浦人・百姓共へ品物調方申渡、鹿兒島ニテ自分付届等ニモ相用候間得有之不可然候条、右体ノ儀曾テ無之様可相心得候、若緩七候儀於有之ハ可及沙汰候、諸外城へ差越候面々モ此旨ヲ存可相嗜候、

右者、先年以来段々申渡置候得共、程経候得ハ漸々緩ニ相成候付、弥右ノ旨堅可相守、若緩ノ儀有之候ハ、可及沙汰候、

宝曆三酉三月

(平田正輔)
靱負

四九六六

写

一於諸所入組詮義事等付速吟味候節、役々并差寄候面々へ本人ヨリ賄等ノ入目出候モ有之由相聞得候、右次第

ニテハ入目料出候儀難成付披露事等差控候者モ可有之

四九六八

候、出銀米相懸候儀付テハ従以前段々申渡置趣モ候条、
向後右体ノ儀付差寄候役々其外ノ面々自分弁当ニテ相
済、本人并類中杯へ入目料相掛間敷候、

一六拾六部・廻国者類罷通候節ハ、外城ハ衆中、私領者
家来宰領ニテ本道差通、辺土差通間敷旨、先年被仰渡
置候処、頃日不締ニ有之、辺土ヲ差通又ハ為致托鉢、

右ノ趣堅可相守旨、人別為致承知候様可被申渡旨、地
頭・領主・寺社奉行・月番御用人・町奉行・郡奉行へ
可申渡候、

宰領ノ詮無之外城モ有之由相聞得如何ノ儀候間、向後
右体不締ノ儀曾テ無之様、宰領人中途付通ニテ列越候
様可申付候、乍此上大形ノ儀有之候ハ、屹卜可及沙汰
候間、聊大形有之間敷候、以上、

宝曆五亥三月

(島津久満)
主殿

亥六月

町奉行所

四九六七

一 諸外城へ差越候諸御奉公人御用外色々申立、自分用事

四九六九

二 付人夫召仕候者モ有之由相聞得不可然事候、若右体

写

ノ者有之候ハ、所役々申談、自分用事二人夫不召仕様
相逢、乍其上召仕候者モ有之候ハ、可申出候、聊大形
有之間敷也、

一 重^シ家^イ治^ハ竹^ク豊^ト繼^フ洪^シ忠^ク
右文字、実名致遠慮、同唱ノ文字迄モ可致遠慮候、
但、竹ノ字ハ先年被仰渡置候通、名ニ付候儀モ可致

但、右ノ趣、所役々へモ可申聞置也、

遠慮候、

亥二月十五日

大御目付座印

貴 吉 信 宗 年

右文字、実名可致遠慮候、同唱ノ文字不及遠慮候、

朝 頼 久

右文字、先年ヨリ被仰渡候通可相心得候、

右者、実名ノ文字以前ヨリ段々遠慮被仰渡置候得共、

右外ノ文字ハ不及遠慮候、此旨御役人限致通達、与中・

支配中・諸外城・私領へ可被申渡旨可致通達候、

(宝曆五年)

亥十一月

(島津久亮)

凶書

四九七〇

写

一去ル辰年御減方以来年頭御規式其外 御名代御代参又

ハ元服理髪ノ人 御目見候節、奏者番熨斗目・長袴致

着用来候分無用、年頭諸御役人熨斗目無用、御家老直

申渡以下ノ御役人平日上下着用不及、筆者・小役人中

途迄袴着イタシ、於御役座中帶勤、且又御一門ヲ始供

廻減少被仰付置候得共、面々差テ欠略ノ詮モ不相見得、

大身・小身共内証ノ物人多、表立テノ勤調兼候人モ有

之由候、依之来年頭ヨリ向後支度以前ノ通諸御役人正

月七日迄・十一日・十五日熨斗目・麻上下着用、平日

上下着用、筆者・小役人支度都テ辰年以前ノ通、御一

門ヲ始供廻ノ儀ハ享保九年被仰渡置候通被仰付候条、

人々内証ノ物入無之、表立テノ勤向不相欠様專可心懸
候、

但、供廻ノ儀、依人右定ヨリ可相減卜存候人ハ勝手

候、

次第二候、

右ノ通被仰付候条、表方へ致通達、御側方・御隠居御

方・御勝手方へハ写ヲ以可相達候、

亥十二月

相馬

四九七一

写

一人家来、主人乘馬致外乗候儀付、於途中諸士へ行逢候

節式対ノ儀、去ル辰五月本田作左衛門殿ヨリ被仰渡趣

有之、其砌致通達置候、然共右被仰渡置候儀ハ御取返

被成、此節被仰渡候ハ右式対ノ儀付テハ以前ヨリ被仰

渡趣モ有之候間、諸士ト見受候者家中者ヨリハ不及下

馬候テ不叶事候、其外ノ儀ニテモ兼テ被仰渡置候通可

相心得候、右ノ趣、後年ニ至取違無之様可申渡置旨、

(川田國福)
伊織殿ヨリ被仰渡、高崎四郎右衛門承知仕致通達候、

以上、

宝曆七丑三月八日

御目付

四九七二(の1)

写

一都テ道中往来ノ面々、人馬先触可有之儀候処、先触無
之面々モ有之故於宿々人馬差支、其上日々為用意助郷
村々へ人馬触当候間、余計ノ人馬相当リ助郷村々及難
儀候趣相聞得候付、以来者都テ往来共一同宿々へ人馬
先触可被差出候、尤、以来參勤交代ノ節ハ勿論御家来
中道中往来ノ節モ人馬入用ノ砌ハ宿々へ先触被差出、
勿論御自分并御家来共先触写道中奉行へ可被差出候、
右ノ趣、今度堀田相模守殿^(正亮)へ相窺申達候条、其旨可被
相心得候、以上、

宝曆八寅十一月

(四九七二の2)

右ノ通、此節御勘定奉行菅沼下野守様ヨリ被仰渡候間、^(定秀)

道中往来人数不依多少、東海道人馬入用分致先触罷通、
江戸御当地共着涯早速触書写御用人へ可差出候、左候
テ、右書付道中御奉行へ被差出事候間、延引有之間敷

候、式日御使飛脚等ハ夜白罷通候条、先触ノ詮無之故

不及其沙汰候、此旨与中・支配中・諸外城へ不洩様可
申渡者也、

十二月十五日

御家老座印

四九七三

写

一私領持ノ面々、役人被申付候節ハ誓詞ノ願被申出答候
得共、問二者相洩候モ有之候間、其節々誓詞ノ願可被
申出候、尤、当分役人勤居誓詞不相濟者有之候ハ、此
節誓詞ノ願可被申出候、
右ノ通、不洩様可申渡候、

宝曆九卯六月

^(島津久峯)
本

^(林義清)
式部

四九七四

一旅人振売市立候儀、従已前御法度被仰渡置候処、緩セ
ノ聞得有之、寛保三亥年締方ノ儀、上方九州問屋へ申
渡置候付、問屋付旅人ハ振売市立無之様為申渡置答候、

頃日諸外城へ市立致振売候旅人有之由相聞得候、間屋
付旅人ハ右体ノ儀無之、廿日滞在旅船ノ水主共振売市
立ニテモ可有之候哉、兼テ締方被仰渡置候処、猥致振
売候段別テ不宜候間、旅船居浦ノ諸所へ入津ノ節、右
体振売市立等無之様申渡、商売物ハ旅人宿ニテ相払候
様可申渡候、万一相違ノ儀有之候ハ、可及沙汰候、居
浦ノ外城モ旅人宿外ノ振売市立不罷成段申聞、違背ノ
者モ有之候ハ早速帰国可申付候、尤、依詔ハ当座へ可
得差因候、迷吟味何分可申渡候間、無大形様旅人宿へ
申渡、役々氣ヲ付可差止候、乍此上大形ノ聞得モ有之
候ハ、所役々可為越度候、緩セノ儀無之様可相心得候、
以上、

卯十月廿五日

町奉行所印

四九七五

口達覚

諸外城横目ノ内病氣又ハ何ソ付差支候節、心得違ニテ役々
申談寄役申付候所モ間ニハ有之候、横目役ノ儀ハ格別成
事候得ハ一往迎モ不得差因申付候儀不締方へモ有之、旁

如何成儀候条、右体ノ儀無之様地頭・領主心得ヲ以可
申渡置候、

宝曆十辰正月

(名越信隆)
左源太

四九七六

覚

一 当所諸外城神社、歳暮年頭規式ニテ神楽祭礼太鼓打候
儀共ハ御忌中ニテモ無御構候間、有来通ニ可勤候事、
一 神楽執行ノ砌、神前神酒披取ハヤシ候儀物静仕、酒宴
カマシク仕間敷事、
一 神事祭礼ノ旧式ニ候共、御忌中ニ候間、牲狩コトキノ
事ハ無用候、
一 神事祭礼ニハ諸外城ノ噺中先規ヲ以、御名代参等勤来
候儀御座候得共、御服忌ノ内ハ、御名代参無之筈候間
可有其心得事、
一 神事祭礼ノ儀ハ御忌中ニテモ国家ノ御祈禱故、ケ様ノ
折目程神前ノ勤ハ無懈怠任筈ニ候間可有其心得事、
右ノ通、寺社奉行ヨリ諸外城へハ相触候様被仰出候、
右ノ通、元禄七年被仰出置候処、近年御慎ノ節神楽祭

礼太鼓等ノ儀不相弁候付、此節御慎ニ付本田出羽守ヨリ申出趣有之相伺候処、元禄七年被仰渡置候通神楽祭礼太鼓等打候儀不苦旨被仰渡候間、向後左様相心得候様、神社格護ノ社司別当寺へ不洩様可申渡候、

宝曆十一巳七月十日 寺社奉行所

四九七七(の1) (御触書天明集成 二〇二九号)

写

一^{ケシ}只今迄元来寺地ニテ無之百姓所持ノ地所ヲ寺院へ致寄付、又ハ讓地等ニイ^{ケシ}タシ候モ有之、右ノ地所ハ他^モノ寺院或ハ他寺ノ塔頭等エ讓渡シ右場所へ引寺等イ^{ケシ}タシ、又ハ本寺離未致シ、願主勝手ノ宗旨ニ仕替^{ケシ}へ引寺イ^{ケシ}タシ、或^ハ当時退転寺号付水帳等ニ有之ヲ取立、引寺号ニイ^{ケシ}タシ候儀并墓所詰リ添地寄進、境内へ囲置^込候儀、右ノ類自今可為無用候、百姓ハ勿論タトへ領主・地頭タリトイフトモ田畑猥ニ寺院へ致寄付候儀、容易ニハ難成事^ニ候、
右ノ通可被相触候、

二月

(四九七七の2)

右ノ通、從 公義被仰渡候条、此旨承知仕候様、与中・支配中・諸外城へ不洩様可申渡者也、

宝曆十二年四月十三日 御家老座印

四九七八

写

外城衆中直子無之、寄合以上ノ家来・従弟ノ続迄ハ養子御免被仰付事候処、近年右体続ノ訳ヲ以願出候者多候、依之向後衆中ノ内血筋ニテ養子罷成者無之候ハ、衆中ニ男三男ノ内ヨリ願出、究テ養子罷成者無之候ハ、右家来ノ内血筋迄ヲ御免可被仰付候、
右ノ通被相定候条、此旨寄合以上ノ面々并諸外城へ申渡、御勘定奉行エモ可申渡候、

宝曆十三未八月

(高橋種孝) 此面

四九七九

写

御鷹工於途中參逢候節ハ慇懃成体ニテ罷通候様可仕候、

右ノ通、表方へ可致通達候、

宝曆十四申正月

(島津久金)
左中

四九八〇

一頃日住居不慥者、諸所へ賃取・日用取トシテ入込、又ハ商人ノ姿ニテ為差売買モ不致ウロタヘ候者モ有之由相聞得候、右体ノ者へ為致宿亦者備置候儀曾テ致間敷候、近年欠落者在所ヲ替、名ヲ偽入来、於諸所致致又者野放ノ馬ヲ盜拔候者モ有之、別テ不締ニ候、向後右式ノ者人來候ハ、自他国ニ不依是ヲ留置致糺方、若不審ノ儀モ候ハ、其段早々可申出候、欠落者ノ儀ハ御廻文ヲ以屹被仰渡儀候得共、山野木屋々へ致住居候者共致忘却儀モ可有之候条、右体ノ者相見得候節ハ留置、其所役メノ者へ早速可申出旨、時々可申付置候、右ノ通、大御目付衆被仰候条、自然緩セノ儀モ有之候ハ、其所可為越度候条、随分役々申談不締ニ無之様可申渡置候、聊大形有之間敷候、以上、

明和二酉二月五日

札明奉行
黒岩庄左衛門

四九八一

写

一江戸御国元ヨリノ御使便ニ何ソ付差上候披露状者有来通折紙ニ相認候様可仕候、諸人頼候書状等モ大分ノ事ニテ荷高相成候所ニ中途相滞致迷惑儀モ有之由相聞得候、折紙ニ認候テハ費モ有之、且手細ニモ相成筈候間、向後諸人互ノ書通者勿論御家老へ何ソ付礼状等モ半切ニ相調不苦候、

右ノ通、表方へ致通達、御側方・御勝手方へハ写ヲ以可相達候、

西七月

此面

四九八二(の1)

(御触書天明集成 二八四一号)

写

一此度、文字銀同位ヲ以、掛メ五匁^ニ定リ候銀吹立被仰付候条、有来丁銀・小玉銀ニ取交、渡方・請取方無滞可致通用候、

右ノ趣、国々へモ可触知者也、

西九月

▽右之通、可被相觸候、△

(四九八二の2)

右ノ通、從 公義被仰渡候段申來候、此旨諸外城へ可
申渡者也、

西十月

左京

四九八三

写

一 欠落者并無宿者方々ウロタへ、或名元ヲ偽宿ヲ借り、
或ハ日雇ニテ罷居、似セ証文抔取拵日雇ヲ取居於方々
致盜等儀多々有之候、右体不慥成者ノ儀付テハ從前々
段々稠敷被仰渡置趣有之候付、右体ノ者日雇又ハ宿等
借候儀ハ一切無之筈候処、就中末々ノ者共大形相心得
候処ヨリ今以仰渡不相届方ニテ別テ不宜候条、右体ノ
者人來候ハ、早速支配又ハ横目へ相付可申出候、
一 質屋締方ノ儀付テハ前々ヨリ別紙ノ通被仰渡置候処、
近年者借主名前等相偽、質屋使ノ者へ頼致質借、又ハ
質屋使工不相頼直ニ致質借候モ有之、適盜物見當候テ
モ致盜候者不相知儀多々有之不宜候条、向後兼テ質屋

使定置候者ノ外品物持來候共一切致質借間敷候、尤、
定置候質使ノ者共持來候品物迪モ時々借置、慥成訳質
屋使ノモノへ承届候上可致質借候、若疑敷廉於有之ハ
借主ノモノ差留置、早速支配又ハ横目へ相付可申出候、
糺方ノ上自然借主盜等ノ不審於有之ハ可申出、尤、不
審難遁相見得候者ハ番人付置、諸外城・私領ハ宰領相
付御当地へ列越、其首尾可申出候、

一 御当地并外城・私領共被定置候質屋外ニ内々質屋ゴト
クニ致質借候聞得有之不宜仕形候、密々ノ致方付テハ
縦盜ノ品ト為心付儀モ可隠居事ニテ、專御詮儀ノフサ
カリニ相成不届ノ至ニ候条、右体ノ仕形一切不致様可
申付候、乍此上相背者於有之者、其者ハ勿論親類・与
中至役々屹ト可及沙汰候、

右ハ、頃日盜多、畢竟不慥成者共方々ウロタへ居候処
ヨリ右体ノ儀モ有之、且又盜物ノ品過半致質借方候処、
以前ヨリ質屋并質屋使締方ノ儀付テハ別紙ノ通為被仰
渡置事候故、漸々緩セ成行仰渡ノ趣不相守方相見得、
別テ不宜候条、別紙此以前仰渡并此旨屹ト相守候様、
質屋共へモ申渡候間、右ノ趣与中ハ与頭、地頭・領主

右外支配頭ヨリ屹ト可申渡候、

明和三戌九月

大御目付

四九八四

覚

一陰陽道

一兵道

一神子門長ミコホサ

一子安観音守

一浄光明寺支配本願ノ者

右者、人家来・寺門前又ハ百姓類ノ軽キ者共、兵道方・

陰陽道・神道方軽キ作法抔少々致稽古候由ニテ為差師

匠モ不相知、本式ノ伝法モ不致、夫々一道ノ訳モ不相

知、色々取交祈禱等敷呪等イタシ候者有之候由、正法

ノ筋モ不相知、別テ不相応不宜候間、噫・役人・横目

其外宗門方役繰ノ面々氣ヲ付、不依僧俗右体ノ者於有

之ハ可差留候、乍其上右体致執行候者有之候ハ、相糺

当座ヘ可申出候、尤、神子門長ノ儀ハ、先年御禁止被

仰渡置候付テハ致執行候者無之筈候得共、程過候得ハ、

自然ハ神子門長ノ業取行候者有之候ハ、堅可差留候、

且子安観音寺ノ儀モ右同断相心得可差留候、浄光明寺

支配ノ本願、鐘打房ト称シ諸所差廻候由、右本願イハ

浄光明寺并一宗ノ寺院ヨリ証書相渡相廻事候間、自然

右書付不致所持相廻候者有之候ハ、是又可差留候、前

文ノ通申渡候上右体致執行候者於有之ハ所役々越度可

相成候、一向宗締方付紛敷候間、緩セノ儀無之様可致

旨、当座ヨリ申渡候様被仰渡候間、此段申渡候、

明和四亥二月

寺社奉行所

四九八五(の1)

(御触書天明集成 二二八四四号)

写

一灰吹銀・潰銀等銀座ノ外他所ニテ売買停止ノ旨前々相

触、銀道具下銀入用ノ節ハ銀座ニテ可買渡旨、去ル亥

年相触候処、又々猥ニ相成候段相聞得候、且町方ニテ

銀櫛・弁其外銀器類専用候旨相聞得不埒候、以来右

体ノ無益ノ銀道具拵候儀一切致間敷候、

右ノ趣、宝曆三西年相触候処、又々近来猥ニ成候由相

聞得不埒候間、堅可相守候、若内々ニテ売買イタシ

候者於有之ハ急度可申付候、

亥五月

右ノ通可被相触候、

(四九八五の?)

右ノ通、從 公義被仰渡候条、此旨諸外城へ不洩様可
申渡者也、

六月晦日

御家老座印

四九八六

写

亥十二月

藤馬 伊織

右、正徳三癸巳年ヨリ明和四丁亥迄年数凡五十五年、
式冊、合百三拾六年也、
明和五戊子年書拔畢、

一 拝借取込有之人、皆返上無之内高直御免被仰付間敷旨
先年被仰渡置候得共、拝借有之人ハ持高ノ^(年賦之)応多少年府
等ノ上納迄ニテ返上方相重儀モ無之、数十年相掛差支
二 相成儀共有之、依之向後拝借取込有之人高相求候儀、
拝借取込候応員数、其高ノ所務皆同差上候様、又ハ依
願ノ訳半分方差上候儀、又ハ無拠依訳ハ其内ニテモ被
極置候、返上ノ外ニ相重差上候儀ハ格別候故、時々吟
味ノ上高直御免可被成候間、右体ノ願可致人ハ勝手次
第可有之候、
一 諸外城衆中、拝借取込又ハ延米・飢拝借米等有之者モ
同然候間、依願ノ訳高直并持留高御免可被成候、
右ノ通被仰付候条、可承面々へ不洩様可申渡候、